

明治四十二年十二月二十二日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第五拾六號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第五拾六號目次

本欄

○賦的主義……………赤井直好

○くれのおも物語……………たけを

○日本國民より見たる梅と櫻……………鈴木青花

○四高和歌會詠草……………

○秋二十句……………春夢

○四高俳句會句鈔……………

時評

○如是觀七則……………

○野球部に寄す……………

○庭球部に望む……………

○南下軍?……………

趣味の墮落……………

文科諸子に告ぐ……………

寂しき世……………

わが心樂まん乎……………

秋燈餘燼……………

部報

○演說部 野球部……………

雜報

○東宮殿下行啓記○叙任辭令○卒業證書授與式○卒業生諸君を送る○新學年來れり矣○新人生諸子を迎ふ○校旗制定式○新人生歡迎會○行軍記事(十月十一日)○行軍記事(十月十四日)○第四高等學校第十七回陸上運動會記事○運動會と時習寮○阿部眞見君を悼む○肥佐多、茂木兩君を憶ふ○肥佐多、茂木兩君搜索の概況○明治四十一年度北辰會費決定計算書○寄贈書籍○寄贈雜誌

附錄

○阿部秋雨追悼錄……………



校 旗 制 定 式

北辰會雜誌第五十六號

本欄

斌的主義の説

枝光寅太郎

文と武とは古より之を貴び、或は之を鳥の兩翼に譬へ、或は之を車の兩輪に準ふ、誠に爾り、唯武のみを以て國を建つる能はず、唯文のみを以て國を守る能はず、文以て内を治め武以て外に對す、王者常に之を道とす。

然れども文と武とは之を相分ちて用ふべきに非ず、文武合體又は文武不岐の語あり。予此意義に於て文武の二字益其光を増すものなりと信ず、之を字形にすれば即ち斌の字之なり、此意を以て事に處するの主義あらば、予之を斌的主義と稱せんと欲す、文事を遂行するに武的猛勇を用ひ、武事を斷行するに文的細心を用ふるの謂なり、文事も勇無くんば之を成すに難く、武事も細心ならずんば敗れ易しとす、文武は二事に非ずして一なり、斌即之なり。

往時エリザベス女王の英國に君臨するや、英國の海運及製造業未だ振はず、西班牙の隆盛に及ばざるを以て、私闘に依りて西班牙人を苦しましむるの得策なるを思ひ、海賊とも稱すべきドレークに海上横行の特権を與へ、其の世界周航を完了したるに當りては、セシル侯の諫言を斥けてドレークを貴族に列し、異日無敵艦隊を撃破するの基礎を造りたるが如き、又は漁業獎勵の爲には國民をして毎週二日に魚肉を食せしむるの令を發し、之に従ふ能はざる者は所領寺院の許可を受けしめたるが如き、又は諸種の消費制限法を定めて、製造業の發達を促したると、殆んど狂熱に類したるが如きは、予の所謂斌的主義の實行と認むるを得べし。

又見ずやクロムウエルの對和蘭海運政策を、其の航海條例の内容は政策の違算なきを期圖するの用意周到にして、一たび之を發しては其の實行の勢流水の滔々として遮る能はざるが如く、英國の國是とする所を後代に垂示し、英國海運界の永く其の恩恵に浴するを得たるは、文武一義の主義に非ずして何ぞや。

更に那翁の歐洲を蹂躪するに當り、自國の内政に留意したるの蹟歴然として、一世を掩ふの武名も佛國の文政と關聯せる所鮮からざるを見る、其文政の主意とせし所は、戰爭に必要な人と物とを、總て佛國內に於て充足せしめんとするに在りしと雖とも、商工業會議所の創設といひ、商標權法及商法典の編纂といひ、諸種の交通機關の増設及整備といひ、商業組合の再興といひ、殖民地産物の代用品發見といひ、化學作用による工藝の進歩といひ、皆是れ那翁の武名を輝かすに必要な後援を作成したるものなり、彼自ら此後援を完備せんが爲めには、尙博覽會を開くこと

再度に及び、能く文事に忠實にして、能く武事に精なるを得たり、偉と稱すべく、斌的なりしと稱するを得べし。

是を我邦の英傑に顧みるに、加藤清正の剛勇を以て意を殖産興業の道に注きたるが如き、故伊藤公爵の文臣として武魂を具へたるが如き、亦文武一義の權化たり。

文材獨り立つ能はず、武魂獨り動く能はず、一文材一武魂の協力して事を成さんよりも、一斌的主義者の獨り力を用ふるを優れりとす、分業といふことを唱へられてより以來、一に分業といひ二分業といひ、終には分つべからざるものを分ちて、分業をなさんとす、其過てるや甚し。

新興の獨逸帝國は其の臣民の各々をして、一經濟的單位たらしむるを國是とすと聞く、予は茲に我國民の各々の斌的單位たらしむるを切望して已まず、乃ち斌的主義説の一端を述ること爾り。(十月三十一日稿)

くれのおも物語

たけを

阿部さんが六代を芝居に書けよ云つて赤い葉を挿んで平家物語を借してくれた、好し書かうと受取つたがさて僕は途方にくれた、僕は元來芝居は讀むた事はあるが見た事は無い、従つて芝居に對しては甚だ朦朧散漫な案を持つて居るのみで、畫工はよくプロットを云ふが其のプロットが僕には到底作り上げられ相に思はれ無かつた、只如何にも憐れ深き夕闇の花

と平家の末路は史傳以外に僕の心を離れなかつた、何かしらと思ひつゝ、其の儘に過したが本は何時か阿部さんの手に返した、今年の春の事である。

九月阿部さんが不意に歿なつた、皆の人の様に僕も驚いた、皆の人の様に残念がつた、段々氣が落付いてから六代を書うと云つた阿部さんの約束を反古にするのは甚だ濟まない事と思はれて仕方がない、是非書かなくては男子の意氣を如何する云ふ様な恐ろしい氣まで飛出して、どうかこうか抹り上げたのが此の一篇である。

嘗て借りた平家物語は阿部さんの藏書と共に伊豫の松山へ送られた、赤い乗を挿むた儘戸棚の隅にでも在る事と思ふ、凡て之等の事柄は立つ年と共に段々曇らされて仕舞ふてあるう、それを思ふと僕の心は非常に淋しい、高等學校の二年時代にこんな事があつたと云ふ記憶を臍氣にせんを恐れ、亡き阿部さんを忍びつゝ、流言ではあるが茲に記する次第である、

(一)

京への道へ霜かおき初めて、果敢ない虫の聲々が秋のこゝめを刺す頃に、此物語の發端は菖蒲が谷に糸口を開く。

千草の葉末に玉とつゞれる夕雨のほつと息つく暇に、愛宕の肩を閉ざす雲を破つて薄つすらと立つ秋の雨が流れる。此頃は、めつさり淋しくなつた十坪の庭を五坪まで上露寒く萩が伏す。日光を慕つて何處からか紅色の蝶がひら／＼と舞ひ出ると、あとへ濃紫の裾、踏むで美はしい十歳あまりの姫か現はれる。雨をふくむだ青苔を冷た相に、そつと蹈む、黒い瞳はなつかしげに小蝶を追ふ、口は、今にも綻び度を無理に小さく歪める。

二足三足と眼立たぬ程に彫む後には、と笑聲が一切の調子を破る。紅色の蝶はほろ／＼と散る露を縫うて籬のあなたに沈む。歪むた口は吃となる。

「まあ」と張りのある眼か怨む、かすかに破れた小さい唇か靜に白い齒並を隠した時

「あまり蝶と許り仲が好いから」

おしげも無く樂し相に笑ふ、兄であらう十二三の薄化粧である。

「あまり高い笑聲して乳母が聞きますれば……」

怨めしい面持を再びする

「乳母はどうでも、折角日和になつたものを、それよりか先程貰ふた小犬を見ぬか、白うて美しう」

「何處に」と嬉し相に手を胸に組む。千切れた雲は又千切れて青い空は高く嶺を離れる。雨に洗はれた氣のすがやかさが身に泌みる。萩を廻つて小椽がある、明障子はたて切つたまゝ物音もせぬ、椽の下に藁を重ねて小犬は甘き夢をたごる、日脚は萬遍なく和らかな白い毛に映へる。見るからに太平である。白い手を繋ぎ合せた二人は笑語さうめきながら現はれる。兄は溫和しく膝を折つて揃ふた指を小犬の延した前足にのせる、妹は言葉もなく身を屈めて寄り添ふと束ねた髪か頬にふれる、四の眼はしげ／＼と小犬に落つ。「可愛い犬、誰れに貰ふて」ばらりと長い袖か垂れる小犬は糸より細い眼を開いた。

秋は物憂き夕と日は黒む、僅にたゞへた苔の間の水鏡は方寸の面に暮れ行く空を惜し氣に寫す。黄檳の葉が眞赤な表を伏せて靜に落る、方寸の天地は忽に亂れる、分に彫む波紋は寸に返す波紋と心長閑に押し合ふ間に青い空が幾重の圓を明滅する、やがて元の靜に歸つた時ほろ／＼と散る葉は、今度は小犬の眼元にとまる、小犬は四の足を踏み延してクンと云つて立つ、兄はしきりに頭

を擦する、妹はおづくど背に觸れてみる、小犬は成すが儘に太く短い足を揃へて居る、大方見果ぬ夢が小さき脳に影を残して居るのであらう。

「誰れに貰ふて」

「里の爺様に、昨日な京へ御出の時荒神口の松の根方に乳を失ふて鳴き迷ふて居たを脊なの籠に入れて來給ふた」

「まわ」

「あら、まだ鳴くの、飯を喰べてもまだ鳴くの、飢じうても、冷い土の上に寝ても京へ歸りたいか」

「そりあ歸りたい、こんな淋しい處に、ほんに淋しかろ、私も歸りたい」

卒然として小さい胸は愁の影に鎖される、兄の姿が瞳の裡にばつと亂れて、見張つた眼瞼に涙か溢れる。

壽永の秋に亂れた木の葉は如何に憂きものは幼き胸には解し兼ねる、只都戀しさが先に立つ。西海に逃れた一門も、京を隠れた残の族も寢覺の間すら花の都は忘られぬ。

京へ歸りたいは此のいたいげな二人許りでは無い、白いむく毛の小犬許りでも無い。只一度足か京へ向つたからは身の運命は瞬時にトせられると知る人々は同じ追懐にも綾かある、如何なる綾のあるを知らずに無理無性に京を連れ出され、遊の友と離された二人は昨日に變る今日の様を浮世だと、暫しとても斷念められる筈は無い。幼い二人の涙を慰め様と云ふ者あらば、其れは罪

なくて悲む者を、無理に己の罪に引き入れて、これだからと偽る者である。

僅か三里の京を百里と絶つて、置く露の上にも勝る頼み無き身をとも誰れか作つたか、知るに由なき二人は只都戀さのみが湧く。濃い紫と淡い紫の四つの袖は一向に同じ思を追て泣く。

相手を失つた小犬は淋しげに萩を廻つて何時か垣根の縁を嗅き廻る。憂い土の香を知るであらう。

明障子が音なく開く

「何時の間に庭へ御出で遊した」

呆れた様で急しく問ふ、三十路余りの女房である。

都を落てからこの方は、云はる儘に従順くして居たものを、たまに庭へ出たからとて何も其の様にと思へば又涙か湧く。弱い日脚は濡れた顔を今更に照らす。これこそが平家の御嫡子、一の姫、移る世を一年とまで返さずとも、花と匂ふ膳たげな姿が蘭麝の香泌む帳の傍に浮ぶ、其れを今はと女房の心は急に千里の外へ飛び去る。女房は六代か緑の髪をかき分けぬ頃より候ふた乳母である。

「昨日の小犬を姫にもと思ふて、悪うたら勘忍して」

と温和しく六代は乳母の顔を見る。雨にも風にも氣を置く此の頃は、うかどした詞にも御氣か細るかど乳母の心は、はつと閉ぢる。

垣根の下に小犬がクンと鳴く「あれ何處へ行く」と兄はふる露の繁きもいとはず小犬を追ふ。

「御待ち遊せ、私か呼びます、御椽近うはまだしもの事、御氣付け遊さぬと時折悪い噂を聞きまするに」

乳母はすらりと明障子を離れる。垣根のあなたで、がさりと物音がする。亂れた雲は嶺に収まり、虫の音は秋を封じてかすかである。

(二)

一筋の小河か物惜き晝を西の山懐から東へと流れる。六代の乳母は裾の土埃の白く成る迄晨方から徘徊て来た。何處へと問ふ人あらば知らぬと云ふであらう、何處からと重ねても恐らくは答へまい。過去も未來も無い、只寸前の懊惱か深さを増すのみである。後にはふり注ぐ涙も早や涸れて居る、かき口説く詞も尽されて居る、一步たりともふり向くは根こんぎ髪を引抜かれても嫌である。やむなく足は前へ出る。洛西の初冬を歩み盡して知らぬ未來へ倒れる積りと見える。

草摺をカチャリと云はせて一群の武士が通り過ぎた、柴を背うて世の裏を隠れる様に小走り行く山賤にも會うた。其の行く者の不審げな眸も女房の眼には青い空に浮く塵程に寫らぬ。

昨夜は更くる迄北の方と姫君とを挟んで搔口説ては泣いた。どうで此の世が夢であるなら、いとほしい六代に會うた先夜の夢はなせあの様に短かつたらうと北の方は怨む。白い御馬に召して私の夢には御出なされぬがあまりと幼い姫君は泣く。何故此の世はかう無情かろう、西八條の御殿は、あはれや御佛様の御醉興か、數へ切れぬ平家の公達を知らぬ西の國の果までも憂い目愁い目の數を盡させ、それでも未だ飽き足らいで十年余りも御育て申した若君を何の御執念で御取り

上げ成さるか、ゑい春秋毎の物語も思へばく口惜い極りである、熱い思が心腹つ程靜な初冬の氣を身もあらぬ程縦横に馳る。

舟岡山で若兄弟を斬つた報と思ふ人もある、六十余州の快樂をありとある迄盡さば、やがては涸れるか道理と観ずる人もある、いや、世々の藤家を無法を極めて押し壓ふしたからと云ふ人もある。

高か佐殿をと伊豆へ流したが平家に取つては一代の不覺である。東國の空に白い旗か閃いたと知る間も無く源氏の鞞鼓は叡山を壓して迫つた。僅か一夜を明し兼ねて、春は我ものと外知らぬ花は眸く暇に一の谷に散り壇の浦に散り失せた。餘りに淺間敷い世を南無と閉じ陀佛と開く半眼にも一滴の涙は浮ふであらう。勝に乗つた敵ですら夕の子を朝珠數と替へる者があると云へば、まして眩む迄變る浮世を見せつけられた残りし人の小さき胸には、天も碎け地も覆へり、世は只此の一瞬に知らぬ闇路に消え失せると思はれるも無理は無い。さるにても名残りをしい夢である。

堪へられぬ悲嘆を無理にもと懷せられた女房は目的なき途を辿る、幾度か野分のあとに、淋しくも黄に染めなされた京の西を、流れる小河の元へと沿へば許さじと西山の裾は杜となり林となつて避り顔に叢る。歸るを知らぬ女房は杜の裡に如何なる運命か包まる、とも、日か傾いて行く途か窮るとも關はぬ。只疲れた足が周囲のを暗い下蔭に入ると急に千鈞の重さを感じた、靜かであつた流れが岩根を縫うて私語き出す、堪へられぬ懈怠が爪先から毛筋まで余さじと充つ、何の御社か知らぬが築地の懷れた石の上に我れ知らず倒れる。世を忍ぶ沈んだ色の衣ではあるが襦の

鬪れが、春に遠き世の色にかすかな艶を添へる。流れは此處に一脈の命かあると云ひ顔に唱ふ、女房は初めて慰めの詞を聞き得た様に眼を閉じて、黒髪の亂れのかげに暫しと伏す。疲れ果た思の裏に三十年の變遷が幻の様に浮ぶ。

我が生れたは鴨の流の霞に抜ける伏見の里であつた、育てられたは玉琴の音に明け暮れを知る奥深き第であつた、嫁いたは天下を我が物顔に振舞うた我が族の一人であつた。憂知らぬ身には、かくある可きをかく過すものと心得。春闈なる二十年を玉敷く道に花積みて白銀の轍を廻らす様に暮した、其の夕に眉の細い若い夫は世を去つた、幾夜をか長い睫毛は涙に濡れて怨み明したが、其怨も、悲みも思へば若きものであつた、間も無く六代と云ふ平家の嫡孫を得た日より再び挑裡に長閑なる日の長かれと禱つた折々夢みる過去の淡い悲哀かやがて來る轉變の口うらとは思もよらぬ。

幻か此處まで明かに成つた時、閉ちた眼瞼に涙が溢れる無殘な世は尙此の上に苦しめるのかと、思へば堪へ難くて閉ちた眼を曹然と開く。稜端が流に浸つて土埃にまみれた綾と色を潤むだ様に染めなして居る。疲れた眼は爲すかまゝに無心に遠つて行く水を寫す。幾時を過したものが短い日足は暮れかゝる、冷い下風が熱した頬に軽くあたる。我が命のこのまゝ、絶えるのかと女房は身動もせぬ。あらゆる思は霞の様に有無すら判せられぬ程に隔だつて居る。

不圖白いものが眼に付く、小さき石の蔭に、それた水が渦を巻く、白いものはやがて其の渦に誘はれる、二廻り三廻りとゆるくく渦を廻ぐつて折から巻き込まれた朽葉と共に又流れ去る。

流れ去る時白い紙片と氣付く。萱の根に再び浮んだなり、白い紙片は永劫に女房の眼を消え失る。

思はずも若君の玉章がはやこの様に脳裡を掠める、勿体ない御筆の跡が薄い粗末な紙片に染められて、北の方の御手に落ちた時をと女房は身を慄はして立上かる。「御戀しくこそ思ひ參らせ候へ」と攔かれた淡墨の潤みが、今渦に巻かれた紙片にどうやら在つた様に思はれる。女房は裾を亂して流を追うたが、早やそれらしい影も無い。それかとして眺むる方には東山の凹の上に、青い星が何物かの眼の様に刻り付けられて居る。女房は顔を掩うて又杜の奥へと通る。

(三)

燃々として燃ゆる油に一穗の燈影が揺めく。

主人の僧形は瞑目したまゝである。

「聞き給へ、乳の中より抱き上げて今年十二に成らせ給ふた若君を何の御疑ありてか北條の武士に捉られて候よ、切めて御弟子にも遊ばして助け給へ、人を救ふか御僧の御務と聞く」
物音なき山蔭の庫廩に女房の狂ふた聲は異な響を織る。

「里にて聞けば高雄の山寺にゐます聖は情ある男々しき方、かつは鎌倉殿のゆゝしき大事の人に思はれ參らす由、文覺坊と御尋ねあれと細々に承り、夜深をも憚らず女子の身にて御僧をおどろかし參らせしなり。喃、上臈の御子を御弟子にと思し召すからは、あの若君こそ、あの美しき若君こそ御弟子に成し給へ」

主人の眼は赤い燈影にざらりと光る、女房は寒き肩に浪打たせて泣きむせぶ。

「一言なりとも御返答なきは、人を助け給ふ御手持ち乍ら浮世を外に怠り給ふ御心か、是非若君を救ひ給へ、それとも頼る者を見殺にして陀羅尼讀む御僧か」

鈍き光反す襖の銀泥に亂れた髪の慄へるのが物凄しい影を寫す。主人の眼か其の影を離れて再びざろりと光つた時

「そも何人の子」

と鬚班な重い口を衝て出る。

思ふ限りを怨んじた女房は、とつかわに答へられぬ、只痛める胸を無性に抱く。明障子がはたしくとなる。燈影は倒れて又危うげに立つ。

黒鐵の如き主人の胸には血を枯らしても焔が絶えぬ。鐵鞋を飛して、憐む可き源家の爲めに注いだ涙は、又西海の果にあへなく散つた平家の一族にも何とはなしに浮べられる。

文覺は生れながらの僧では無い。

今朝、維盛の嫡子六代が捕へられ、やがては斬られると聞た時、胸の何處やらがひり、とした。雪を欺く六代の頸に細く一線の紅がと思ふ途端、思はずも女房の脊に眼が落る。

「捉へられたは維盛卿の北の方に養はれた若君とか、捉へたは……何に、北條の四郎時政と」折からの山風に明障子は再びはたしくと鳴る。

文覺は眼を閉ちて額に深い皺を刻む。

やがて神聖寺の庫廩から二人の影が現はれる。初冬の片破月は愛宕に荒む夜風に冴えて、遅ま

しき文覺と、肩細き女房を照す。

杉の一叢暗き山門の入口で女房は文覺に別れる。もしやとの掛念は絶ぬが遅ましき文覺の後姿に心を取り延べて、菖蒲が谷へと襍からげて急ぐ。北の方の御身の上が急に案せられて、つく息の氷るも知らず一向に急ぐ。或る時は小笹の露を月影に分ち兼ね、或る時は樹の下暗を踏み迷ひつゝ、傾ぐ月の色凄き頃、さゝやかなる門を、ほとくと敲く。

乳母かど、なつかしい聲がして、紙燭の影に仄白い姿か浮むた時、女房は轉ぶ様に門をくぐる。何とは知らず北の方と女房とは相抱て泣く。夜風身にしむ門を開くと共に、同じ三十年の悲みか不急と出會た様である。語る間なく問ふ間なく、二人の手は取り合ふて、何故一日でも同じ涙を離れぬに泣たかと口惜しい氣か溢れる。

「あまりの憂さに、わごせは淵川へでも身を投げしかと、今日一日は胸の痛さを十年に數へて泣き暮しぬ」

と漸くに北の方は怨む。女房は正体もなく取り絶つた儘である。

「何處を迷ひ給ふてか、せめて一語なりとも聞き置けば、か程に心は痛めぬものを。齋藤の兄弟は京より歸らず、頼る方なき心細さに……あゝ、私も姫を抱て後追ふかど……」

でも、よう歸られたが嬉しいと又催つ折れる。野分の朝、下伏の葉末に止まる白露の、かつ散りて、かつ消えて、宵をも待たぬ果敢なき宿世を、身は憂き思の節々に嘆かんよりは、我れと命を斷んかど迄、勿体なくも思召されたかど、思へば女房の胸は張り割く許りである。

語り度き詞は女房にもある。あればこそ傾く月に暗き夜道を急いだでは無いか、只いたわしき方一人を悲嘆の中に振り棄たろうと、呷かれる様に気が熄み難くて、理由もなく袖を噛む。

「母上は」と奥で姫の聲がする、うつゝにま探る添寝の懷を失ふて不圖覺めたのであろう。

「乳母の歸られしよ」

聲をはづませて北の方は呼ぶ。

「あれ、乳母が」

と帳をのけて姫はかけ寄る。消へ残る月の光が淡く門口に射す。

其の夜は炭櫃に白き灰を掻き分けて三人は語る。

女房は高雄の聖の様を細々と語る。北の方の濕んだ切れ眼と、姫君の圓らな眼は眸もせず話の後を追ふ。闇路に闇路を重ねた此頃、微かなりとも一穗の燈を認め得た瞬間には嬉しいと云ふよりも不思議な思が先に立つ。やがては之れが只一筋の生命と是非なく依頼る外は無。

聞き終つた北の方は、ほつと息をつく。

「では、やかて兄上は歸り給ふか、嬉しい」

と姫は勇む。

あはれ其の聖が我が子請ひ受け給へばと、思へばいとほしい六代をかき抱く其の時、泌々と北の方の胸に湧く。

容易に御渡し申せば好いか、逞ましい聖は頼になるが、京を堵つた東國の勢は物凄いと劍で、

近けじと若君を取り囲む様が浮かばれて、強て消そうとしても累の如き掛念はごこ迄も女房に纏る。

姫は只淋しい日を、彌が上に淋しくする涙の主の歸るのが嬉しい。白い小犬の好う懐いたのも早く語りたい。

紙燭の丁子が落るまで、三人の思はこ様に湧く。穩やかに白む東の空に幸あれと、長き夜はやがて明る。

(四)

六波羅の夜は殊に淋しきものと六代は煩うた。煩うた上で疲れ果た身の微ろめは、母上が彼處の河の縁に物思はしげに佇まれる。私は此處に居るものをと叫ぼうとしても聲が出ぬ、あせつても詮方無くて足摺する時、不圖なつかしい眼と見合ふ。あれと漸く洩した聲に已と惜しい夢は破れる。隙間洩る夜風に襖の裏か冷りとする。何時か又夢に入る。晴れやかな野に姫と乳母とで白い小犬に戯れる。東山に美しい花が咲たと姫が云ふ、見返る暇に小犬が居なく無る。何處へ行つたのかと姫に問ふと姫も乳母も見ぬ。向ふの木蔭で、こゝくと云ふ聲が聞える。細い道を馳せて木蔭に入ろうとすると、見付けたと耳の上で。思はず見上る鼻の先を白い光が、めたと思ふ途端眼か醒める。綿衣は汗で冷たくなつて居る。ほつと息を吐いたが胸が高鳴るのが氣に掛る。何處やらで鶏の聲がする。淋さと恐ろしさがひしりと迫る。枕は知らぬ間に生温たかく濡れて居る。今は只夜の明けるのが待遠しいが、今度こそ夜が明ければ失はれる事かと思へば更

にちり毛立つ。其の恐ろしい夜の明のが夜毎戀しく思はれる程、今はいぢらしい身の上である。六代は、かくて明し兼ねたる幾夜を明す。

昨夜は母上に参らせし文の御返事を繰り返し小夜更くる迄燈をかき立てた。眼さめたは、さやかな庭を被ふ雪に映へた日脚の明障子にさした頃である。やがて齋藤の兄弟が端近く候ふ。鬚の濃い見張りの侍が黙然として据ゆる。不安な氣は朝寒の中をも去らぬ。六代は捉はれた時、母上の給ふた黒木の珠數を手にぬきて、東の方と思ふ邊りに合掌する。一眼なりとも母上と姫と乳母に會はせ給へと念す。やがて失はれん身の只一眼なりともを念す。鬚の濃い侍はあらぬ方一咳きする。

午近い頃長い廊下を踏む音がする。やがて法衣の丈高き僧が只一人侍の辭義するに眼も呉れず疊二つ許り隔りたる處に座る。明日をも知らず行く御佛の道教へ給ふ聖かど、幼い心にも思へば何となく涙さしぐまれて、自つと頭か下る。

「御淋しい事であらう」

丈高き僧は、やゝ面瘦のした頬に二筋三筋素直な髪すなはの亂れた臍たげな姿に、見るから涙を押へて思はず平凡なことを云ふ。

簷端から落ちる雨滴の影が明障子を時々細く貫く。大方積つた雪の融るのであらう。小鳥がちゝと云つて其の間を縫ふ。六代は膝の上の珠數を見つめた儘である。

僧は只慰め度き心地がするか、わけも無く云ひ兼ねて、六代の行儀よく組合された、しなやか

な手に、纏る珠數を哀と見るのみである。

「御佛の道を知り給ふか」

と突然聞く。

「じき父上の行き給ひし方」

六代は靜に答へて、はらくと涙を落す。

僧は思はず瞑目する。青き波を幾日と重ねて西へ渡らば父ります方と、京より外知らぬ北の方は、此の若君を抱いては、そも幾月を暮したであらう。無殘な其の二人を離れゝに成た上に、世すら隔てさする事が出来るかと僧は深い心を堅める。

外ではしきりに雨滴が落ちる。世にも淋しい音である。六代はおどなく直衣の袖を重ねる。

やをら立上つた僧は

「御心強くるませ、丘の小松も雪頭戴く許りか」

と濕んだ眼を見張つて云ひ放つ。

六代は靜に頭を下る。

僧の姿の見えずなつた時、兄弟の二人を顧みて「誰れ」と問ふ。二人は無言の儘に首を傾しげる。見張りの侍は知らず顔である。

しきりに落ちる雨滴の影を六代は見る。果敢なき思を、尺に余る袖に疊むを解くる日の、今の御僧によりて來るとは知る筈かない。憂き世にのみ會ふ此の頃を、情ある人も在ると知つて双の袖

を顔に當る。暫くして又一人の侍が廊下を、はた〜と鳴らして来る。六代は、はつと思つて其の方を向く。侍は長つて六代に辭儀した後、齋藤の兄弟に今の御僧が會いたいからと告げる。二人は眼を伏せた儘、軽く答へて後に立つ。何事かと六代は惑ふ。見張りの侍も足音を忍ばせて何處へか去る。六代は只獨りに成る。

く残る火桶の灰の間から、ちらりと小さい燭が窺ぞく、續け様に又窺ぞく。廣からぬ部屋ではあるが動くものは小さい燭のみである。動くと云ふ動く者は炭火の下に吸ひ盡されて、只一つの燭と成つたのでは無いかと思はれる。姫と二人に乳母が話した地獄には、忌はしい燭が燃える。六代は思ひ浮べる。黒木の珠數の處々が濡れて見へる。やがて行く道は西さのみ知るが、恐ろしい燭の燃ゆる處は避けさせ給へと兩手を合せる。珠數の濡れた處が時々光る。

長い廊下の端れで、忙はしげな話聲が響く。六代は急いで眼を押し拭ふ。

「若君、今の御僧は文覺と仰せらるゝ、高雄の聖、あまり若君のおいたわしさに、鎌倉へ自ら若君を請受けに行かせらるゝと仰せらるゝ」

「聖は鎌倉殿には大事の方に渡らせ給へば、北條も二十日は御待ち申すと誓を立て給ふ」
頬を染めて二人は交るゝ云ふ。

思も寄らぬ成り行きに、夢かと六代は心惑ふ。

「では、我命助かると云ふか、今の御僧が御話しなされてか」

「明日をも待たでと、早や高雄へ御歸り成された、やかて鎌倉へ立たれる事と見えまする」

「あゝ、我か命助かるか」

と今更六代は氣付た様である。西へ行く途殺へ給ふ御僧とのみ思ふたは、西ならず、西ならず、なつかしい母上の膝に歸し給ふ聖かと尊さが身に泌む。

二人と顔見合せた儘の六代は、二人の眼に涙が湧くを見て、身を投げ出して初めて嬉し泣きに泣く。

何時の間にか歸つた見張りの侍は、鬚の濃い口を、いやが上に堅く結むで俯向いて居る。

小さき胸には一時に様々な思が馳せる。捉はれて門口を出る時、母上の泣き伏した姿、妹の姫が我れも參らんと罪なき眼を赤くして云つた事、時々警護の武士の鎗の石突か、かちりと命を彫む様に憶へたのを思ふ。明し兼ねた幾夜のつらさ、不圖廊下に響く足音に、素は我を斬ると恐ろしい侍の來たのでは無いかと、小さい直垂の裡に身の堅く成つたのが浮ぶ。最後に、明日にも母上に會はれる事かと思ふ。其の母上に、姫に、乳母に、何んと云ふて此日頃を語ろうかと、取り止めなき空想は極り無く小さき胸を馳け廻る。馳け廻るが儘に任せて六代は衣の亂も思はずに伏す。

「猶豫なく、菖蒲が谷へ此事申上げ參らせては」

と兄の齋藤は漸く面を上げる。

「早う會ひ度うて」

と六代は切れ〜に云ふ。

思ひ出した様に雨滴の細い影が、明障子を貫いては落る。

(五)

三十六峯は真白き衣つけて今は亡骸と横はる京を取り圍む。星の光のうすれ行く頃の曉である。一列の淡い影は輿を挟むで京を出る。輿の主は京に生命を與へた平氏最後の一人である。此の輿が京を離れた明日よりは、去りし榮を亡き京に顧る者は無い。天も地も寂として聲なき間を二の者は言なくて別れる。恐らく輿の主は人心地も無いであろう。

輿の主とは、後れ毛の亂もなく、面瘦のした上に、之を最後と薄化粧したが又なくあはれな六代である。奢を極めし平氏最後の一人を語るには余りにいたわしくある。物々しき缺鞘に反り打たせて護り行く東國の荒武者ですら、行く道の東へ我を誘ふが腹立たしいと云ふ。

六代は靜に運命の歩を聞きつゝ、東道を下る。我が族の人々が失はれしは如何なる河の夕ぐれかと思ふ、否や、亡き跡を見果てぬ先に、我が生命の消ゆるのでは無いかと疑ふ。

清水の塔が見える。能野か宗盛に別れたは、あの塔の下であろう。袖に散りくる花を眺めて、なれし東を思ひやりつゝ、能野か一さし舞ふた時には、之れか別れと悲めど、眼も彩なる衣捌く舞姫を思ふては只美はしさが忍はれるのみである。

ありし日は會ふも、別るも、涙も、笑も、春の香に薰ゆる花葩の靜に落ちては又咲き誇るが如きである。今は、一切の劇を結んで雪にしろき、清水の塔は冷き影にそゝり立つ。六代は必々と命の細るのを感じる。

物音なき京を出で、會ふ人もなき山路に入る長き道に、朗らかな日光を知らねば、人も我も別ち兼ねる程靜さが疑る。冥府行く道は斯うでもあろう。聞くものは柩かく魔の足音である、見るものは闇に洩るゝ丈ひく白き衣である。只柩の中に思か及ぶ時、花に埋むる主であれば頬を染む紅を暫しと止めた、うら若き人と見る。憂に非ず悲に非ず、一筋の淋しき情味が何とは知らず流れ様。六代の輿に會ふ者あらば必ず其の情味を、心髓に徹して味うてあろう。

六代は母上の事も、姫の事も、乳母の事も皆前の世の夢の様に思ふ。あるを限りの涙を注いだ後は、過ぎ去つた短き歴史は幻と外見へぬ。西山の方指ざして今か京への永き別れと聞いた時、袖より顔を得上げなかつた。之を限りと知つたからでは無い、尺と余る生命の一分を縮められたからでも無い、理由知らず眺めるのが恐ろしく思はれたからである。ちらと齋藤の兄弟が徒跣で供の後に眼を伏せて佇むだを見たのみである。

ならばこの儘、生命の消えよと、六代は袖に思を包むだま、逢坂の關を上り、逢坂の關を下る。

世にも美はしき生命を、東へ、東へと刻む時、鎌倉に文覺は幾度か法衣を濕ほして頼朝を説く。我が願の許されぬかと憤る間に、那須野の狩にと頼朝は鎌倉を立つ。我が願きかれぬ限りはと、同じく北に従ふて行く。那須野が原の夕まぐれ、文覺の頬に喜の色か溢れた時には二十日に残す日は少なかつた。文覺は白泡を噛む駒の息つく間ももごかしやと頼朝の御教書を懐に、轟く蹄の音後に鎌倉を立つ。

心もどなき二の運命は、西より東より相近く。二の運命は元より互に知る由も無い。東より来る者は馬入の流に白沫を飛して鞭を擧げる。西より来る者は瀬田の橋に暮れ行く空を仰いで、世にも淋しき音を聞く。

かくて日敷を重ぬる程に、西より来るものは駿河の國を明日は越そうと云ふ千本松原にてはたと止まる。尾瀬の鼻を廻つて打入る海は東に近きとは思へぬ程静かなる波を織る。十里に渡る松原は、緑を結んで眼路遙るかに霞む。師走も早や暮れるとは云へ、暖かき國なれば烟る飛沫も長閑である。

松の根方に、青き海を望むで六代は座る。今日を限りとは幼き胸にも覺悟する。

「若しや途にて聖に會ひまつる事かと、思は旅を重ね候へ共」

と時政は鬚斑らな頬をそむけて云ふ。今更ら乍ら。六代は珠數抜く諸手を堅く組む。

「一向所勤の御身なれば唯申し説かんと叶はじ、早や箱根路も明日よりと思へば、鎌倉殿の御心中も計り難く、御いたわしき事なれと近江の國にて失ひまつりし様披露致さんと存すれば……」
太い詞尻が慄ふたと氣付いた時、時政は思はず頭を垂れる。

穏やかな日和に、汐風は枝を鳴さぬ程に吹く。

氣を取り直して時政は

「齋藤殿御兄弟にも御名殘惜み給ふべし、御身近く參られよ」

と云ひ終つて少しく身を退る。

「こゝにて今、生命失はるとも、京へ歸りし折に、母上に、さ語り給ふな。何時かは御聞き及ばれんも、仇に歎き悲み給はば、後世の障りともならう、鎌倉まで送り付け上りたりとこん申せ、ゆめ此の事語り給ふな」

眞白き頸足に後れ毛のはらくと搖ぐ。

二人のものは胸張り割くる心地である。やゝありて

遙々御供つかまつりて、

「若君の神にも佛にもならせ給ひなん後、なごて甲斐なき生命を、おめくと永らへ再び京に歸り申すべし」

と兄は涙を抑へて云ふ。

六代は重ねて云ふ詞もない。

* * * * *

箱根路を駈け抜けた駒は、駿河の海を眼下に眺めた時蹄にビチ／＼と音たて、飛ぶ。狩野の流を渡る時は早や午下りの頃である。頭上に星の輝く間なく駿河の國は此の一鞭に横ぎれと法衣を翻して文覺か馬上に躍る時、不圖耳に入つた事がある。漁りより歸る漁夫であらう、汐の香したる綱を肩にしたが、持ちたる一人と並んで来る。

「美しい若君ぞ」

と誰れが云つたかは知らぬが、文覺の頭裡に電光と閃めく。太き腕に力を込めて文覺は止まれと

許り手綱をひく。熱き息を二本並べて駒は蹄の地に喰ひ入れよと躰を反らす。

「何に、美しき若君とは何に」

つて文覺は聲を絞る。

呆れた様で漁夫は見上る。渾身の血が一些に逆上した文覺の顔は今にも喰ひ付き相に見える。

「其の美しき若君とは、何に、何に」

「かしこの松原にて、世に美はしき若君を 伴ひまつりし鎌倉の武士が只今斬るとて村は人影なき迄空し、」

聞きも及ばず文覺は右手を舉ると等しく折れよと長き鞭を振る。支へし蹄に力入るよと見る間もなく、駒は空を飛ぶ。四つの蹄の砕くともと道を蹴り橋を蹴り風に唸の物凄く飛ぶ。文覺は溢れし血の一時に収まりて只血走りし兩眼が燃るが如く前を睨む。右手は連り鞭を振ふ。只一塊の翼なき身が空を貫て飛ぶ様である。

六代は細やかな手で亂れた髪を搔き上る。白き頸は惜けもなく美しき衣を抜く。心静かに搔き上げた手は西と思ふ方に合せる。亡き父の落ち給ひしも西である。戀しき母上の涙に明し給ふも西である。やがては行かん我が途も西と聞けば、御情ある御佛よ、早や早や西に導き給へ、如何なる處へ連れ給ふとも西と知れば戀きものをといたいな心に願ふ。

太刀とりて後に廻りたる三郎近俊は余りのいとほしさに、思はず顔を背ける。此のいちぢらしい

若君を斬つたからとて、何か武門の譽れであろう。美はしき細首打てと磨きはせぬと太刀捨て、のく。唯だ斬れ彼れ斬れと譲り合ふ程、流石の時政も詮術なくて時は移る。

之れを最後、之れを最後と文覺は身を伏せて太腹を蹴る。駒は息の絶わん迄と泡を嚙むで松原を飛ぶ。

遙かあなたに人影ありと知つた時、

「待て、待て」

と聲を洩らして文覺は馬上に躍る。

斬れと時政は立上る。聖、聖と小躍りして近俊は叫ぶ。

千里を飛べど馳ける馬上に、もごかしやと笠打ち振りたる僧形が見える。我を忘れて走り出でた齋藤の兄弟を衝き抜けると見る程に駒は止まる、

「許された」

と轉ぶ様に下りた文覺は、太き松の根方に六代を見て憶えず熱き涙を流す。

「御教書はこれ」と懷を探りて文覺は太息を吐く。

時政はわななく手に打開て躁り返し涙に霞む眼を見張る。

百里東に京を離れて「あな、母上」と憶えず六代は西に伏す。

美しき衣を、遠く沙路に馴れし風のゆるくなぶる。

此の頃の世は、尾花に滴たる夕露に、有爲を聞く世であると云ふ。

日本國民性より見たる梅と櫻

鈴木 青花

一水あり、流れては激湍となり湛へては深淵となる、一にその遭ふ所の砂石による。凡そ一國民の有する制度文物は其居住する土地の形勢氣候に基因する所甚だ多し。されば古文明の花は先づナイル河畔の沃土に開き、オリンポスの神々は漣波激盪たる希臘の空に下りぬ。南洋の酷熱はその民を懶惰ならしめ、北土の嚴寒はこれを萎縮せしむ而して英人の自ら沈着なる佛人の古より輕佻なる、何ぞその感化影響のしかく大なるや。

翻て我國民を見るに概ね至醇にして高雅、剛直にしてはた洒脫、自然崇拜の念、嶄然として他邦民族を抜く、これ二千餘歳の間、冥々の裡に薰蒸せられたる先天的性情の然らしむる所とは云へ、これを圍繞する秀麗なる山河の與つて力ある又陬々を要せざるなり、暫く茲に我國四季の變遷を一瞥せん乎。

春たつと思ふばかりに霞こめて山姿水容、亦昨にかはりて覺ゆ、誰がかづきけむ梅の花笠地に委して鶯老を啼けば、桃の紅、柳の綠、花の音訪れ、あはたしく、櫻の梢も青葉となりぬ。卯の花垣の郭公に有明月の影を送れば五月雨いどゞ降り續きて軒の雫の絶間もなし、晴るればやがて眞夏の日影、蝸の聲に冷風たちて水無月の板に夏も終りぬ、桔梗が原に野分して木々の梢の紅葉する頃は大空渡る雁の影さやけく、虫の音漸ううすれゆけば木枯騒ぎて板橋の霜白う、雪、霽、どりぐりに早くも年は暮れゆきぬ。

かくの如き山川の懷に涵養せられたる我民族は自然を思ふの念、いよ／＼深くその興味は變じて愛着となりぬ。これを衣裳に見よ、櫻重ね、梅重ね、山吹、卯花の平安朝の昔は云はず、近世の振袖模様、裾模様より下駄の花緒に至るまで悉く自然界の草木を以て飾らるゝに非ずや。更にこれを武具甲冑に見よ「むくつけき東夷」すら小櫻緘、櫛匂ひ、さては菊綴、菱縫など優に呼びならはせるに非ずや。更に／＼これを現代日常の生活に見んか、菓子に於ける松風、落雁、蘇餅の如き、烟草に於ける白梅、菖蒲、萩の如き、刺身には笹の葉を敷き牡丹餅には南天を添ふるが如き一として自然愛着の發現に非ざるはなし。さればこそ鞍馬を止めては「道も狭に散る山櫻」の詠となり、劍を按じては「ゆきくれて木下影」の吟となる、風流と云ひ、逸韻と呼ぶ、畢竟自然に向つての憧憬のみ情愴のみ。然らばかくの如く自然を尊重せし我邦人の梅櫻に對する感想は如何、ひそかに思ふ、四季の冠は春にあり、而して春は櫻梅の二花に盡く。

二

文學は人生の縮圖なり、詩歌は人間自然の聲なり、國民性情は瞭々乎としてその間に存在する

を見る。しばらく杖を曳いて梅花郷に遊ばんか。

史に徴するに中世以前花と稱すれば必ず梅花を指したりき。彼れや凍風剪々、春淺く嬌として力なきの時、羞蕙僅に白を点じ、先づ百花の魁を占む、これやがて其主因たりしもの、如し、而して春意を寓する史實は遠く奈良朝に現れたれど「秋山我は」の一詠に、春よりも秋を愛でたる額田王の思想か、萬葉詩人の自然觀を代表するものなるを思はゞ深く當代に就ては云ふに足らず、却て國民の梅花美觀は、平安朝の「あてなるもの、梅の花に雪の降りたる(枕草子)」「日のいと麗かに、いつしか霞みわたれる木末どもの心もとなき中にも梅はけしきばみ微笑みわたれる、とりわきて見ゆ(源氏末摘花)」「霞める月影心にくきを雨の名残の風少しふきて花の香なつかしきに大臣のあたり云ひ知らず匂みちて人の御心地いと艶なり(梅枝)」等に窺ふを得べく、降つては近世の「春の風、軟かに吹いて里の中道、溝石を傳ふ頃、先づ江南一二輪咲きそめて、白きは本色と云ひ乍ら南嶺の寒き風情を好むならむ(許六)」に首肯せらるべし。更らに之を和歌に尋ねんか、かの「袖たれていざ我國に鶯の木傳ひ散らす梅の花見む(拾遺)」は濃彩の繪卷に對するが如く「どめ來かし、梅盛りなるわが宿を、うときも人は折にこそよれ(西行)」には自然に愛着せる詩人の熱情を見る。はた隴々たる春月の下、馥郁たる香に憧れては「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくる、(古今)」となり、愛執の極は却て「梅の花匂ふ邊りはよきてこそ急ぐ道を行くべかりけれ(金葉)」と、遂に咏嘆の聲を放つに至る。

花の香を咏し、鶯を配し、月夜、黄昏、白雲を背景とし、且は紅白の優劣、他の花草との比較は我中世歌人の好んで吟咏する所なりき、然れども茲に疑悞の念に堪へざるは漢文學の感化至大なる我國歌が、屢々彼に現はれたるが如き「樹形の吟」の頗る僅少なる事なり、かの「はる／＼と飽かぬ色香を契るかな、花咲きそむる梅の若木に(宗良親王)」と云ひ「老松の齡をゆづれ枝かはす色も若木の梅の初花(雅世)」と云ふ畢竟樹はその客たるのみ、唯、林和靖が「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」の雛案とも見るべきものを近世に於て散見したりと雖も國民性として「芳香」「春意」の如く重要視せられざりしや明なり。

然らば十七字詩に現はれたる梅花は如何。洒落なるこの詩卿はかの和歌に比して大にその色彩を異にせり、「見苦しき疊の焦や梅の影(几董)」には隱約なる趣味の流露を見るべく「梅咲きぬ、何れがうめやらむめじややら(蕪村)」には風骨を露倒する作家の風丰躍如たり、或は「山間や白梅少し家少し(蒼虬)」に四條の畫風を偲び或は「白梅に牛若据へて見たき哉(存亞)」に清高の情趣を見る、而して「唾急に梅悉く斜なり(子規)」は古枝槎枒として幽香溪にみち、花の白、苔の青、相映して詩趣更に饒多、見る人をして仙化せしめずんばやまず。更に

白梅や墨芳しき 鴻臚館 蕪村
紅梅や檜垣くづれて 隴月 曉台
振袖のちらと見えけり 闇の梅 野坡
梅白く藪の縁にさす 枝かな 召波

に見んか彼等が趣味、性情の那邊にありしかを知る又難きにあらざるべし。

斯くの如きは日本國民か梅花觀の一瞥のみ、詳細なる觀察と精緻なる研窺とは我がよくする所にあらず、たゞ國民性情の如何を髣髴せしむるを得ばわが願は足る、名殘惜しき斯郷を去つて更に櫻花の里を訪はむ。

三

花と云へば梅花なりしを、無形の王冠はいつしか櫻花に移りぬ。かくて「櫻よりまさる花なき」の思想を生み、遂に「敷嶋の大和心」と讚美するに至れり、然り小櫻と云ひ、八重櫻と云ひ、緋櫻と云ひ、はた南殿櫻、墨染櫻、六日櫻と云ひ、苟くも櫻と云ふ名稱あるものに對する吾人が祖先の攻究はその美を諸方面より觀察し洞見して餘す所あらざりき、今その二三を列擧すれば
ゆへある黄昏時の空に花は去年のふる雪、思ひいでられて枝も、たはむ計りに咲き亂れたり(源氏、若菜の卷)、

南の御前の山際より漕出て、おまへに出づる程、風吹きて瓶の櫻、少し打散り紛ふ、いと麗かに晴れて霞の間より立出でたるは、いと哀れになまめきて見ゆ(胡蝶)

君達は花の争ひをしつゝ、明し暮し給ふに、風荒らかに吹きたる夕つ方、亂れ落つるが、いと口惜しうあたらしければ、まけ方の姫君、

櫻ゆる風心に心の騒ぐかな、思ひぐまなき花と見る見る、

御方の宰相の君、

咲くと見てかつは散りぬる花なれば、まくるを深き恨みとも見ず、

右の姫君、

風に散ることは世のつね枝ながらうつろふ花を唯にしも見じ、

この御方の大夫の君

心ありて池の汀に落つる花、あわとなりても我方に寄れ

勝方の童べおりて花の下にありきて散りたるをいと多く拾ひて持て參れり(竹河)

さくらは花葩多きに葉の色濃きが枝細くて咲きたる(枕草子)、

高欄の下にあさき瓶の大なるすゑて櫻のいみじくおもしろき枝の五尺計りなるをいと多くさしたればかうらんの下まで零れたるに(枕草子)、

櫻の花は優なるに枝さしも剛々しくて、もとのやうなにくし、梢ばかり見るならむおかしき(大鏡)

淺黄なる空のけしきいといみじう霞みわたりたるに溢れて匂ふ御前の櫻、常よりもおもしろう咲きたるに(狭衣物語)

而して「八重櫻はこと様のものなり、いとこちたくねぢけたり、植ゑずともありなむ(徒然草)」と貶するもあり

若夫れ、櫻花の歌に至つてはその幾萬首なるかを知らず。梅は散り、藤はいまだし、時や陽春三月の候

深山人のその梢とも見えさし櫻は花にあらはれにけり(頼政)。

花曇りの空は遂に雨となりぬ

春霞、たなびく山の櫻花、うつろはむとや色變りゆく(古今)、

かくては

たれこめて春の行衛も知らぬ間に待ちし櫻も移ろひにけり(古今)、

の嘆もあるべし。或は「花散りてその色となく眺むればむなしき空に春雨ぞ降る(式子内親王)」に暮れゆく春を惜み、或は「世の中に絶えて櫻の無かりせば人の心は長閑けからまし(業平)」と主觀の影を客觀の鏡に映す、はた「櫻さく比良の山風ふくまゝに花になりゆく志賀の浦浪(良經)」の濃艶なる「久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ(友則)」の淡雅なる、而してかの西行が「花ちりなばと人や待つらむ」の如き「芳野山去年の栞の路かへて」の如き櫻花に對する彼等の愛着は移して以て大和民族が櫻花觀となすを得べし。

目を轉じて俳壇を看んか「咲きみだす桃の中より初櫻(桃青)」もいつしか「百石の小村を埋む櫻かな(許六)」となりぬ。

一僕とほくくありく花見哉

季吟

小袖ほす尼なつかしや窓の花

去來

隠れ住んで花に眞田の謠かな

蕪村

花戻り錢落したる坊主かな

關更

世相見來れば多趣なる哉。されば「花に來て都は暮の盛かな(其角)」に憧れては「花のかげ笑上戸

の美人あり(關更)」に歸るを忘れ「据風呂に後夜きく花の戻りかな(蕪村)」の輩も少なからず。かの「鶯の輪の崩れて入るや山櫻(丈草)」の景を目にし「嚏にも散りてめでたし山櫻(蕪村)」の境に徨ひては、遂に「花に埋れて夢より直に死ななかな(越人)」の感も生ずるなるべし。若し夫れ「淵青し石に抱きつく山櫻(凡菫)」の思想の如きに至つてはむしろ「山櫻抱石蔭松枝」の翻案とも見るべき乎。

思ふに櫻花に對する比喩法、配合法は日本民族の自然觀を考察するに緊要なる條件なるも吾人はしばらくこれを後日に期して速かに結論に急がむ。

四

芳野の櫻、月瀬の梅、邦人の胸裡に徂徠するも亦既に久しい哉。梅の清冽なるは以て超脱の高士に比すべく、櫻の濃艶なるは以て窈窕たる淑女に較ぶべし。一陣の春風に紛々たる落花は清廉なる日本武士の氣魂なり、凜乎として凍雪に堪へ、朔風に微笑するは貞烈なる日本女子の情念也。而して丞相の愛着に太宰府頭の春を彩りし花は修羅場裡、艦に一点の光を添へ、八幡社前の舞樂の坐に烈婦が苦衷を語りし花は又没落のきはに二卷の歌集を止めし武人の一生を飾る。これや紅、かれや白、開いては彩華六合にわたる、凋んでは芳香千載に普ねし。若し英の薔薇に於ける、佛の百合に於ける、漢の牡丹に於ける各々國民性情の象徴として見るを得べくんば、櫻梅は正に大和民族を代表して餘蘊なきものと謂つべき也。

かくの如くにして飛錫の詩人は花下の入寂を希ひ、狷介の隱者も洛外の方丈に自然を友とす。

自然の前景には必ず人事あり、人事の背景には必ず自然の潜めるこれ實に邦人の通有性にて、かの樹間の小徑悉く苔蒸せしを見て直ちに園丁をしてそを除かしめし碧眼の、到底夢想だにも及ばざる所とす。思ふに此大自然の懷に抱擁せられ育成せられし烟霞癖は忠君愛國の誠心と共に、孝悌真信の情念と共に併せて以て日本民族の一大美質として稱揚すべきなり。

今や物質文明の暗潮は日夜澎湃の浪をあげて花彩列嶋の岸を嘯み、汀を洗ひ、清きもの、高きもの、趣きあるもの、一切を擧げて溷濁の淵に陥れんとす。是に於てか詩人秋風に向つて歌うて曰く、

あゝ願くは爾の呼吸、天のはてより地の果に吹き

來る無限の風となりて禍惡悉く吹き拂ひ光と愛と

詩とをして、ながく此地を掩はしめよ

梅を經に、櫻を緯に、錦繡織りなせし詩美の民よ。吾人東方の曙光を待つ既にすでに久し矣。

貧しき材料を以て菲才敢て事に當る、洵に盲人象を相するの類、識者の責に會はゞ唯烏々と云はんのみ。

四高和歌會詠草

八波 其月

つれなくも君は答へず呼び呼びて吾は木魂となりぬべきかな

高かるは普賢菩薩の乗りものぞなごゝ低きが鼻なぶりする

二十六なほ知らざりし處世難吾が甥十五早や口に

にする
たゝへ言かくぞ聞くべき我棺護りて語る人言とのみ

船橋や真中の船の一二艘押し流されし心地に語る

明日は誰れ我が門叩く生か死かそは明日の事いざ熟睡せむ

消えなんす火を吹き起し吹き起し炭を灰とす生や唯これ

ふと見てし横顔君に似たりきと遠くも追ひぬぬらぬ車を

君待つや京は五條の春の宵橋の擬寶珠の鏽摩りつゝ

何氣なう吾れ見ます目に罪ありと君は夢にも知らし召さじな

こちたくも綳帶したる御顔の傷はと問へば痣抜きしとよ

御眉根寄ると知り〜言ひ過ぎぬ齒に衣着せぬ心習ひに

ともすれば龍頭見ゆてふ魔ケ淵の沈鐘よりや風くるふ

某の旅某野に逢ひし馬子の顔ふとこそ浮べ秋風夕

空想の夢は破れぬ少女子の指きすつけし針のすべりに

吹く秋の風は心の扉より入り亂ると思ふ橋の上
かな

月ほのく静寂の丘の草木らはきらめく露をか

ざしが様に

椽握る神が手づから吾は横に君縦糸に世を織ら

れけり

心いつ白日を見むわれからの獄屋の窓に君が首

見る

誰にまねび初めしなさげぞ薄きてふ啣言がまし

き君にあらざり

かりそめにまねびし心去りあへぬ習ひとなりて

人泣かすかな

十三絃名ある君なり我が胸の柱なき小琴をか

でゝぞ行く

こゝろ今闇を封せりねたみなる火になほ美しき

君が姿よ

死ぬもよし月に船やり鐘を聞き珊瑚の宮へい行

き沈まむ

死の門は扉あらず目のはみ永世罌粟咲く野

に簞ゆらし

我が睡水の矢射るあまたびいたでを負ひて君

は且つ来る

いたち啼くなげしを傳ふ小ねずみのたゆたひに

似る叔父の家なり

冥府を今沈む幾尋おのゝきの身に冷えまざる君

思ふとき

淋し尙ほ來ぬべき道を辿るとてうたがひ胸に潜

むあらねど

くら闇はわれをたゝしぬまぼろしのゆきかひぞ

する罪のみはしに

河上駒水

人の心讀む術を知りわがこひを批判せるより老

は來たりぬ

二十二の秋はいつもの秋よりも何とはなしに少

し悲しき

我が歌はいつとはなしに泣き言の如くなりぬ

秋や來ぬらむ

さは言へど君よりさきにわが胸に住み家定めし

人ありと泣く

わが母の口真似をしてわれを呼ぶ乙女なりしが

いづれ行きしや

南蠻寺邪宗の經とビオロンの高き響に門に入り

し子

横雲を少し彩りはと消えし稻妻に似てこひは終

りぬ

少しばかり言葉すべりてさかしこき君に罪得ぬ

いかにどかまし

フラスコを振るたび毎に少しづゝ泡立つ如く戀

をする君

痺れたる頭ふり振り灼熱の大路を行けば泣きた

うなりぬ

我が心まだ火を噴かぬボルカンの如しと言へば

驚きし君

淋しさは沈まむす火にいさゝかの櫓を投じての

ろき火を焚く

泣く事は男の耻と口にこそいへど泣き得ぬ淋し

さは知る

君と並び面のみ似し人を見るわが錯覺の氣味わ

ろさかな

官能のどがりに響く鉄の音鉦の音に齒をいたむ

われ

寛 竹 花

われもまた凡なる人の群れに入りぬみにくき慾

に囚へられては

わが心鼻より水の入りしごと辛きに似たる苦し

さに居ぬ

情てふ熔爐に逢へばぐれなるに液と溶けたり鐵

なる我れも

哀愁の鬼が追ひ来る度ごとに君がひとみの底にかくれぬ

曳きつゝ

何事か火事場の如く胸さわぐ巖のやうな静さに

そを得むと波の重ら争へり指を弾かば沈まむ入

るて
うき人を刺さむ言葉を考へて一日つぶしぬ男は

濁りたる霧の底より点々と黄なる火の見ゆ都會の夕

ふと得たる二人が中の氣まづきはふとまた解ける情はをかし

月の夜を峯なる松の頂きに白き齒見せてききと猿啼く

いと艶に白き小指を組み合はす印象消えて絶えず苦しき

禿山に登る心の寂しみを胸にせし日は世に男なし

悲しかる思湧く日は母にすら物言はで居ぬ舌鏑

新潟や朝明け頭を花のせて舟はつゞきぬ橋より橋へ

その中に少し鏑もつ照る月と君が性とを思ひ合はせぬ

虚飾もて人は包まれ悟り得ず亡者つゞきぬ明るき國へ

黄昏にわづかに残る晝のごとくすゝ残る白き面影

會はざしと柔なる母が剛となる日よりこひ知り身の置處なし

寂として暗く冷たき死の森を罪ある子等は白衣

贖はむ罪は身にあり過去に尙ほくるしむ我れば

その術もなし

指して

細眉をあげて時計を見る人よ小さき瞳は底に動かぬ

日を見れば我眼つかれぬ月見れば我目なつかし

紫の大野よ花のうす明り濡れし衣に秋の香を嗅ぐ

秋草の花
君と我れ心の中に橋かけてともに渡らむ手に手を取りて

瀛車の窓東寺の塔はむらさきに夕靄したり日は

共々に波にたはむれ秋の夜を月のアベニユ一興がりて行く

或る街の辻道哲の言葉尻心にふれてわれを迷はす
腐れ水落ちては濁る深淵の沈澱物は底にいきます

女房と今日得し傷に油ぬる長屋住ひの大工長吉
春の日をひとり花野に立つ吾れは鳥の囀りとかむと思ふ

口紅の奥にならびし白色の楯は齒なりき君は語らす

月のごと面輝けど冷却のこゝろまで似る人にて

重なりて生えし齒ならばいと尊と見にくし抜かば如何に嘆かむ

一舟の人散りくゝに撫子の河原行くなり宵月となりぬ

秋神は今し絹すれ過ぎにけり橋の手すりに白き

優しげに言ひ寄る憎し鳶鼻のさがの悪しさを我れ知らずとや

澤木藻汐

中許袁呂

傘洩るゝ友仙染のかたそでに秋さめしぶく三條の橋

さまゐるかな

逝く秋の山家集繙く灯のかげに啼き寄る虫のさ

罪しませ瞳に名得しこの君はかりそめ事のやうにこひする

さやかさかな

百橋 蛤城

花はみなしろきぞよけれ白薔薇大白蓮は夏のわが花

暮れて行く柳の町を淋しげに雨に濡れたる幌くるまかな

かゝる夜は狐啼くぞと啼きさまを幼く真似てそらし給ひし

袖 口拍子稽古戻りの舞子等が雨にぬれたる秋草の

秋の夜のメランコリアにわりなくも淡き罪をば得そめしと思ふ

曉の鐘に雨夜のもやはれてぬれたるまゝに世は明けて行く

夕ぐれや母がみ墓も線香も傘する我れも時雨れでありぬ

水底に沈める如き塔影のそれにも似たるわが胸の君

幾人ぞ知らずよき子の血を吸ひしおん心なり錆こそ見ゆれ

秋の野や梢々の法師らが黄金衣に地にくだります

相見ては笑顔つくれど人知れず涙のみする子なりと聞きぬ

三浦 光雄 岸に立ちて荒渦卷のたゞ中に石をほうれば心地よかりき

朱雀野の暮につく／＼涙しぬと郷なる叔母に書

物真似の巧みなるをば賢人と言ふとかたれば顔赤めあり

岡田 露郎

土屋 胎川

人無きに夜ごと鳴るてふ荒寺のさびたる鐘にやもり眠れり

裁きの日罪におの／＼悔なくば血を吸りつゝ誓ひたまひぬ

秋雨にぬれたる萩と三尺の洗へる髪といづれもよろし

夏深み袖は緑の香にぬるゝ夕は人のなつかしきかな

誰ぞたれぞみめよき人の禁衛の一人となるを罪とあざける

戀草ぞ朽ちなば落ちて血とならむ刈らむ鎌あらば錆増すと知れ

さわ／＼と枯葦ふみて何ものか鐵錆赤き沼を渡りぬ

花窓の俤こそは似たりつれ幻に生く君なりけらし

君に言はむ語合掌の胸に秘め迫り來る死の海に沈まむ

みめよきを銜ふべかるをそむけしは眉にかゝれる傷ある故ぞ

暗がりに物をさがせる人のごとこひをたづねぬ若かりしかな

井田 美絃

身悶えぬ奥齒に物のはさまりしやうにも君を損ひしかな

道に逢ふたゞかりそめの人のごと別れ行く子を恨みても見ぬ

ぐる人なき

伊勢武者の兜の星を横に日の照して花野たそが

るゝかな

さびしさは深き淵出で深林を忍び來ること迫り

ぬるかな

縦に横に夜の帳を引き裂きて日は現れぬ清き波

間に

泣かむにも聲もえ上げぬ男の子なり母のなき身

は肩身狭うて

秋風はたごへば巫女の姿して又も悲愁をわれに

傳へ來

齒車の交るそこに人の世と同じき戀もあるらし

きかな

琵琶終て法師が寝ねし山寺に虫哀れさを泣き

増す夜かな

秋の夜や讀みつかれしてまごろめば燈火細し滅

亡の頁

岩白し池水は青し石山の赤き薨に三日月落ちぬ

長谷川 寛

海原を折々すぐる雲影はいたくも似たり罪の念

に

水底に沈みてうめく藻の様に男女等もつれゆく

かな

舟 木 琴 月

秋さては淋しきものを殊更に君が訃聞きて流涕

もしつ

加 藤 龍 法

祭來む日をば指折り數へてし乙女なりしが今は

嫁ぎぬ

山 田 錦 溪

わが性のすぐなるさまを吾れのべむ物真似事は

われ好まざり

裏の田に引殘されし大根の如く淋しく見わたま

ふかな

わが君はよこしまごとを吾れ云ふも等閑ならず

聞くがうれしき

哀調は君の心の緒よりぞと秋の夕のわが胸こた

ふ

沈澱のあとの水なごいかばかり澄みてありとも

吾れは汲まざり

心臓の痺れたればややさしげの御言葉なれど反

應はなし

五郎兵衛が石狩行きの繩船の船底蟲の如く世に

生く

冬の雲動かすあるはめしひ人の白き目よりも尙

ほ恐しき

流人等は罪の數ほど荒涼の嶋の月日を石積みて

泣く

崑崙の雪の一片手に盛りて消ぬ間に海を越ゆる

にも似る

春雨や茶の木畑の鶯の如く裸形に濡れても見た

答へずてすむは答へずわが性のかくの如きを君

はめづらむ

秋二十句

春 夢

橋守の錢籠に萩の亂れ哉

雲ならん障子に萩の薄れゆく

屯田の二年案山子の煩に飽く

末世を慨す反身の案山子哉

あらまほしき案山子百態續篇も

星落ちし穴に石打つ秋の山

節疎き竹選びすや秋の山

兜堀りて古戦場と知るや秋の山

眉青けれど口吻は狐や秋の山

秋晴や巨船入るに橋上へ刎ねて

秋晴の賛句も縦や天柱石
 廢坑の青き水捨つ櫛紅葉
 落鮎や湖床の説に疑義ありて
 下流四十八岐す河や鮎落つる
 澁鮎や二の膳の圖も旅の興
 晝趣殺じといふ崖崩れ鮎落つる
 簀卷解いて銀杏の葉に知る山の秋
 銀杏の繪に雌黄乏しき蝸牛庵
 新發意のうつゝ心や銀杏散る
 湖國に歸心動くや散る銀杏

晩稻田へ移す早稻田の案山子哉 繞石
 送別
 行く君の馬鬣を吹くや冷やかに 雨童
 一度ならず二度ならず唐辛子 孤月
 去る燕又來よ巢掃き待ち居れば 雲外
 望月の缺くる習や後のやみ 癡念佛

渡り鳥

女護嶋の見ゆると云や渡り鳥 靜池
 歸耕の記草せば裏田鳥渡る 雨童
 ゐのこ雲風に吹かれて鳥渡る 同
 薪割るか桑結はようか鳥渡る 秀菜
 濱に語る明日の日和や渡り鳥 天嶺
 杉造林松造林や渡り鳥 雲外

四高俳句會句鈔

(大谷繞石先生送別會席上吟)

離別

別るゝと云ふに況んや秋無月 繞石
 秋雨の冷たき袂拂ひけり 同
 蹄鐵も打つ村鍛治や花木權 繞石
 ふせかへて萎れし葱や花木權 同
 御夢想の灸師が寓の木權哉 靜池

移轉車荷癖直すや木權垣 錦溪
 鑛山休の寺灸治日や花木權 同
 系圖に缺字あるも憂しや花木權 春夢
 狸使ふ巫女の遺言や白木權 同
 燈なき坐に入集ひ來し花火哉 靜池
 釣花火執念き珠を惡みけり 同
 紅燈を輪に振るを合圖花火哉 同
 浦祭花火師遠く船に在り 雨童
 花火殻落ちある磯の夜明哉 同
 變色の月も雨中の花火哉 絃子
 花火師の馬手の爛れの屋紋哉 錦溪

(故阿部秋雨君追悼會席上吟)

秋雨

傘立てる野風呂燻るや秋の雨 靜池
 傘もて古印打たすや秋の雨 秀菜
 うまし柿加減見る日や秋の雨 同
 溶く糊の水分れして秋の雨 同
 秋雨や耳掩ふ猿の彫りあへで 春夢
 雁飛ぶや北辰直下標立てん 蛤城
 雁鳴くや此浦漁歌の尻高に 同
 雁宿の馬止杭や渡る雁 錦溪

雁

厄勝に男の子生れし栗の飯 秀菜
 栗はねて凡俗の禪崩れけり 蛤城
 雁飛ぶや北辰直下標立てん 同
 雁宿の馬止杭や渡る雁 同
 雁鳴くや此浦漁歌の尻高に 同
 雁宿の馬止杭や渡る雁 同
 雁飛ぶや北辰直下標立てん 同
 雁鳴くや此浦漁歌の尻高に 同
 雁宿の馬止杭や渡る雁 同
 雁飛ぶや北辰直下標立てん 同

花火

三つ玉の三色に消えし花火哉 靜池
 山三凸谷一凹や雁の棹 同

時評

如是觀七則

野球部に寄す

木葉は黄ばんで落ちる、川は日増に瘦せる、野山の景色も大分、うらがれて来た。貧しい我にも云ひしらぬ感が、とめどもなく湧て来る。先頃友が「呪はれたる野球部」なる絶叫は、如何に痛切に選手諸兄の心には響いたらう。自分が茲に改めて云ふ必要は無けれども思ふ事云はざるは腹ふくるゝの業であるから、われは敢て我が感慨を諸兄に致す。

梢に蕭條の響を宿す吉田原頭、日は嵐峽の彼方に落ちて、暮色いつしか四邊を罩めた、あの秋の夕。敵の凱歌を背に浴びて、夕闇辿る我等

の寂しき姿を顧みると、今更のように寒さが骨に應へる。美しい紅葉の色を外にして悲憤の涙に咽びし眞如堂の一夜、公孫樹下の小雨を眺め暮せし百萬遍の一日、かくてわれは堪へ難き憂愁を懐にして北に歸つた。

爾來四邊は冷眼を以て兄等を迎した、「孤劍を撫して尾山の一角に立つ、憂髪亂れてわが思や深し」と云つたのも無理はない、呪はれたるの語は最も適切であつたかも知れぬ、この間に時立して毀譽以外に超然として徐々と修養の一路を辿つた諸兄の態度は、いぢらしくも又美しいものであつた。かくて春は暮れ夏は去つて、學年は改まる。吾人は更に多大なる興味と同情とを以て兄等を迎へた

秋九月、新しきチームは成つた、現今の精勵は非常である、練習は頗る盛んである、然し吾人は更に十倍の熱心と意氣とがあつて欲しい。

雪に暮れ、靄に明ける北國空はわれらにとつて勁敵である、この難關を切り抜けて飽くまで戦ふには並々の覺悟では覺束ない。堅氷何者ぞ、

風雪何者ぞ、熱球一度飛ぶ處、そこに豪宕の氣溢れ、鐵棍高く響く處、そこに雄邁の歌は成る、われは四高の健兒なりとの意氣は造次顛沛も諸兄が胸裡を去つてはならぬ。

吾人、嘗て語を聞く、曰く「灼々たる園中の花、早く開けば、また先づ萎み、遅々たる瀟畔の松は、鬱々として晩翠を含む」と、賦命には秩序がある、成敗は人力を以て如何ともなし難い。されど諸兄にして衝天の氣魂と猛烈なる練磨とを相呼び相應せしめたなら、誓つて四高野球史に光榮の頁を誌す事が出来ると思ふ。

落つる葉の寂しき秋を憂しとのみ眺むべからず、又花咲く春の京のあした、かの樓蘭を斬つて拏舞するの日の一日も早からむ事を祈つて筆

を擱く、至囑！至囑！！（としや）

庭球部に望む

京畿を北に去る事、八十里、陰雲彌が上に重なる此處尾山の下、鬱勃たる意氣を抑へつ、皆を決して南方を睨む、わが庭球部選手諸君！、諸君が必勝の機を逸せし無念はさる事ながら、暫らく退いて靜かに慮る所あれ。荒れたる宿にも花は咲く。諸君にして自ら深く恃む所だに有らば濶然たる天地は靈臺方寸の中にも宿つて、奏づるに不斷の春の曲を以てしよう。雪や霏や霞などの面魂なみくならぬ醜男どもが、如何に北陸の天地を我物顔に振舞へばとて毫も意に介すべき事ではない。炬燵を擁して飛行器の完成を待つは老御達の事で、若い血潮に燃えたつた青年が赤銅色の双腕を撫して口にすべき事ではない。

木葉なき林を仰いて花さく頃までを、かゝなふれば、悠に百有餘日ある、險惡なる北國の冬空とは云へ晴間を求めたら技を磨くに、それ相應の時機は得られよう。此機、此時を利用して以て優秀なる實力を修むるも又至難の業ではあるまいと思ふ。

冬の休暇は二週間である、此間をうつら／＼と夢のように雪の中で暮すは強敵を眼前に控へた庭球部其ものにとつて決して策の最上のものではない。能ふべくんば選手諸君は二組なり三組なり相携へて紺青の空美しい南國の磯邊に赴いて、望潮の歌を耳にしながら益々その鐵腕を練磨していただきたい。

要は來らん春、浴中を圍繞する三十六峯をして四高の凱歌を反響せしめたいとの婆心に過ぎぬ、幸に加餐せられん事を。

(としや)

南下軍！

前二項を草してより二旬、十一月末に至り突如として、揚子場裡、堂々たる二大檄文を見る。我等心私に陽春四月とこそ期したりしに、今や活躍は眼前に迫れり、即ち筆を叱してこれが辭をなす、

北星冴えたり、蒼浪鳴れり。短檠光薄き處、祖先が戰袍を翳し、その血痕斑々たる越し方を思ひては若き心の今更に亂る、哉。

亂るゝは胸、湧きたつは血潮、やるせなき悲憤の情を五尺の躰軀に収め、春と過ごし秋と暮して一歳又一歳、燃ゆるが如き意氣、凝つて成りし一封の書、搖落の空を貫いて、南、遠く飛びぬ。あゝ、一撃起つ能はざるは蛺蝶の徒なり、男

子生れて地に墜つ、須らく百敗挫けず倒れて復立つの慨なかるべからず、こゝに於て吾人は卿等南下隊諸士の氣魂を多とせざるを得ず。前二項に於て感慨を披瀝したる吾人は今茲に云爲す

るの要なきも、行に臨んで、更に一言以て臆とせん乎、

趣味の墮落

聞説く「知可以與戰、不可以與戰者勝。識衆寡之用者勝。上下同欲者勝。以虞持不虞者勝。將能而君不御者勝。此五者知勝之道也」と、諸士亦自ら深く藏する處あらん。さはれ徒に勝敗の末に囚へられて北辰健兒の本領を没却し、以て武門の榮を墜す勿れ。吾人が諸子に期待する所のもは、努力のみ健闘のみ、爲す可きを盡せば即ち足る。豈これを他に於て求めんや、

世の中は目まぐるしい程轉々する「元祿の世に百年の壽を保つたものは明治の御代に十日住んだと同じである」との言葉は痛切に吾人の胸にひやく。

弦音高く放たれたる白羽箭は、今し吉田原頭

牡丹色が流行る、鶯茶が流行る、オリブが流行る、それさへ昔語りとなつた。半獸主義だ、生の惱みだ、耽溺だ平面描寫だ、それも雜然としてアケロンの彼方に流れ去る。

に落つ。我等が庚戌の春は洛陽の快戦を以て明けなごす。思ふ、行雲悠々たる京の空、峯巒に流れ清く、健兒の意氣を鼓舞する又大なるものあらん、あゝ、近畿の山河、一に諸士が活躍に任す。行けや、君!!!

(としや)

大江の畔に立つて滔々たる河水に對せよ、木が流れる、須臾にして見えなくなる、藁束が浮いてゆく、すぐ波に吞まれて了ふ、高瀬舟が通る、それさべやがて朝霧の中に消えてゆく。あのけぼ／＼しい色彩に眩惑させる社會百般の事物も「時」の流れに押され揉まれて無限の未來に推移すれば、思想の搖蕩は小止みもなく日夜暮

露と鳴りごよめいて居る、この推移の中、この搖蕩の間には幾分の進歩と、發展とが伴つて、文明の花は妖艶な色と芳烈な香とを惜まない、しかしその葢たるべき人間の胸奥に潜める微妙なる匂ひ、即あの床しい阿古屋珠とも云ふべき趣味の程度は、年毎に墮落しつゝ、居るのではあるまいか。

今や、金錢は凡てのもの、標準となつた、爵位はあらゆるもの、規矩となつた、青年はこれがために囚へられて遂には神聖なるべき學術をも犠牲にして顧みなくなつた、月給の多寡は人物の尺度となり、財産の有無は人格を上下する、青年は唯榮華を夢み、虚名を得んがために、人爵黃白の神殿に跪いて、あらゆる青春の力と血とを傾倒して惜まない、しかも「肥馬輕装して閭里を過ぐ、兒童の憐みを得ると雖も、却つて識者の卑みを享く」と云ふ事に氣がつかぬ。斯

の如き成功のために讚美せらるゝ藤公、ロックフエラーは禍と云はなければならぬ。人爵は帝王の一呼吸である。黄金は薤上の露である。山は築くべく、川は穿つべきも偉大なる人格に至つては眞に天の賚である、しかも更に個性の練磨によつて初めて燦然たる光を放つに至る。偉人の性格を理想とせず、却て偉人行爲の半面に過ぎぬ成功の二字に惑溺せる青年多き現代は誠に寒心すべき危機であつて、かの市井の浮れ節が一躍して武士道鼓吹を標榜するに至つたのは決して驚くに足らぬ。

かゝる現象は獨り青年の罪ばかりに起因するものではない。人を教へ、人を高め、人を導くべき現代の道徳と教育とは等しく墮落の淵に陥つて居る。今の世、國民の尤も信仰し、學者の尤も崇敬して居るものは形式である、條文である、將た、また法令である。野の花の如く森の

小鳥の如く若き榮光に懨懨する青年は、さながら罪人の様に取扱はれ、異性は白日の下に相語るをさへ罪惡と見做されて居る。道學者や教育家の口にする所は徹頭徹尾、方則であつて、飽くまでも律令の大刀を振り翳さうとする。默想の結果卵と時計とを取違へたニュートンは彼等のためには沒常識の狂人である、半生の閱歷を戀に送つたゲーテは彼等の目には破廉耻の惡漢である、かくの如くにして條文は人生批判の唯一の經典となつた。

こゝに於て一切の活動と進歩とは阻害せられて、無趣味、沒理想の惡風潮は青天の下に躍り上る。煩瑣と束縛とは心靈の自殺を強ひ、法則の火印を面に烙てられた青年の頬は見るが中に褪せる。宋人、苗を握く、罪は何人に歸すべきであらう。

更に目を轉して宗教、藝術の方面を見んか、

古今の秋を貫いて一脈の活氣を漲らす精神界さへ今や混沌を極めて居る。自由平等を尊び、人道の大義を口にせる宗教は常に準繩と刑罰とを以て人に臨んで居る。慈悲と云ひ神の恵みと云ふ名目こそ美しいが、裏面の意味を搜れば即ち神罰である、恐怖である。理想と名づけられた偶像の下には習慣と形式とが宛も宗教そのものの如く振舞うて居る。かくて信仰は固陋となり、思想は偏狹となり、基督の啓示、佛陀の教義は杜絶せられて嚴肅なる人生の意味は杳として求むるに由もない。

文藝界の動搖は茲に改めて云ふ必要もない、泰西の新潮に惑溺して大和民族の國民性を蔑にし、或は肉の奴隸となり、或は物質を渴仰し、所謂人生の眞の描寫なる假面の下に、青年の情緒と思想とを奈落の底へ陥れずんば已まぬかの姿である。

終りに臨んで更に一言を書き加へしめよ。かくの如き世に生れあひたるものは禍である。禍を禍として廣き世界を膚寸に縮め、自らその中に齷齪するは阿呆の極みであらう。さらば活きんとする者よ、心靈の響を尊ぶものよ、自ら永遠の光明に浴せんとする者よ。御身等は、先づ現代に横溢せる、あらゆる低級趣味の偽文明を根底より覆して猛然、向上の一路を奮進するの覺悟と努力とが無くてはならぬ。(としや)

文科諸子に告ぐ

むら時雨はげしき宵にも候かな。

きのふけふ野分だちて前栽の菊もさんぐくに打ちなされ、背戸の芭蕉は見る影もなう破れ果て候頃を、如何わたらせられ候やらむ。われは獨り小窓の下に暮れゆく秋の聲を聞き乍ら、わが感想の程、聊か申し聞ゆべく候。

世に文學と申せば、どうでもよいもの、様に思ふ人も随分と見うけられ申候、其人の偏狹はさる事ながら、畢竟文藝の何たるかを解せざるに起因するものにて、一部分の低級文藝のみを見て全豹に及ぼす似而非推論たるは申すまでもなく候。されどこのまゝ捨て置き候ては大袈裟の云分ながら人こゝろ砂漠のやうに荒れ果てずやと存せられ候。毎々申す様には候へど科學を唱ふるものは政治をしらず、法律を云爲するものは藝術を解せず、と云ふ有様にては手ありて頭なき人、頭ありて手なき人などのみ徒に陸梁し、そこに趣味もなく調和もなく、明け暮れ目にし耳にする所は讒謗、排斥、争鬭の外はなく世を擧げて一路一面の、あさましきものと成り果つべく候、これわれらのえ堪へざる所にて何ぼう憂ふべき事には候はずや。

四五年以前、清高なる趣味普及の目的を以て、

紫影先生指導の下に、文藝講演會なるもの文科學生の主唱にて折々至誠堂に開かれたりと聞き及び候。今ををこゝに再興致し候ては如何に。

これや誠に燃ゆるが如き功名利達に憧る、胸にとりては一服の清涼劑かと存せられ候を、勿論われら學生の、これと申す研究の暇もなく才もなき身にて候へど雀は雀なりに歌口も候ふ事なれば、それ相應の攻究の結果を披攤申すべく、はた古今詩文の朗讀に興を添へ、又諸先生の該博なる御研窺の一端をも洩らし玉はらはわれらの愉快これに過ぎたるはなかるべく候。ラムと共に床に伏して所謂 To suggest the dreams の眞味を咀嚼せんはもとより缺くべからざる事に候ふめれど時々赤い顔してお饒舌りするも一つの修業にて候ぞかし。

有様を申せば小生は常識の範圍のあまりに方便的なるに慊らぬものに候、科學の組織の餘り

に形式的に甘せざるものに候。されば常識以外に光明の地を求め、科學以外に安息の境に達せんとす、さ候へど壞ちたるものは補はざるべからず、倒したるものは樹てざるべからず候、今われらが直接經驗に歸り候て方便的形式的を超脱せる地盤の中より思想と感情との實在を促へ、又清新にして且搖蕩せる萬象の間より、美を中心としてわれらが本原的傾向に最も切實なる世界を求め候はり藝術の外にはこれなきかと存せられ候

畢竟美を求むるは無窮を追ふの心なりと申し候へど美に情悦して限りなき路を辿り候てこそ、われらが心靈はいよゝ淨まり候ふべく實的享樂を對象とせる藝術の意義もこゝに在らじかと考へられ候。ウインゲルマンにて候ひしか「藝術の花盛なりし處には、また最も美しき人々は生れ出でにき」と、申せしも理りにては候はず

や、さ候へば右の會、少なくとも一學期に一度は庖厨或は、垣、戸前の如く、玉樓に住む王候も開きたく存じ候、又その際、能ふべくんば音楽裏店の八さんも同じく必要と致し候。藝術は之部とも相提携し、詩文の間をば聲樂もて縫ひ候れど異なり、八さん輩には用なけれど王侯の家庭には、権利義務に活くる人、コンパスと定規に忙庭には、缺くべからざる御座敷、調度の如きものしき人、あるは蛙や鮎の腸に鼻うごめかす人、にて候、されば藝術なき國家は調度なきの家庭様々に集へきて諸共に一夕を美しき郷に暮さむに、てすぐれたる國家とは申されまじく餘裕あるは強ちに無用の事にも候ふまじ。

かゝる議も所詮は我世の趣味の日増に衰へゆくを憤る餘に申し候なり、今、一國を一家になぞらへ候はんか、爐に沸る湯の香、ゆかしく、床間には蒼古たる一軸を垂れ、白磁にはその折折の花を絶やさず、しかも家政萬端、整然として亂れざる家庭と、朝より夕まで生活に追はれ、時には隣人と墻に閲ぐ、その日暮しの長屋住居とを比べて御覽候へ、孰れが優れたるか申すも愚かにて候ふべし。政治とか軍備とか申すもの

は國家ある以上は必定の要素にて一家に於ける
 餘裕ある即藝術を有する國家は立派なる國
 家と申さざるを得ず候。かの漱石先生が「智に働けば角がたつ、情に棹させば流される、意志を通せば窮屈だ、兎角人の世は住みにくい。……住みにくい」と悟つた時、詩が生れて繪が出来ると申されしも詮するにこの餘裕ある世を憧憬したるの聲に外ならずと存じ候。
 二、に於てか藝術は不生産なりとの非難も生じ候はん、その儀ならば善良なる家庭がその子

女に及ぼす影響と八さんが子忤に與ふる感化とにて筆を擱くべく候、不宣、(としや)

寂しき世

を比ぶれば思半ばに過ぎ候ふべし、又藝術は世を輕佻ならしむるとの論も候へど浮薄なる民が却て輕佻なる藝術を生したるかは未だ俄かに定むべからず候、所詮はセルローツを讚美したると共にワッツを崇敬したる英國民の態度こそ望まじきものにて候。一あな、御免候へ、かゝる事どもは諸君に申すべき事にては候はざりき。

日頃の鬱の逆しり、偏に御ゆるし下されたく候友よ、いつも同じき琴の絃、掻き鳴して今代の没趣味を嘆ずるも、鳥辭の限りには候へど、わが耶利米亞の歌をなすの已み難きこそ、是非もなき憾みにて候ふよ。

この憾み解かんこそ、わか返すくの願にて候ふ。諸君の御意見如何あるべきや、承りたうこそ候へ、

牛の涎の長々と書きつけ候かな。さらばこれ

○むかし湖畔の詩人は歌ひたりき。われに樂しむべき自然の美なからむには、むしろ海を踏みてトリトンの歌を聞かむと、されど今尙わが胸に新しき響を傳ふるぞ訝かしき。

○ゆかしき事の日毎日に廢れゆきて、澁面なせるバリサイの人は我世をばわれは顔に振舞はんとす。心せよ、若き人よ、砂漠に花は咲かざるぞかし、(としや)

わが心、樂まん乎

○頃日、故郷より菊人形の繪葉書とて送り來れり。美は則は美なりと雖も、技巧を誇らんがために花の自然を外にしたるものなるを思ひては、われは限りなき苦しさを禁する能はざりき。是れ外形の末に囚へられて尊むべき個性の發展を蔑にするもの。あゝわが心、樂まん乎。

○籠の小鳥は日ねもす囀りぬ。繫がれたる馬は幾度か杭の周りを馳せめぐりぬ。小鳥の歌は日々に濁り、馬の喘ぎは愈々まされり。あゝわが心樂しまん乎。

○濁れる聲は籠を洩れずなりぬた。喘げる馬は鞭の下に斃れぬ。飼主俄かに周章ふだかきて、そを勞るや頻りなり、されどその甲斐なきを見ては、佛然として色をなして曰くこれ運命のみと、宛も初めより關せざるものゝ如し、あゝわが心樂しまん乎。

○物議れる人の言の葉の、さてもこちたけれ。口を開けば縷々として先哲の遺訓を説く、しかも夫子自ら實踐の人にあらず。春淺き木々の若芽に雪霜いたくふりかゝれり。あゝわが心樂しまん乎(としや)

秋燈餘燼

○校庭の樹葉黃に飜る頃我等は悲む可き飛報を得候、二部三年の茂木、肥佐多二君五箇の莊の山深く秋を探りて歸らずと、友の驚きをも幾何許りに候しよ、否友のみならず七百の校友を愛子の如くに慈み給ふ老校長の心痛察するに餘りあり候。

○至誠共同てふ旗色の兎角臍氣に成り易き此の頃、計らずも此の災厄に會うて如何に動くならんかとは憂の影にも些少の興味を引起し候、いくら世の中が己を計るに汲々たりとも火事だと聞けば過を咎むるは扱て置き路傍の人すら一桶の水を搬ぶに躊躇せざる世に候へば、まして余所事ならず、定めて校友を擧げて狂奔するものと存じ候。

○此の間若し二人を咎むる者あらば、疊一枚で濟む處を家一軒九焼に致さす者に候、粗忽した者は後で、ゆるりと叱り申す可く、先づ差

當りは肝心の火を消すが大事に候、兎角人は斯様な時には自分の責任免れん爲め、粗忽した者を咎め立て、疊一枚を家一軒に代へる者に候。

○先度の運動會にてクラスレースの際、一部の野次は盛に二部三部を利慾の輩と囃し立て候、利慾の輩はちと酷とは思ひ候へ共、之れも血氣が成す術と、かく申す某も一部に候ものから當日は盛に囃し立て候、思へば冷汗の出る事に候。

○利慾の輩ならざるを以て少くとも自任せらるる一部の友は、今回の如き我が校あつて以來の災事に際しては、己を捨て、狂奔せらるる事と存じ候、扱て事は如何に御座候ひしよ、成る程之が浮世かと今更ら乍ら存じ候、さるにても何んばう見苦しき浮世に候よ。○搜索に赴かれし人々は、やがて青靄めし頬に、

寂しき色を浮べて再び教場の人にならね候、慣れぬ山奥のいぶせき小屋に、空しき友の亡骸を尋ねあぐみで、明し兼ねては幾夜の夢を、冷き袖に結び候ひし事よ、今は詮方なし、自愛して、亡き人の爲めにもと御身を大切に成し給へと慰め申し候に、青き頬に冷き笑を浮べて、今日は早や學びし文を試みらるゝ身となりぬと申され候。

○友の憂はげに、さ語るを聞きし折、何處となく冷き魔の影の、細き管上げて、嘲笑ふが如き氣の不圖致し候、かゝる時に人の心は尤もよく分るものよと、耳端にて呷かれる様の氣致され候。

○僕或る時、葬の列に幼き兒の人の多く集まりたるを、嬉しと見候しか、白き衣着て喜ばしげなるを見、思はず涙を浮べ候、申す迄も無く幼き兒なればこそ候へ。

部 報

演 説 部

革新の方針

隠れたる四高、咀はれたる四高が演説部の發達によつて嶄然頭角を現はしたのは諸君の熟知する處である。寒潮事件以來内部の校風發揚に力を盡した我部は今や一道の光明に向つて外界に飛躍すべき時を得た。今迄は實際我部には軟弱な分子が非常に多かつた一寸と一例を挙げれば二三年前迄は頭髮を分けたハイカラ學生中に數多在つたが今は一人も居ない、形式に於ても餘程以前とは變つたのみならず四高の學生の精神が活氣を帯びて來たのは驚くの外ない、此時期に際し我部の眞價を社會に認めしむるは最適當

○若し大人にて、さ振舞ふ者の候は、馬鹿よ白痴よと見る人毎に申す事と存じ候、今回の捜索は兎狩でも、又寶探しでも無之候、涙ながらに亡き友の骸求めに參る者に候、若し不心得の者候て、我れこそ一番の功名を顯はさんなど高言致す者あらば蓋し前申す馬鹿や白痴を遠からざる者にて候。

○當て事と何とやらは向ふより外ると申す諺有之候、元より義理を辨へぬ下賤の間の事と存じ候しが、今は中々の事に候、之が浮世かとは實に泌々と思ひ申候。

○早や秋も去り愈々北國は雪に入り可申候、野と無く杜と無く白妙に包まるゝは遠からずと存じ候、今迄は雪を只美はしきものとのみ眺め候が此の事ありし日より、其の下に幾多の醜き容、秘むよとは、更にくゞ僕の頭を去り申す間敷候、之れが僕の四高に得たる最大の印象かと世にもつらく存じ候（たけを）

であると考へる。元來活氣あるべき青年が何等活動を爲さないで沈黙して居ると悪い事せずとも何か隠れ事でもして居る様に疑はれるもので運動部の南下が始まつてから我部も漸く社會の信用を確める様になつたのも無理からぬ事である、加ふるに北國の青年は今後の日本には餘程盡さなければならぬ順になつて居るから社會の耳目が向ふ處又自ら我部に集まつて居る。で我部は此時に當り内は各運動部の隆盛を計り外は四高意氣の存在する處を示す覺悟である、故に學期の始に當り委員四名が校長并に學生監を訪問し今後採るべき方針に就いて縷陳したので對し非常に賛成されたのは我部の深く悦ぶ處である、恐らくは我畏敬せる先生方に於ても又親愛なる諸君も双手を舉げて賛成せらるゝ事であるふと信ずる。而して其方法に關しては學生として爲し得る限り、擬國會も、地方巡演も、公開

演説もやりたい考である。願はくば諸君我部の意を察し各自演壇の雄となつて一方他日の社會活動を助くる爲又一方四高の名聲を擧ぐる爲極力辯論を練習せられむ事を切望するのである

第一回演説會

殿下行啓の爲め新來の雄辯家を迎へる時期を得なかつたので十月十六日を期し澄み渡つた中秋の月下、此處至誠堂に第一回演説會を開いた、當夜は九師團の參謀長有田砲兵大佐の出演をも乞ふたので聴衆も非常に多く、加ふるに新任の枝光法學士が我部の委員として初登壇、得意の商業論を説かれたので一同の満足思ひやらの程であつた、辯士と演題は次の様である

- 一、開會の辭 山口作之助
- 二、部長挨拶 三竹 教授
- 三、國家的發展 黒田 吉 郎
- 四、規律に就いて 有田 大 佐
- 五、英雄の情死を論ず 宇 野 耕 純

六、咀はれたる野球部

成川 武 男

七、自殺論

木 下 幹

八、個人主義と四高

文 室 重 敏

九、酒匂博士の自殺

中 納 錠 松

十、奈翁の最後

泰 茂 雄

十一、生活觀

山 田 敏 一

十二、吾人の覺悟

巢 山 了 徹

十三、我教育觀

河 合 作 次 郎

十四、商業論

枝 光 教 授

十五、閉會の辭

中 村 泰 治

(一)に於て山口君は我部の方針を説明し且今後の演説例會には地方の名士に乞うて共に演壇を賑はすのは一面に於て後輩指導の爲なると同時に各自か想像する社會の人なる者を明に了解し得る便あるを述べられた

(二)に於て部長は委員が演説部發展に就いて苦慮する旨を説き學生に辯論の必要なる事を懇切に指摘された

(三)の黒田君は新來の辯士で日本人と云ふ立場から國家發展の策を最現實的に説明せられた、聲は小さ過ぎた様で朗讀的に聞けたのは惜しかつた

(四)の大佐は陸軍部内の外國通と云ふ噂ある程で獨逸へも永く留學して居られた事だから何か外國の話でも伺ふ考だつたが軍隊の規律に就いて日本人の根本的に外國人と異なる点を説かれたのは意外であつたが委員が前以て願せぬ罪だとして

くれ給へ、而し日本人は無形の連鎖に繋かれある故に戰爭に勝つと云はれた事や又西洋の偉人を學ぶは日本人としては考物だと論ぜられた等は聴衆一同の頭に深く響いた

(五)の題が面白いのさ宇野君の名を聞いて非常に興味を持つて來られた人が多かつた、實際奇想天外より落ち南洲、三成、幡隨 等の例を巧に引いて聴衆啞然となつた

(六)は氏の位置が位置だけに聞く者も身に入れて聞いたが所謂肉躍血湧の感あらしめ野球部マネージャーとしての苦心察するに餘ありて、四高は氏の如き幾多の勇者を待つて發展するのだ、唯氏の演説の時校長が居られなかつたのは遺憾である

(七)大膽な議論だ曰く人生必ずしも樂觀的ならず生きて困る事あり等とは全くペシニスト式だ而し神は迷信なりとは少々恐入つた、氏も今宵が初舞台

(八)獨二特待生として又論壇の雄として定評ある氏は當らず觸らずの言に強味がある個人主義と利己主義と混同せられた様に思はれたが理想的學生又理想的辯士であるさ新來の諸君は感したであらう

(九)調子も態度も氣に入つた、唯「及」と云ふ言葉が餘り早く云ひ過ぎるが儘か本場仕込の様に見受けた一年の辯士に此人を得たのは心強い

(十)今少し練習せば恐るべき辯士になられるだらう、其今少しが中々困難だから此様な題を捕へては盛にやられたらよからう

(十一)演壇の元老、四高和歌界の泰斗山田敏一君は哲學者だ、近頃現實に近づて來られたと云ふ評あつたが生活觀する哲學者は成功する哲學者だ、議論の主旨は純自然派の云ふ所に似てゐた

(十二)面白い人だ、禪味を帯びてゐる、登壇のゼスチュアールが天下無類我部は君を得たのは研究的方面にも又實際的方面にも非常に益するであらう、而し原稿朗讀餘りに永かつたが満場一呑の態度は尊い

(十三)宛然老教育家の資格ある、一週一時間社會學を設けよとは先見の明ある、口調輕過ぎるのさ一句一句の間明瞭を欠いて居た氣がした

(十四)本論に先立ち辯士は原稿持つべしと教へられ禪僧との問答話に聴衆を笑はせ夫れより歐洲の商業の過去及現在に渡り日本人が大平洋に飛躍すべき時の覺悟を説かれた、本部が先生を得て増々隆盛に赴くのを非常に慶賀して置く

(十五)僕は閉會の辭に加へてアトとして辯舌を研究せられよと望んだとして現代の日本には雄辯家らしき者なしと云ふたが片腹痛く感ぜられたと思ふ、而し實際日本の雄辯界は淋しいもので金澤等は海岸へ行つても山へ行つても充分練習出来るから決して辯論界の弱者の住む様な悲觀的土地ではないと信する(以上)

右不肖中村泰治登壇の辯士諸君の思想の大体を一般に示す爲余が當時感したる二三点を一々書きたれば異論ある諸

君は直接談判を乞ふ、演説研究の爲なれば遠慮御無用但妄言の程は多謝す

野球部報

今年の夏は暑かつた、寒暖計は百度まで昇り太陽は眩む程遠慮無く照り付ける、大方の校友は懐しき古里の青葉蔭に漸く恐ろしい闇魔帳を逃れて甘き夢を辿る時、我か選手は血眼に成つて練習した、知ら無い人は何と見るであろう、餘り賢ども智ども見では貰れまい、然し我選手は世を擧げて嘲られたからとて其の堅き信念が撓む者では無い、我に敵ありと覺悟した以上は轉寢の暇にも鐵球の響を聞く。

明治の文明は皮相の文明である、明治の精神界には一貫せる信仰が無い、明治の文明は過去二千年間に發達した其れに歐米の空氣を鍍金した者である、明治自身が作り上げた者では無い、我

我明治の人間は鍍金の上に生て居る人間である、時々鍍金が剥けて地金が出る、或る者は地金が自分の本質だと云ふ、否や地金は過去である、鍍金して初めて己の本領を發揮する事が出来る、と云ふ、何れにしても薄い鍍金一重を界の

事である、我々は兎に角皮相の文明と云はれても仕方がない時に生きて居る事は確である。皮相の文明、信仰の無い文明、此の間に生ける現代青年に確固たる信念が無いと云つて攻撃するは無理である、然し無理だと云つて此儘過ぎる可き者では無い、献身的の行動が近時の青年に著しく減退したのは明な事である、然し之れは教ゆる者が大体の責任を背負はなければ成らぬ、現代の青年に教ゆる者は學問の樞府を學問の切り賣り所に改造して仕舞つたので明である、社會の爲めに教ゆるのでは無く個人それ自身の利益の爲めにである、個人の利益を基と

して社會の一員と成る者に偉大なる信念が宿り様は無い、かゝる人に依りて成されし文明が益益皮相に流れるのは當前の事である。僕か夏休み學校を離れて見た世の中は斯くの如き者であつた、野球の練習が始まつたので再びグラウンドの人と成つた時異様な感じがした、選手は眞黒に成つて百度の日光を全身に浴びてボールを投げるに餘念が無い、避暑と云ふ事が社會の摸範たる紳士の成さねは成らぬ規則である世に之れは又何んとした事かと云ふ疑問が時々芽ざした、然し笑ふを熄めよ賢明なる世人、明治の大賢人が兎もすれば忘れ勝ちなる一義の活動は百度の日光を浴びつゝ、選手を眞黒にして躍らして居る、選手の胸中には現代の賢人が知らざる覺悟と云ふものが在る、彼等は單にボールを飛ばす快を以て百度の日光に代ゆる程は稚氣ある者では無い、

選手とても一年に一度の歸省である、古里の山川は、あらゆる彼等の舊友を集めて他郷の憂さを慰めんと欲して待つて居る、あらゆる快樂に代ゆるに、あらゆる苦痛を以てして彼等は尙校庭に踏み留まつて百度の日光に眞黒に成るのは只にボールを飛ばす快のみか、ボールを飛ばす丈けならば古里の山川に親んでも出来る。彼等は母校野球部の名譽の爲め、恨を飲で倒れし先輩の爲め百度の日光を甘んじて浴びたのである、彼等毎日の行動を以て人は賢なりとも智なりとも呼ぶまい、が然し乞ふ之を見よ、一義の活動とは斯の如きものである、皮相なる明治の文明に生くる者は這般の境を解する事或は出来まいが二千五百年の歴史を益々輝す者は彼等である、崇高なる彼等の精神は皮相な文明に依つて動搖せぬ、信仰の無い世にあつて漂泊しない、二千五百年を縦貫せる大信念が見よ今燦として光を

發つて居るのである。之を思ふて涙無き人は、之を見て風馬牛なる人は鍍金の文明に避暑を喜ぶ所謂明治の賢人である、僕は此等賢人の餘りに多きを嘆ずると共に僕の親愛なる選手等が堂堂たるに暗涙を浮べた、

今年は栗田君以來大拂底を來たした千家投手が入學した、其の熱球は目醒しい者で我が選手の意氣は將に冲天である、

十月上旬富中を十四對二にて屠る、千家の熱球彼等の向ふ處に非ず三振を取る十一、攻撃に於て齋田ファストバッターの職責を尽す、下旬高中を對にて屠る、高中のグラウンド雨に濡れて戦尤も困難、然れ共我がチームをして安んじて敵を計らしめしは一に千家の熱球による、三振九、敵の打ち得し球皆弱球と成り一も外野に出ない、

十一月に入りて選手の練習は層一層の猛烈を

得ない。

皮相の文明を衝き破つて、二千五百年の歴史が將に絶大の光輝を發せんとして居るのである。十一月も末に成ると漸々天氣が陰嶮に成つて來る、雨は絶間なく降る。然し血を見て活躍する一義の活動は兩位に辟凹ま無い。若し人あつて寮の近方を過くれば、雨の日でも風の日でも千家の熱球かミットを打つ音を聞くであらう。初冬の北陸に秘んで居る一道の焔は、將に來らんとする爆發に、氣を込め熱を貯へつゝある。

我が歡聲が三十六峯を揺り動かすも早や三旬を余すのみである。思へば胸に血潮が湧く。(武男)

野球部歌

一、紫旌黄金の燭ゆらぎ、
玉觥影に照り映へば
歡宴の春の短くて、
現のまにも夜や明けむ

増す、冬は東海を襲はんとし、且つ白箭西京に飛ぶも明けて正月早々の事である、日暮れて暗碧の空尙憂然の響を絶たない、恰も好し高中敗を収め必勝を期して來る、正に二十三日午に近く我がグラウンドに炮火が開かれる、千家の熱球魔球愈々熱し敵攻撃に於て爲にブッシュの途に出づる外がない、然し三振を取る尙九、十對零にて彼又再敗、我各壘將守備又圓熟敵二壘を踏む者僅に二、外野將は徒らに敵の投手にのみ刺されて飛彈到らざるを恨む、會々六回戦に二壘オバーのライナー飛ぶ、中堅藤岡走るよと見る間に球掌中に歸す、高中唯一のセーフヒットも我が守備の堅なるに當つては又爲す處なしである。殊に特筆するのは高中のアット、バット二十七と云ふ四高始まつて以來のレコードを作つた事である。此勢を以て東道の弓取を破り三高に殺到する時を想像すれば快哉を絶叫するを

- 二十世紀の文明は、
花の巷にあこがるか。
過ぐれば後ばうらぶれの芝園碎けて涙あり
- 二、悲風地を捲き襲ひ來て、
唯衰頹を包めるか。
眞帆吹く風は異國の詩歌の甘き叫びぞ、
憂ひに鳴るを如何にせむ。
文弱の風、拂はんと、
光涼しき北星の、
立てり、四高の健男兒。
響くは未だ聞かざれと、
舞曲は未だ知らざれと
- 三、維新を去りて四十年、
榮華の夢を語れども、
胸にいだける王小琴、
こゝは大和の曉に
下に啓示をわれうけて、
立り、四高の健男兒。
- 四、偽善の帳、切り落し
大地を磨く熱球よ
鐵棍、火あり響あり。
妖氣あらば打拂へ
戯むる小魔打つてせ
- 五、管絃高く九天に
三千の素娥、瑤台の
大地の音を集めて
久遠の光、仰く國。
偽善の雪の鑽すとも
氷原くづれ、空霽れて
やがて響かむ青海波。(了)
- 六、虚空を貫く熱球よ
大地を磨く熱球よ
大和嶋根は東海に
七、あゝ覺めの間の一時を、
皇天の光、亡びずば
潮の遠音の小誠に

雜報

東宮殿下行啓記

緒言

かけまくもあやに尊き、日嗣の宮には、親しく青人草のさま／＼をみそなはさんとして、ことし、九月百敷の大宮内を出でさせられ、天離る越の鄙路へ向はせ給ふ。

境、僻にして舟車の便りも薄き北陸の地、鳳輦、鶴駕を拜るがみ奉るの機とてはいとも乏しきを、こゝに翠蓋を迎へまつりし民の心根たさふるにもなし。老を扶け幼を負ひて道に伏し巷に拜して歡びなけるも理りぞかし。

草枕、長き旅路の御疲れも御厭ひなく此月二十四日、駕を我等が母校に枉げさせ給ふ、我等、忝くもま近に御姿を伏し拜るがみ、親しく御盛

徳を仰ぎ奉り、北辰の光の彌増しに輝くを見ては虔仰の念、崇敬の心、いこゝ止め難きものありしを。

あゝ、われら斯かる聖代に生れあひて曠古の盛事を仰ぐ事の如何計り幸多き身ぞ、洵に歡ばしさの極み、これには過ぎじと覺えまつりぬ。

奉迎の事

千秋の思もて待ちに待ちたる二十三日の空は明けぬ。雲のたゞずまる静けき日なり。そよ風ゆるく梢を吹いて日脚も白む初秋の午后二時、七百の健兒悉く武裝して校門を出て下堤町よりこなた二町が程に居並びて静かに御輦の影を待ちぬ。

午後四時三十七分、二發の煙花は大空高く轟きわたりぬ、群衆俄かに動揺めきしも暫しの間、やがて水を打つたる如くに静まり返れば轍の響りし老若男女、人波をつくつて、青白の幔幕わたす片町通、紅白の幕ひきわたせる石浦町、さては青地に櫻花を白く染め出せる堤町を初め、大路小路は歡喜の聲を以て充たされぬ。

本校御成の事

二十四日。曉よりの小雨も午さがりになりて止みぬ。雲ちぎれ／＼に飛びて濃青の空は美しく微笑みぬ。午后三時二十八分。殿下には御機嫌殊に麗はしくわが第四高等學校に御着あらせらる。路上塵を収めて秋の日高く輝けり。

これより先き高等官、同待遇及講師は正門内に、事務員並に各部第一等級は門外に等しく整列して恭しく迎へ奉る。校長吉村寅太郎は玄關にて奉迎し直ちに本館階上に豫て設けたる御座所へと御先導申上ぐ。次で校長は學校の現状を記録せる書類並びに寫真帖(教室、寄宿舎、北辰

は次第／＼に近づき來りぬ。嘸曉たる喇叭の音は冴るたる秋の氣を搖がして奏せられぬ、われら銃を捧げて迎へまつる。

警視馬上ゆたかに先驅を打てば、東宮内舍人、東宮武官長これに續ぐ、殿下次で成らせらる、御躰にはカーキ色陸軍少將の御軍服を召され奉迎の庶民に一々答禮あらせられしは畏し／＼も尊き限りなり。今その御列順を誌せば次の如し

御先驅、同上、御先導、御車、侍從、同上、侍醫、大夫、主事、師團長、知事、後衛(以上御列)、侍從二名、武官二名、侍醫、藥劑師、東宮屬八名、内舍人、雇三名、警察部長、内務書記官、前田侯、鉄道院副總裁、控訴院長、檢事長、旅團長二名、鉄道管理局長、高等學校長、專門學校長、裁判所長、内務部長、參謀長、檢事正、運輸事務所長、副官三名、事務官、市長、縣會議長、同副議長、市會議長、家扶(以上列外供奉)

御車は徐々ぞ巡りゆきぬ、かくて廣坂を登らせられ、成業閣正門より御旅館に入らせ玉ふ。後には尊容を拜し奉らんとて近隣より集ひ來

會各運動部等二十枚)を捧呈し、更に本校の沿革に就て聞え奉る所あり、終りて更に改めて吉村校長以下左記の三十一名に拜謁を賜ふ

教授、中野嘉作、今井倉三、浦井隼二郎、高橋郁治、河合義文、宮川熊三郎、三竹欽五郎、西英盛、林連木、上原菊之助、小田切夏太郎、八波則吉、田中鉄吉、駒井徳太郎、大谷正信、赤井直好、高橋周而、枝光寅太郎、岡本勇、相良益次郎、石倉小三郎、水声幾次郎、雪山俊夫、岩城準太郎、西川巖、重光簇、星野信之、據釜正吉、教師、ウオルファルト、スタインル、スベイト、

夫れより 殿下には玉歩を階下に運ばせられ 第三部第三年級獨逸語授業(高橋郁治、教授)に親しく臨ませらる。次で更に後方の校庭に御出であり。此日朝がたよりの雨に、學校にては俄かに青竹もて御野立所を作りたる事とて 殿下には其もとに立たせ給ひ各部三年及各部二年を以て編成せる一個大隊の兵式体操を御覽あらせらる。講師、歩兵中佐田邊盛親(これが指揮官たり。初め 殿下後庭に成らせ給ふや、「君が代」の

譜は喇叭より流れ出で、森嚴の氣はあたりを罩め、一隊肅然として虫の羽音すら聞きなざるかと怪しまれぬ。

殿下、御野立所に入らせ給ふや、大隊は直ちに前面に行進して、銃の操法を行ひ、了りて背面部隊となり漸次斜行進して大棟の邊りに到れる折しも、敵兵突然として南町方面に現はれたりとの想定の下に、急ち方向を變じ、第一、第三の兩小隊、先づ散開してこれに當る、號令頻りに出で、行動ますます活潑なり、かくて戰機愈よ熟するや茲に一大密聚團となりて大突撃に移り。喚聲、尾山城下を壓して乾坤ために覆らんとす。次で隊形を整へ、殿下に對し奉りて分列式を行ふ、この際、殿下には忝くも擧手の答禮を授け給ふ、われら恐懼、申すべき言の葉もなし。

先きに突撃を行ふや、殿下は田邊中佐の乗

馬馳驅の様に御目を止めさせられ「あれは何國産なりや」と校長に問はせらる露國産なる旨御奉答申上げたるに「日本産の様で大變元氣だな」と仰せられ玉顔に御微笑を浮べさせ給ふ。尙兵

式体操は常に行ふか、且体操教師は何人あるかなど御下問あらせられ、校長は体操は常に實施仕り、教師は四人にて侍りと奉答せしに「それは善い、充分にやれ」と仰せられしとぞ承はる。かくて殿下は御踵を返へさせられ、至誠堂に陳列しある機械標本類、并に生徒成績品を御覽あり、各専門教授御下問に對して種々御説明申上ぐ。右ありてしばし御休憩あらせらる、その際生徒の勉學操行に就て御下問あり、校長つぶさに答へ奉る。尙生徒の成績品に御留意ありてその内、優等ものを御旅館に差出すべく御下命あらせ給ひ、何等御疲勞の態もなく尊顏いともうるはしく還御の途に就かせ給ふ。時に午后

四時十分なり。

御命令により御旅館に差出せし生徒の成績品次の如し、

- 作文(第一部英法科三年同獨法、文科三年、同文科三年)
- 英作文(第一部、英法三年、英語文科三年)、
- 獨作文(第一部獨法文科三年、同二年、第三部三年、同二年)
- 製作圖(第二部、三年、同二年、同一年)
- 尾山神社平面圖及師範校平面圖(第二部三年)、
- 動物解剖圖、植物解剖圖(第三部三年田宮猛雄)、
- 次に臺覽品目錄附説明を誌さむ、

生徒成績品の部

國語作文、英語作文、獨逸語作文、動植物實驗圖、測量圖五枚、機械圖二十枚、立体圖二十枚、平面圖二十枚、

物理學の部

ハルモノグラフ(互に直角なる二個の振動を合成して所謂リサージュの圖形を畫くに用ふ)、カライドフォン(此装置の金屬棒を撓めて放つときは、其端はリサージュの圖形を描きて動く)、聞き得べき音の高さに極限ある事を實驗する装置(長さを変にせる、四本の金屬棒、乙ガルトンの管)、真空管(管内に陰極線を生ぜしむる時はこれがために管内の礦物曹達沸石は美麗なる黄色の燐光を放つ)、ゴールの球(此装置に電流を

通する時は電流熱のために球は絶えず輪上を廻轉す、磁力線説明装置(電流の作る磁場の力線圖を實驗するに用ふ、殊に其圖を投影して説明するに便なり)、偏光装置(此装置に挿みたる石膏は無色透明なる結晶薄板三枚を並べたるものにて偏光のために各其厚さに應じて特殊の色を現はす、偏光顯微鏡(此装置中に挿みたる無色透明なる安息香酸結晶は偏光のために美しい色を現はす、アイブスの實體鏡)二三尺の距離より此實體鏡を凝視する時は立体的月球の像を認む)。

化學の部

V形電氣分解装置、鹽化水素、水、アムモニア等を容れて電氣を通すれば各其成分に分解す、鹽酸分解装置、(鹽酸は一容積の鹽素と一容積の水素とより生成する事を示す)、アムモニア分解装置(アムモニアは三容積の水素と一容積の窒素とより生成する事を示す)、電氣花分解装置、(アムモニアの二容積は、水素三容積と窒素一容積とより生成する事を示す)、鹽酸合成容積の比の不變なる事を證する装置、燃燒現象説明装置、理學博士池田菊苗考案驗氣器、(氣體の容積組成を生成する事を示すに用ふ)、酒精計量装置(葡萄酒、麥酒、燒酎等の諸液体中に存在するアルコール分を計算するに用ふ) 新式ビュレット吸氣器(接合を變ずる事なくして絶えず吸出する事を得、マクネシウム、ランプ(時計仕掛により帶狀のマクネシウムを操出し、之れを燃焼し光度を變ぜずして絶えず強光を發す)、酸水素吹管(酸素と水素とを燃焼せしめ

高温度を得る器)、生徒實習第一屬機定性分析公、一、 體銀化合物、第一水銀化合物、鉛化合物、二、驗体に一般試薬鹽酸を加ふれば日光の沈澱を生ず、三、此沈澱を取り少量の水を加し煮沸して濾過すれば鹽化鉛のみ溶解す、四、此物を濾過すれば銀化合物及水銀化合物は殘渣となりて分離す、五、此殘渣にアムモニア水を加ふれば鹽化銀は溶解し、六、水銀化合物は黒色の沈澱となるべし、指示藥反應、第一屬反應、(イ行の各驗体にロ列の各試薬を加ふれば夫々兩線の交叉點にある所の反應生成物を現はす

動物學の部

蕨苔標本額面(蕨の字、苔の字二枚)、蕨の廓大模型、蕨の雌花、蕨の解剖圖(本校生徒製作)、動物標本寫真額面(王蜀麥の雜種標本、最微具虫(多孔虫、約五十倍廓大)顯微鏡使用組織實習順序、北國野兔(冬毛)、兔の舌の味芽(約八十倍廓大、プレパラート(本校生徒製作)、ミクロトーム(切面機)、動物解剖圖(生徒製作)、動物、植物解剖標本(生徒製作)、植物迴轉器(植物の生長上、日光の影響の著大なるを示す、水漕(犀川、淺野川産、小魚類の生活狀態を示す)

地質礦物學の部

寶石類標本、鐘乳石類標本、化石類標本、圖畫測量の部、經緯機、水準機、測量用空盒晴雨計(指針の位置を見て直ち

に其地の氣壓及高度を知るを得、步數計(簡易測量に於て距離の概測に用ふるものにして携行者一步する毎に一振り一回振動し従つて指針は一分劃つ、進む)、アイトグラフ(原圖を任意の比に擴大し又縮小するに用ふ)。

提灯行列の事

明くれば廿五日。定めなき秋日和の降りてはやみ、止みては降る、昨宵よりの雨に、雲行のみ眺めやりて夕べとなりぬ。

殿下の台覽に供し奉るべき官立、縣立學校聯合の提灯行列は今宵を以て舉行せられんとするなり。この事早くも 殿下の御耳に達するや御待兼の御摸様ありしやにて折からの空合に東宮職より本校職員二三を召され如何あるべきと仰せ下さる、職員、大概の雨ならば押して舉行しまつらむと答へて罷り出づ。夕まぐれ一むら時雨、颯と零れ來し後は、雲も次第に薄れゆきて所々に青空さへ見え初めぬ。さらばとて午後六

時の頃は各學校生徒は夫れ々、四高校庭、綠深き處に、集りつごひぬ。
吉村四高校長をこれが總裁となし、各學校長を副總裁となし、田邊四高体操科長は總指揮官となり、各學校体操教員は各部隊の指揮官となり、こゝに午后七時次の順序を以て高等學校裏門よりしづくと繰出したたり

- 縣立第一中學校 (八百二十五人)
 - 第二中學校 (四百十人)
 - 商業學校 (三百三十人)
 - 工業學校 (百八十四人)
 - 師範學校 (二百九十人)
 - 第四高等學校 (八百三十人)
 - 金澤醫學專門學校 (七百人)
- 總員三千五百六十九人、手に手に紅提灯を振り翳し、高らかに「提灯行列の歌」を歌ひつゝ、廣坂通りより兼六公園に入り、御旅館前面の廣場

及物産陳列館裏門廣場に列を整へ並み居たり。三千の紅燈庭園の樹の間を隙間もなく埋めつくし壯觀たどふるに物なく、唱ふる聲律は優に響きて秋の夜の尙短きを嘆たしむ。總指揮官は先づ、皇太子殿下萬歳を奉唱し一同これに和して三唱す、赤誠の聲、遠く昊天に天翔りて星の宮人の眼をや妨げんと思はるゝ計りなり

殿下には供奉員を従へさせられ御旅館裏門の通路に御起立ありて、御巻烟草燻らし給ひつゝ、お側の人々に向はせられ快よげに御物語ありしやに拜し奉りぬ。申すも畏き事ながら殿軍の醫專校の立去るまで凡三十分御野立のまゝなり

かくて一同は御前を罷りて公園を下り、群集の隙間もなく人垣なせる中を歌高々と誦しつゝ、裁判所の前通を、中町に出で、尾張町十間町を通り堤町より南町、石浦町と次第に過ぎ蜿蜒た

る紅提灯の行列は數町に亘つて静けき夜を搖かしつゝ、再び本校裏門より運動場に入りぬ。かくて十時全く散會を告げ紅燈は四方に散じ行けり。

因に八波教授のものせられたる提灯行列の歌を誌さん

提灯行列の歌

一、曠間の丘に上りたち

國見し給ひし上つ代の

神の偉業神ながら

承けしめ玉ふ尊さよ。

二、三十年むかし畏くも

現つ御神は科ざかる

越の野を越え山をこえ

わが金澤に出でました。

三、御稜威貴み日に月に

榮ゆく御代を後れじと

さほひて勵む金澤の

其後の進歩はた如何に。

四、進歩の程を御親ら

御看行さんと高光る

日嗣の御子の行啓を

迎ふる民の幸多き。

6	5	3	5	6	1	2	3	3	2	3	2	2	0
く	こ	こ	こ	た	び	こ	か	か	つ	よ	の		
5	5	3	4	3	2	1	6	7	1	2	3	3	0
か	一	か	の	い	さ	な	か	ん	な	が	ら		
4	3	2	1	2	3	5	3	3	2	1	1	1	0
う	う	こ	め	た	ま	ふ	た	ふ	さ	ま	よ		

五、民安かれと玉敷の

宮居を置きて草枕

旅路におはす日の御子の

御心いかで安めまり。

六、只一向に國のため

いそしみ學ぶ學び男が

赤き心を燈火に

掲げて御世を言禱がむ。

ト讀ム

5. 3 3. 4 | 3. 2 1 | 6. 7 1. 2 | 3. 1 0
 3. 2 1 | 3. 2 1 | 6. 7 1. 2 | 3. 1 0
 3. 2 1 | 3. 2 1 | 6. 7 1. 2 | 3. 1 0

奉送の事

去んぬる二十三日、駕を金澤に進め玉ひてより、この學校、かしの官衙、はた兵營工場等を具さに櫛はせ給ふこと茲に六日、玉体愈よ御健かにして、親しく恩澤を民俗に垂れ給ひしが、豫て仰出されし如く二十九日午前八時二十分、遂に成巽閣を出で給ふ、

天また御名残を惜みまゐらでか行雲密に、苑内の大樹、梢に琴を奏して靜かに鶴駕を送り奉る。殿下は御旅館下なる兵器支廠前より兩側

に整列奉送せる小學生徒、幼稚園兒童、高齢者、廢兵等に御會釋あらせられつゝ徐々と廣坂通りに出でさせらる。かくて御車は進みくぬ。廣坂より石浦町、南町、堤町まで、すまなく並み居たる學校生徒は齊しく最敬禮を以て目迎し目送しぬ。わが北辰校八百の士も前日の如き武裝を以て送りまつれり。

聽て八時五十分、烟花轟然、秋天を貫けば宮廷列車はこゝに進行を初め、尊き御姿は次第に金澤の地を遠のき給ふ。紫煙一抹、空に迷うて尾山の麓またもとの靜寂に歸りぬ。

御歸路、金澤驛御通過の事

東宮殿下は十月二日を以て富山縣下の巡啓を終へさせられ、三日御發駕、午前七時二十六分、金澤驛御通過遊ばさる。

曩に、蹕を當縣に駐めさせらるゝや、赤心を

以て奉迎し奉りたる官民は、こゝにまた誠心を湛へて、停車場に蝟集し、道途に羅拜してその御仁徳を仰がんとす。われ等また線路に沿うて整列し以て鶴駕を待ち奉る。やがて號砲と共に御召列車はしづくゝとブラッ、トホームに進み入りぬ。殿下は御車の内に御起立のまゝ奉送の各員に御會釋あらせ給ふ。

停車五分時。瀛笛は鳴りぬ、御車は動きを止めぬ。秒又秒、一同最敬禮をなせる中を淡煙長く後へに曳いて、轍の響は遂に遠かり行きぬ。

北陸の蒼生幾百萬、榮光に輝き盛徳に沾ひし此歳此月、深くも心の底に根ざしけむこの榮ある心は、何れの日とて忘らるべき、あゝ畏くも胸に鐫りにしこの印象は永しへに消ゆるの期なからむ。(鈴木敏也)

○叙任辭令

市村 塘

陸叙高等官五等

村木 維夫

叙勲六等授瑞寶章(六月廿八日)

同 (七月二十九日)

八波 則吉

叙正六位(七月十日)

西 英 盛

陸叙高等官二等(七月三十日) 中野 嘉作

叙正七位(同)

高橋 周 而

囑託ヲ解ク(七月三十一日)

講師 阪本 又平

任第四高等學校教授

從七位 岡本 勇

講師ヲ囑託ス

篠原 一慶

叙高等官六等

同

横山 良盛

七級俸下賜(七月十四日)

市立富山商業學校校長兼教諭 陸軍二等主計從七位勲六等

枝光 寅太郎

體操副科劍道師範ヲ囑託ス 宮川 義介

任第四高等學校教授

依願囑託ヲ解ク 中村 余所吉

叙高等官六等

任第三高等學校教授(七等) 小牧 健夫

八級俸下賜(七月十四日)

學術取調ノ爲上京ヲ命ス

市村 塘

任第四高等學校教授(七等) 鹽 釜 正吉

同上(七月二十六日)

重 光 蔭

十級俸下賜 三竹 欽五郎

陸叙高等官二等

市村 塘

第四高等學校生徒監ヲ免ス(九月七日)

同 宮川 熊三郎

村木 維夫

任第七高等學校造士館教授(五等)

叙從五位

市村 塘

八級俸下賜(九月二十三日)

叙從六位

宮川熊三郎

大谷 正信

叙正七位

八波 則吉

英語學研究ノ爲滿二箇年間英國へ留學ヲ命ス

叙正七位

枝光寅太郎

(九月二十日)

叙正七位(十月二十日)

岡 本 勇

依願解雇(九月二十七日)

森 田 三郎

陸叙高等官六等

水蘆幾次郎

雇申付(九月十五日)

楠 正 路

同(十月二十一日)

石倉小三郎

熊本縣立熊本中學
校教諭從七位

岸 重 次

任學習院教授(四等)(七月三十一日)

叙高等官七等

佐賀縣立小城中學校教諭相良益次郎

叙高等官七等

任第四高等學校教授

九級俸下賜(十月三十日)

叙高等官六等

雇教師 ウォールフハルト

八級俸下賜

叙勳五等授旭日章

補第四高等學校生徒監(九月七日)

叙勳五等授旭日章

山岸 勘太郎

卒業證書授與式

任第四高等學校書記(十月十五日)

初夏の空晴渡りたる七月五日第二十一回卒業
證書授與式は至誠堂裡朝野貴賓の列席の前に於

叙正五位

中野 嘉作

て嚴肅に舉行せられたり當日文部大臣の寄せら
れたる祝詞校長の訓辭卒業生總代の答辭左の如

祝詞

茲ニ本校規定ノ學科ヲ修了セル諸子ノ爲ニ卒業證書授與ノ式
ヲ舉クルニ當リ一言ヲ述ベテ諸子ニ告グルハ本大臣ノ欣喜
ニ耐ヘサル所ナリ

諸子ハ既ニ本校ニ於テ大學豫科ヲ終ヘ高等ナル普通教育ノ
科程ヲ履修シ今ヤ更ニ進シテ最高ノ學府ニ入ラントス洵ニ
修身講學ノ道ニ於テ最長期ノ歲月ヲ費シ最多望ナル前程ヲ
有スルモノニシテ隨ツテ國家カ諸子ニ期待スル所ノモノ亦
特ニ重ク且大ナラザルヲ得ズ

諸子今ヨリ各自専門ノ學藝ヲ修メ其ノ擇フ所長スル所ニ隨
ヒテ器材ヲ大成シ他日各種ノ業務ニ從事スルニ方リテ國運
ノ進歩發展ニ向ツテ大ニ貢獻スル所アラントス期スルト共
ニ多年研修セル所ヲ基礎トシテ益人格ヲ修養シ能ク國家カ
人材ヲ育成スル所以ノ旨趣ニ副ハンコトヲ期セヨ
茲ニ諸子ノ卒業ヲ祝シ併セテ諸子カ將來心身共ニ健全ニシ
テ能ク其ノ志業ヲ成就センコトヲ希望ス

明治四十二年七月五日

文部大臣 小松原 英太郎

卒業生諸子 本校ハ本日茲ニ諸子ノ爲メニ卒業證書授與ノ
式典ヲ舉ケ以テ諸子ガ正ニ本校所定ノ課程ヲ修了シ本校卒
業生ニ要スル所ノ資格ヲ具備スルコトヲ證明ス是レ實ニ諸
子ノ榮譽ニシテ亦予ガ大ニ祝スル所ナリ而シテ諸子ハ此榮
譽ヲ擔ヘルト同時ニ其ノ眞フベキ責任ノ重大ナルコトヲ忘
ルベカラズ

昨年十月下シ賜ハリタル戊申詔書ヲ拜讀スルニ方今人文日
ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其福利ヲ共ニス
アリ又日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセントスル固ヨ
リ内國運ノ發展ニ須ク戰後日尙ホ淺ク庶政益々更張ヲ要ス
宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉廉潔ヲ治メ惟レ信惟レ
義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒念相誡メ自彌息マザル
ヘシトアリ謹テ按ズルニ此ノ 詔書ハ自露戰後ニ於テ我が
國民ガ向フベキ所ノ大方針ヲ示シ賜ヘルモノニシテ現今我
カ日本帝國ハ歐米文明ノ諸強國ト共ニ世界ノ文明ヲ補翼シ
以テ其ノ福利ヲ増進スベキ責務ヲ有スルモノナレハ國民タ
ルモノハ貴賤貧富ノ別ナク常ニ確乎不拔ノ精神ヲ蓄ヘ勇往
邁進以テ列強ノ背後ニ落チザランコトヲ期セザルベカラズ
然レニ苟ニ社會ノ現情ヲ觀察スルニ徒ラニ歐米文明ノ外形
ノミヲ追從シ其根基タル精神上ノ事ニ至リテハ恬トシテ顧
ミザルモノ多キニ居ルカ如シ是ヲ以テ奢修淫靡ノ風輕佻淨
薄ノ俗漸クニ流行シ延イテ學生間ニ浸染シ來リ後來有爲ノ
青年ニシテ此風潮ニ惑溺セラルル者亦甚ク少ナシトセズ是

明治四十二年七月五日

第四高等學校第二十一回卒業生總代 中村 郁哉

卒業生姓名

第一部英法科 三十九人

レ識者ノ常ニ大ニ憂フル所トス 諸子ハ本校ニ入學以來刻苦勵精ノ功ヲ積ミ茲ニ其業ヲ卒業ヘ...

明治四十二年七月五日

第四高等學校長 吉村寅太郎

答 辭

茲ニ本校ハ生等ノ爲メニ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラル 生等ノ光榮何ヲ以テ之ニ加ヘン思フニ生等ノ不才ヲ以テ本校...

第一部英法科 三十九人

金田 才平 愛知 赤土 正強 奈良 堀田 時二郎 愛知 奥井 平四郎 兵庫 植木 誠治 栃木 矢野 源二 福井...

第一部獨法科 三十一人

野崎 廣義 富山 渡邊 義介 新潟 柏倉 光三 山形 伊藤 運隆 山形 谷 孝 信 東京 飯野 五郎 茨城...

三浦 卓爾 新潟 小林 昇 作 埼玉 加藤 彌市 愛知 詫摩 棟雄 長崎 横田 義太郎 埼玉 富田 武彦 石川...

第一部文科 (十一人)

河尻 淨環 石川 飯田 義海 廣嶋 岡崎 文夫 富山 白石 勇太郎 長野 野口 保市 郎 茨城 矢野 靜男 福岡...

第一部獨文科 (二人)

渡邊 庸三 東京 榎本 安三 郎 和歌山

第二部工科 (二十九人)

吉田 德次郎 東京 瓜生 康一 石川 横田 成 沽 京都 石崎 一雄 富山 石田 信夫 石川 高橋 理一郎 千葉...

第二部藥學科 (五人)

海部 次郎 東京 小林 眞砂 東京 永松 政寬 大分 關角 之助 埼玉 國峯 專吉 群馬

第三部醫科 (三十六人)

佐竹 清富山 時國 武二郎 石川 山口 健福井 丸井 清泰 兵庫 伊東 常太郎 山形 高橋 涉 宮城...

第二部理科 (七人)

中村 桂藏 福井 西村 好時 神奈川 中村 郁哉 千葉 秦 敏 夫 大坂 古谷 晋 神奈川...

第二部農科 (十八人)

中田 覺五郎 栃木 狩谷 精之 石川 林 政一 三重 渡邊 得司 郎 新潟 桑名 信福井 築瀨 成一 福嶋...

加藤 繁福井 奥富 孝祐 埼玉 秦 資 彰 福嶋
今井 政二 長野 増井 精三 京都 大鹿 廣愛知
片平 長三 郡馬 霜鳥 章吉 新潟 風間 七衛 新潟
樋口 修輔 福嶋 湯澤 謹次 埼玉 谷口 儀作 新潟
吉田 秀助 山形 原田 永明 鳥取 前坊 源一 奈良

卒業生諸君を送る

——想得江南諸父老 因君鞭撻子孫多——

合ふや柳因、別るゝや絮果。人生遭別の事何ぞ一になり難きや。蒼茫たる學びの海に水脈を辿りて従ひ來しを、歳は三たび巡りて、茲に諸君と袂を別つべき時は來りぬ。さらば暫く袖を控へて此感想を致さなん、亦可ならずや。

諸君、去る。前途洋々として春の如し。諸君、行く。雲漠茫として希望の星斗、燦爛たり。その去るや遠大なる企圖を懷き、その行くや鞏固なる信念を持し、加ふるにかの嚴峻なる母校の手に薰蒸せられたる潑瀾たる意氣を以て學藝の

珠玉を求めんとす、これ生等の私かに踊躍禁ずる能はざる所にして又諸君の行色を壯にせんとする所以也。

翻て思ふに、最近四十年間に於ける制度文物の發達推移は、急激を極め、これに伴ふ時弊は生等をして往々眉を蹙ましむるものあり、潮流相撃つや濁浪高し、暗々たる風潮は遠き世の彼方の岸を洗ふものに非ずして常にわれらが脚下に滔天の波を碎く。學苑の礎は強固なるも情の趨るに任せて清き花園に背かんとする者また少しとなさず。かくの如きは三年の星霜を心靈の練磨に費せし諸君にとりては眞にやくなき一片の杞憂に過ぎざらむ。しかも茲に敢て露骨の言をなす、これ刺戟多き都門の空を思ひやりては、故園に止まる家弟の情として忍び能はざるものあればなり。

又思ふ、人生の事、理想と現實と往々にして

相乖く、青年の危機實に茲に在り焉。一度この逆風に遇ふや、或は自暴に趨り或は自棄に陥り、多年の修養も水沫の如く消え果て、遂に社會の闇黒裡に自らを葬り去る。われ嘗てワッツの「希望」を見たり。紫衣に身を纏ひたる少女は、目隠しのまゝ、破れたる琴を擁きて、今、夕闇に沈みゆく地球の上に坐す。四顧蒼茫、物皆死して天地靜寂の中に潜む、されど一絃はづかに存し、一星雲間を洩れて微かに瞬く。あゝ銀鈴の響尚こゝにあり、希望の光尚此處にあり。賢明なる諸君に解くに引例の不當なるを咎むる勿れ。刺戟多き都門の空を思ひやりては故園に止まる家弟の情として忍び能はざるものあれば也

山青く水清らなる東海扶桑の國。人は聖代と謳歌すれども、そこに聖者なく、偉人なく、一世慘として群少の咆哮に任す。希くは諸君、滿身の勇をを鼓し、明けなむとする人生の曙に、

社會覺醒の大旗押したて、般々曉の鐘を鳴らせよかし。朝に白山の嶺を仰ぎ、夕に北海の波を望む此處、尾山の麓、生等は唯諸君が目覺しき活躍を祈るのみ、切々たる生等の衷情を諒として、禮なき言辭の恣なるを許せ、以て辭となす。(としや)

新學年來れり矣

新學年來れり矣。新緑の香に送られて故山に歸臥せし吾人は、今や蕭颯の響に迎へられて再び北辰の下に集ふ。紺青の空高く、秋氣衣袂に滿ちて我思や深し。敢て問ふ、諸君が六句の休暇に養ひ得たる所のものは果して何ぞや

こゝに一枝の薔薇花あり、詩人は以て夜鳴鳥を忍ぶべく、畫家は以てその色彩を考ふべく、植物學者は以て花葉の形狀を究むべし。人各々境遇性情によつてその見解を異にす。諸君が休

暇に於けるが如き亦かくの如きものあり。諸君、願くは、各自修得せしものを發揮し吐露するに吝なる事勿れ。

新學年は微笑して吾人の前に在り。若き人生は潤然として吾人の踴躍に任す。(としや)

新入生諸子を迎ふ

友、遠きより到る。吾人迎ふるに何をか以てせむ。

今や天地蕭森の氣を湛へて竹風冷かに、槐花、秋を含んで清冽、骨に徹す。此時に當つて、猛然、北斗の光を望んで馳せ參りし健兒二百、我胸は躍れり、我心鳴れり。饗せんに山海の珍饈なきも、希くは、しばらく吾人が嘸々の言に耳をかせよ。

新入生諸子、諸子は特にわが第四高等學校を自ら擇んで、その若き生命を托したり、托した

る生命に、榮あれかしと希ふの念は須臾も諸子が胸裏を去らざるべし、これやがて諸子が閱歴に不磨の痕跡を止むるのみに非ず、又以て第四高史の一頁に桂葉を添ふる所以也。

人生百二十と算す、然らば高等學校時代は未だ孟春の中ば也、風暖にして鳥聲碎け、日高くして花影重るの時なり、而して思ふ、此森々たる人生の佳期に際して諸子の迎へべき路は唯一つあるのみ、唯一つなるの路とは何ぞや、曰く人生の第一義に於て生活する事則ち是れ也、

諸子よ、吾人は現代學生の風潮を見て以て憂懼、惜く能はざる者也、世を擧げて遊逸に流れ滔々として極る所を知らず、或は歡樂の人となつて花柳の巷に彷徨ひ、或は耽溺の輩と伍して長夜の宴を張る、剛健の氣風漸く地を掃つて、浮薄の徒、いたづらに多く、邊幅を修むる事急にして心靈の堂を忘るゝや久し、かくの如き青

年相集りて家をなし社會を作り、進んで國家の形成するに至らんか、社稷百年の計、その末路や瞭々として知るべきのみ。吾人が先きに第一義の活動を云爲したる所以のもの實にこゝに存す、換言すれば則、現状打破にあり、時弊改革にあり、俗悪なる思潮を粉碎して新しき理想を樹立するにあり。バルナサスの峯は塵寰遠く、紫雲を衝いて千古の春に嘯く、吾人新時代の青年は正に高踏して、天下に瀾漫せる毒草をくさざらざるべからざる也

諸子よ、吾人は筆を駆つて革新を叫びたり。されど羅馬は一朝にして成らず、階を追うて又階あり。我等しばらく青雲の翼を収めて靜かに慮る所なかるべからず、高等學校の三ヶ年は實に修養の時代也、蓄積の時代也。辭書と首引するはもとより珍妙なれども人は四肢五臟を以て造れる器械に非ず、叩けばこれ一塊の肉、しか

も血あり、涙あり、四角四面の箱に入れんには餘りに多趣多様なるを如何せむ。吾人が所謂活躍の意義、こゝに於て赤裸々となる。

然れども幸に吾人の言を曲解する勿れ、机の虫となるは、斷然排斥する所なれども學業を放棄してまで野次れと云ふには非ず。唯「偉大なる野次」たれと云ふにあり、偉大なる野次とは大に勉勵し而して大に活動するの謂也、かの人生の第一義に活きよと云ふも畢竟、此謂に外ならず

諸子に告ぐ、燦然たる北辰の光を仰いて、澎湃たる蒼海に漂ふ我等の扁舟は幾度か動搖したり。同舟の士にして往々溷濁の浪に沈み歸らざる者や屢々なり。然れども安んぜよ、これ鞏固なる信念と、毅然たる精神とを缺きし人なりき、偉大なる野次の何者たるかを知らざるの人なりき。男子既に生れて地に墜つ、須らく熱烈なる

情意と潤達なる氣魂と無かるべからず、吾人望むらくは深くかの四綱領を體し、四高のためはた祖國のために、諸子が各々長所に向て偉大なる野次とならむ事を。

今や、北辰會各部は茲に一大飛躍を試みずんば止まざらんとす。諸子よ、もし鐵腕を撫するの暇あらば校庭に出で、よろしく熱球を飛ばすべし、憂々の響を求むるならば、よろしく無聲堂裡に三尺の劍を振ふべし。語らんと欲する者は至誠堂内、縦横の舌を恣にせよ、言はんと希ふの士は椽大の筆、以て誌上に堂々の陣を張れ。吾人の諸子を俟つや既に久し矣。

北斗星前、至誠の旗を翻してより茲に二十有餘年、黨風常に殿角より起つて光銜年毎に新たなり。われら波瀾ありし過去を従へ、茫漠たる未來に臨んで無限途上に一區域を劃す、その使命や重く、その責任や大いなり、さばれ豪健の

意氣と、清高の理想だに虧くるなくんば永しへに久遠の光を仰いて向上の一路を辿る、また難きにあらざるべし「遲暮交親雲意淡、在朝故舊體香濃」難關を踏破せる新來二百の士、幸に、學を修め、徳を磨き、流俗を脱して以て偉大なる野次の本領を發揮し、北辰健兒をして長く、現代青年の覇者たらしめよ、一言以て諸子を迎ふ。(としや)

校旗制定式

皇太子殿下金澤御着の當日(九月二十三日)校旗制定式を舉行せられたり其順序午後一時第一號鐘にて職員生徒一同運動場に整列し第二號鐘にて校旗出場校長之に同行し職員生徒一同之を迎へ校旗豫定の位置に達すると同時に職員生徒隊形を變じ校長式辭を述べられ次に教頭校旗取扱

規定を朗讀し終りて分列式を行ひ式を終れり

校長式辭

本校は茲に 東宮殿下の台臨に際し新に一旒の辰章旗を制し以て本校の校旗となす
抑本校教育の主眼は質實剛健の徳を尙び勤勉力行の風を養ひ之を貫くに至誠を以て偏に善良なる校風の發揚を期するにあり今北辰の象を取りて校旗となす是れ本校の精神を象徴する所以なり語に曰はく北辰其所に居て衆星之に共ぶが如しと庶幾くば本校の異彩をして學界瞻仰の中心たらしめん
諸子は幸に教を本校に受け面り 殿下台臨の光榮に浴し校旗制定の盛儀に參するを得たり而今以後特に本校教育の主旨を體し永く校旗の名譽を擁護せよ

第二條 校旗出場ノ場合左ノ如シ

皇族奉送迎

入學宣誓式

始業式

記念日式

卒業式

天長節ノ分列式

學校長新任披露式

以上ノ外兵式演習學校長送迎等ノ場合ニ於テハ副校旗ヲ用ユ

第三條 校旗校外ニ出ツル場合ニ於テハ旗手三名ヲシテ交互ニ之ヲ捧持セシム

第四條 旗手ハ各部上級ノ特待生各一名トシ特待生全部ヲ以テ護衛トス

第五條 校旗ノ出納ハ學校長之ヲ行フ但校舎内ニ於テハ書記ヲシテ之ヲ捧持セシム

第一條 校旗及副校旗ハ校長室ニ藏置ス

校旗取扱規程

校旗は三越吳服店の製作に係り其制式は巾二尺三寸長三尺二

寸の長方形にして地質縹柳織給仕立とし紅朱色に白線四條を染抜き中央に本金線を以て辰章を刺繡し佛蘭西線(金色)を以て輪廓を施し周圍に地色と同色の純絹絲フレンジを附し金色の銀拵子を以て旗竿に取付くることなきは簞竿は竿頭に三方面の金色辰章を附し總干段巻黒塗にして金具は金鍍金とし純絹紫色の飾紐を附したる者にして代金百三拾六圓參拾錢なり

かくの如くにして過去幾年の波瀾を語る色褪せにたる舊校旗は撤せられて美しき新旗之れに代れり。

唯見る、一旒の旗。燦爛たるは金糸もて繡刺せる北辰章なり、赤地に白線を染め出せるは四綱領を躰せるなり、而して燃ゆるが如き絳房これが縁を彩ごる。

吾人は一瞥して胸中油然たる歡喜の情を覺たり。私かに思ふ、校旗は一校の精神の表現也、全鬢の氣魂の象徴なり、校裡自ら崇高の精神を宿し、凜乎たる氣魂を藏するならむには校旗ここに初めて意義あらむ。若し夫れ心神萎靡し、

意氣昂らず、何等潑瀾たるものを認め得べからずんば、畢竟これ兒童の玩弄物に過ぎるのみ。敢て辰門七百の俊豪に告ぐ。校旗既に翻れり、吾人が精神は已に天下に告白せられたり。巍然たる二層樓の城廓は悠々然として惰眠を貪るの所にあらず、星斗爛たる尾山の聖境は躑々然として流俗に漂ふの所にあらず。卿等まさに奮然として校風振興の策をめぐらすべきの秋なり。(としや)

新入生歡迎會

十月三日午後三時、新入生歡迎會は代議員及演說部員發起のもとに開かれぬ。健兒數百至誠堂を満たして迎辭答辭は四壁に反響し拍手霰の如く飛びぬ。いざや見んと待ち構へたる四高の元氣時ならぬ花を壇上に飾りて誇々の論聲は見

事青春の血を吐きて出でぬ。末野の眞葛霜枯れて蕭索さながら太古の如き自然ながらの秋の聲!

紅塵溶けて精氣は殘る光冴えたる秋の空、北斗は震ひて靈氣を傳ふ。嗚呼六百の四高の健兒!自然の脈は纖維を分けて搏ちぬ。五官をかくして猛然として振ふそこに至誠あり熱血湧く。諸君!痛快の辭を如何に聞きしや。われは未だ嘗てかくの如き盛んなる會を見ざりき。これとりも直さず四高校風の誇りにあらずや。茲にいさゝか、所見を披瀝して左に當日辯士の芳名を書し併せてこれが所論の概要を認むるものを掲ぐ。

開會の辭、古川氏、冷靜なる氏は懇切に説けり。四高は愛す可き善良の校なり、諸君は入學試験當時の元氣と現在の覺悟とを以て進まれん事と辯を閉じて下る。

生徒監駒井先生、赤裸々の眞情を水の流るゝが如き辯舌を以て説かれ思出多き京都學生生活時代より進んで後の思出を此會の中にいたされ長く此香を失はざれと結ぶ間、至誠を以て實際四高生の行ふを得可き主義本領なりとし新入生諸君に向つては諸君は今や弟分として四高に養子入りせるものなれば家風と同じき四高イズムに従ふ可しと實に氏は慈父の如かりき。

次で松嶋氏は透徹熱烈の辯を以て新入生諸君に向ひ諸君は今や初めて故郷を見出しぬ大國民の故郷飛躍し活動す可き故郷は實に高校三年の中に求むるを得、諸君は大資本をつくる故郷を忘る可からずと爽快の辯を結びぬ。

宗玄氏次で演壇に立つ沈痛の辯流暢なる聲に熱誠を宿して「生」を論せり。泰西の一詩人、秋の悲觀を歌ひて春の追想にかきくれ五十年の「生」を明確に感ず云々と説き不老不死の學校の情、

これ、妄情なる可からず明確な義務責任が其間に介在せざる可からず云々。

山田氏輕快の辯を振ひ伊太利の諺をひきて馬の鞍を固めてそれより乗出す可しとなし自分の家に入るにも諸君は足を掃はざる可からず四高に入るに當りて諸君は自分の身を清めざる可からず云々、

次に中村氏は立てり氏は四高演壇に雄を稱ふるもの豪壯瀾達甚だ努められしは實に氏の云ふが如き「至誠」を氏の中に見るを得たりき比喩引證妙を得たり。軍談を以て至誠を説くあたり實に講談師に酔はざるの感ありき。氏が得意の辯を振つて南下軍及寒潮事件の詳細説き了せり。四高辯論部氏に俟つや多し氏幸に自重せよ。

次に新入生總代新木氏立ちて新入の感を述べらる、響、琴線に觸れて妙音を發すされど今此を言の葉に露はすを得ざるは實に自分の遺憾とす

次で巢山氏立ちて新入の感を述べられ且後進者と先進者との連絡をはからざる可からずと熱心に論せられたり
最後に熊谷氏演壇に現はれ、時習寮の今日までの経過を述べ、寒潮事件、制裁事件等幾多の事件に力を盡し、今や將に超然主義の發展期に際し大に「時」の問題を思考せざる可からずとし「時」を先取するものは社會に超越し得可くこれ實に諸君時間上の先取特權にあらずやと論じ時習寮の「時」入學の時の「時」を發足点として永久の「時」を造り揚げざる可からず現代と云ふ短縮なる「時」に超然たらざる可らず、其手段としては現社會にこれを欠ける剛健質實の風に據り至誠を以て超越に努力せざる可からず諸君は能力の試験を青年團體生活中に試みざる可からずとせり其論旨は「時」の上に立てられたる超然主義に關してなり氏や大に努めたりと云ふ可し。

る所なりと謙遜せられ至誠の旗の尾山城頭に飄る處そこに我スウィートホーム時習寮ありと新入生諸君、諸君は安じて校風に歸依せられたし共に「」に至誠の道をすゝみて世に超越せん哉。

津山氏剛健の風を持して北國の氣風を論しこれを粘液質なりとなし四高も其風を享けて着實なりとなし古今の史上より例を擧げ大に剛健の美風を擧げざる可からずとせり、吾人至誠ならば隨つて剛健質實ならざる可からず。

次で永田氏演壇に立つ妙趣ある輕快の辯よく四高の現状を紹介し得たるを喜ぶ、四高校風の温健なるを述べて案外に腐敗し居らざるを指摘し「腐敗分子捕へて見たら枯尾花」と洒落れ、一轉大に校生間近時個人主義の發達を見るとなし、吾等の取る可き主義は老子、中嶋博士等の自然をとり大に運動部の發展を期せざる可からずと結ふあたり大に場内の喝采を得たり、

時進み氣倦み滿場漸く大頭薩摩芋のテーブルに趣向を轉せんとする砌演說部員高野氏閉會の辭を述べらるゝ序四高演說部のために萬丈の氣焔を吐いて蕭索たる秋の精氣は至誠堂に凝りぬ散會せるは午後五時半なりき。(MK)

行軍記事

(十月十一日、各部三年級一泊行軍)

○第一日

灰色の雲は初秋の空を罩めて靜かな兩脚も、刻一刻にしげくなる、颯と渡る風の音と共に銀の糸は斜になつて戎衣にしと注ぎかゝる。
時は十月十一日午前七時、濡れ色美しい首帯の露を、双鞋に踏んで校庭に整列する、當日の部署は左の通りである

統監
統監部員

吉村寅太郎
中野嘉作

へらる曰く、

北軍特別想定

軍が尤も信頼する學生大隊は大聖寺附近の敵を攻撃準備の爲め別働隊となり、左の任務を受く

一、前進輸送に必要な鉄道線路保護の目的を以て先づ粟津停車場を掩護し、尙ほ同停車場附近の術工物の補修工事、

二、大聖寺附近の戦鬪に於て生ずべき傷病患者收容の目的を以て片山津附近の家屋並に物資を偵察し得れば該地を占領し、尙ほ軍政署開設の目的を以て土民統治の方法を調査報告、

注意

粟津停車場掩護隊は第二中隊とし、第一中隊は串村より保村に通ずる道路を占す、

次で一般の方略を示さる曰く

一般方略

一、津幡附近の戦の後ち、敵を追撃して小松附近に前進したる北軍は、目下大聖寺附近にある敵を攻撃の準備計畫中

也、
二、津幡附近に於て不利の戦鬪の後ち岐阜、致賀、鯖江の増援隊を大聖寺附近に待ちつゝある南軍は、回復攻撃の準備中なり、

- 統監部員 市村 塘
- 同 駒井徳太郎
- 統監部書記 枝光寅太郎
- 衛生部員 松本 謙
- 演習指揮官 池田 菱吉
- 第一中隊長(一部) 田邊 盛親
- 中隊附 小林 平藏
- 第二中隊長(二、三部) 松本 慶昭
- 中隊附 小谷 仁十郎
- 第一中隊第一小隊長 大野 平作
- 第二小隊長 古田 正武
- 第三小隊長 赤間 信義
- 翼準士官 三浦 光雄
- 曹長(記録係) 神田 外茂夫
- 第二中隊長第一小隊長 鈴木 敬也
- 第二小隊長 中川 幸太郎
- 第三小隊長 片山 篤
- 翼準士官 田宮 猛雄
- 曹長 松井 穰
- 傳令 新井 吉郎
- 給養係 山田 詩郎
- 帶金悦之助

田邊指揮官は鞍上、高らかに命令を全軍に傳

演習に關する注意

- 一、北軍は帽に白覆を附す
- 二、空砲は各自三十發とし、第一日に十五發、第二日に十五發とす
- 三、赤旗一本を歩兵一個中隊とす
- 四、彼我五十米突以内に接近し、射撃するを得ず

○ 出 發

終つて、隊伍肅々、雨を衝いて校門を出づ、正に八時、南町、尾張町の大通を喇叭の聲に搖がしなから、金澤停車場に向ふ。

列車は加賀の平野を縫ふて走る。茅屋を彩る柿の梢、垣根の花蔭に遊ぶ鶏、鍬を肩にした百姓、さては小松原の彼方の北海、雲間に隠見する山脈、これら凡てが、そぼふる雨に包まれて、物寂びた一刷毛に塗られながら我窓に映りては走り、走りては映る。

小松に着いたのが九時十五分、雨はいよいよ激しくなる。停車場前に再び隊伍を整へて十二

三町も來たら町並は次第に疎らになつて、路の兩側には徳川の御代を夢む大松が、梢に秋の雲を呼んで居る。

○ 戦鬪開始

第一中隊長は斥候を派して行く々敵情を捜らしめつゝ、行進を續ける、十時五十五分に至り斥候の報告を得た曰く

敵の歩兵約百名、片山津に現はれたり、その斥候らしき者予等を見て直に退却せり

すなはち、更に村松より佐美村に進む。此頃雲脚は處々切れて雨は次第に小止みになつて來た。十一時、前面の砲聲を耳にし、ますく進む。新保村に通ずる隘路を通過せんとする時、右側の山上に敵影を認め、こゝに激烈なる戦は演出せらるゝに至つた

○ 新保村附近の激戦

敵は約一個小隊と覺しく、松林に據つて盛に

我れに銃丸を注ぐ、我第二小隊は少しも逡巡せず臆敵の間に散開してこれに當る。掩護物なき不利なる地位にありしが、苦戦數刻、遂に敵を撃攘して前進する。第一、第三の二個小隊は左側の松林一帯を占領し更に、第二小隊と相氣脈を通しつゝ、前進し、新保村附近の高地を我手に入れた。

この時敵は我陣地と谷を距て、前面の高丘に據り、さきの退却部隊をも收容し、全力を擧げて我れを防ぐもの、如く思はれる。彼我の射撃は時々刻々に激烈となり、天に轟く砲聲は靜かな秋を破つて、山河も爲めに震動せん計りである。劍戟の光は、折から雲間を洩れた日光と相反映して物凄しい。時は次第に進む、奮闘は愈よ、激しくなる、田邊指揮官は乗馬のまゝ、高丘の蕎麥畑に立つて居られたが、その勝敗の容易ならざるを見、終に意を決して休戦の命を傳へられ

はり／＼と湖上を走る、漁舟がそこ此處に浮いて居る、此外には水に波紋を描く風ならで湖上を遮るものもない、右手の方、葦をならべて呼べは答へんとする湖畔の町は今宵の宿りの片山津である。

指揮官は全軍を塚に集めて次の講評及命令を與へられた、

講評概略

今日の演習は大体に於て確實に且活潑なりし、これ余の大に満足する處なり、凡そ偵察戰にありては驚の如く注意を全体に配り外部の刺戟に應じて敏捷に動作せざるべからず、今日最も缺陷し居りしはこの敏捷と云ふ點にありしが如し、又、退却に際しては掩護物多き場所を撰ばざるべからず、彈雨の下を公然大手を振つて行くは剛勇は即剛勇なれども、かゝる際には採らざるをよしとす

學生大隊命令(十月十一日午後二時三十分)

- 一、敵は大聖寺附近に退却し、其一部隊は動橋に停止するも、如し、
- 二、大隊は本夜、片山津に宿營せん
- 三、第一中隊は小哨を片山津新村に出し、合川村より尾中村

た。時に十二時半。

○突撃!

兩軍こゝに於て、敵を前に控へて悠々と腹をこしらへる。腹滿ちて元氣百倍、午後一時、戰鬥開始と共に第二中隊は直ちに着剣して突撃にうつる。芋畑を飛び越え、藁畑をくやり、小松林を眞一文字に躍進し、全線鯨波を作つて敵陣に肉迫する、敵も亦劍を揃へて我に迫る、悲惨なる白兵戰の大活劇の將に現出せんとする刹那、休戦喇叭は野を撼かし谷に答へて響きわたつた、

○片山津に向ふ

隊伍を組んで峯を越ゆれば木の間に見ゆるは、漣波依稀たる柴山瀉!山河の美に打たれて衆皆覺えず快哉を呼ぶ。山を下り實盛塚にて小憩する、時に二時、

空は既に名残なく晴れ渡つて、ちぎれ雲がふ

の間を警戒すべし

第二中隊は小哨を潮津村に出し尾中村北端より海岸線の間を警戒すべし

四、大隊本部及其他は片山津村に宿營すべし

五、緊急集合所は片山津西方標高三十五の畑地とす

六、給養は部隊自炊とす

七、今夜九時、命令受領者を出せ

大隊長 田邊中佐

三時、隊を整へて歩武整々、片山津に入る。

途中實盛が「首洗ひの井」の傍を通る、井は湖を臨んだ、青田の中にある。想ひは遠く飛んで源平の昔に返る

(前略)手塚の太郎、馳せ來る郎黨に首をどらせ、木曾殿の御前に參り畏りて「光盛こそ稀代の辟者と組み、討ちて參りて候へ、侍かと思れば、錦の直垂を着て候ふ又大將軍かと思見候へば續く勢も候はず、名のれ〜と攻めつけ候ひつれども遂に名乗り候はず、聲は坂東聲にて候ひつる」と申しければ木曾殿「あつ

ばれ、是は齋藤別當の首にてありござんなれ、それならむには義仲が上野へ越へたりし時幼な目に見しかど白髪の糟生なりしぞかし、今は早や七十にも餘り白髪にこそなりぬらん、鬢髭の黒きこそ怪しけれ、樋口の次郎兼光は年頃馴れ遊びで見知りたるらん、樋口召せ」とて召されけり、

我等は洋服を來て鐵砲を擔ひて居る。秋の空をかすめて二十世紀の風が吹く。われはまた思ひつゝける

樋口次郎只一目見て「あな、むざん、齋藤別當にて候ひけり」とて涙を流す、木曾殿「それならむには早や七十にも餘り白髪にこそなりぬらん、鬢髭の黒きは如何に」と宣へば、やゝありて樋口の次郎涙を押へて申しけるは「さ候へばその様申し上げんと仕り候が、餘りに哀れに覺え候ひて先づ不覺の涙のこほれ候

ひつるぞや。さらば弓矢とるは聊かの所にても思出の詞をばかねてつかひ置くべき事にて候ひけるぞや、齋藤別當、常は兼光にあひて物語し候ひしは六十に餘りて軍の陣に向はん時は鬢髭を黒う染めて若やかうと思ふなり、その故は若殿原に争ひて先を馳けんも大人氣なし、又、老武者とて人に悔られんも口惜しかるべしと申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや、洗はせて御覽候へ」と申しければ木曾殿さもあらんとて洗はせて御覽すれば白髪にこそなりにけれ(下略)

星移り物替り、この事あつてより五百歳、美しい繪卷の様な戦物語は、再び現實に於て見るべからざるものであらう。

三時四十分、各宿舍に入る。

大隊命令(十月十一日午後九時、)
一、敵は依然として大聖寺附近に在るもの、如し

- 二、大隊は明日、動橋停車場破壊の目的を以て前進せん
- 三、第一中隊は前衛となり午前七時十分、片山津を出發すべし
- 四、予は本隊の先頭に在つて前進す

二中隊は本隊となり湯本は面北進して路上に集合すべし
大隊長 田邊 中佐

○第二日

明くれば十二日、天は晴れたり、湖上をわたる秋風は冷かに征衣の袖を拂ふ。

七時半、第一中隊先づ發す。稻は已に収りとられて、寂しげな田の面に村雀が落穂を拾つて居る、澄み渡つた越路の空を雁が幾列か北に翔る、この天地の間を貫いて秋は蕭條の氣を恣にする。

八時、動橋停車場破壊の任務を終へて、打越村を過ぎ、矢田新を後にし、斥候を放つて後へを警戒しつゝ、行進を繼續し、月津村に到り、松林に屯して敵を待つ。九時、斥候は敵影を見

るその尖兵なるもの、如しとの情報を齎した、こゝに於て、後衛は街道右側の堤防に寄つて射撃する、敵は漸次近づく、約一個中隊である、此時後衛の將士は敵を誘引するの目的で街道の左側の徑路に駈足を以て退却した。

本隊は砲聲を聞いて身を松林中に潜めながら今や遅しと待ちかける、暫くして敵は前面の雜木林より現れたが遙か左手の方の白帽を我と思つたのか、直ちにそれに向つて散開した、その白帽と見えたのは道路工夫の頬冠りしたであつて、我軍は北叟笑みつゝ、鳴を静めて敵の前進を待つ、九時半、敵は其前面に向つて射撃しつゝ、わが前を横ぎりかけた、その刹那、第一、第二の二個小隊は横合から火蓋を切つて彈丸を雨と注ぎかける。敵の狼狽は手にとる様に見える俄に方向變換をなしてわれに向ふ。我三小隊は此時迂回して敵の右側に出で突然、猛烈なる一齊

射撃を、開始した。戦機は刻一刻に熟し、彼我の距離は秒一秒と切迫する、こゝに於て兩隊長の命令の下に大突撃に移つて、喚聲山野を壓して一場の修羅場を演せんとした時、嘯唳と響く喇叭は休戦を告げた時に十時三十分。

○歸途

それから、石川種馬所に立寄つて小憩する、この間に、東宮殿下行啓の際、御台覽の駿馬の數々を見せて貰つた。

十一時、此處を發して小松に向ふ、道は坦々たる北陸道、路ゆく馬子の唄面白う、白山晴れた秋日向に、われ等もよそめには畫中の人であつたらう、

小松停車場前にて晝飯を了へ、一時發の列車に投ず。此時小松の有志家増田某氏、羽織袴の姿、いかめしく、胸には徽章の數々煌めかして、恭しくわれらの行を送られた、田邊中佐、氏を

紹介して曰く「この方は諸君が學科以外に斯く武裝して勇ましく演習せられ、文武兩道に於て國家に盡さんとせられるのを、非常に感せられて、茲にわざ／＼見送り下さいました、氏は影ながら見送りするつもりであつたそうですが、それではいけぬと私が云つて、こゝに氏を諸君に紹介するのであります」、この間、氏は兩手を袴にあて、恭しう敬禮して居られた、全軍は是に於て氏の萬歳を三唱した。

駒井教授の談話によると、氏は日清、日露の戦争當時は殆んど家業を顧みず寢食を忘れ、國家の戦捷を祈り、將士の出征に際し、凱旋に當つて、たとへ眞夜中でも、必ずこれを停車場に送迎し、熱誠を以てこれを勞はられた、又毎年、自己の財産調を檀那寺の住職に致すを常とし、殊に日露戦争當時は業務を放棄したにも拘らず、猶參百圓の財を増したので、氏はこれを以て、

國家に盡せし己が微衷を神佛が照覽あらせられたのだと喜悅して居られたと云ふ、

氏は我等が乗車後もプラットホームにあつて、進行せる列車の窓毎に禮をせられるのみか、車の過ぎ去つた後までも平伏して居られたのは偏に恐縮の外はない、我等は熱誠かくの如く國家を思ふの氏に出會したるを衷心より感謝する。

二時半、身は既に金澤停車場にあつた、隊伍肅々再び校門に入る。時に三時、かくて多大なる期待を以て迎へられたる宿泊行軍は日出度終結を告げた。(としや)

行軍記事

(明治四十二年十月十四日片山津方面)

今更に野外演習の眞義を問ふ丈け野暮である。若し人あり。吾人に尾山城下、四高の聖地に於

て、靜に涵養せられた意氣を伺い度いと言ふならば、勃々たる吾人の意氣を、心火と砲火とに燬いて燬いて心ゆく迄燬いた、野外演習の實況を物語り度いものである。眞蘇坊の薄招く秋の中頃、勇士の血汐に落葉染めなすの時は來つたのである。

第一日

明治四十二年十月十四日午前六時、世は未だ華胥に迷つて居る。朝露を踏んで二百の健兒(各部二年)は草葉燃ゆる校庭に集合、隊伍の編成も成つた。行軍は軍に行くの意味のみではない。行は修行の行であるとの指揮官の言は頭に練り返へさるゝ。嘯唳たるは叭聲は起つた。軍は肅肅として停車場に向つた。

出發

八時十八分、死を思ふて決意眉間に仄く勇士を載せ、惜別の情を一抹の煙と殘して瀛車は進む。

大陸化した秋の野山を縫つて小松町につく。十時御幸村今江で想定は示されたのである。

- 一、津幡附近ノ戦鬪ノ後小松ニ前進シタル北軍(敵)ハ目下大聖寺附近ヲ攻撃計畫中ナリ。
- 一、津幡附近ニ於テ不利ノ戦鬪ノ後チ岐阜敦賀鯖江ノ増援隊ヲ大聖寺附近ニ待チツ、在ル南軍ハ回復攻撃ノ準備計畫中ナリ。

南軍特別想定

軍が就も信頼する學生大隊は別働隊として小松附近偵察の歸途左の任務に就く

一、動橋停車場以北鉄道電線の破壊動橋停車場に於ける衛工物補修工事

二、大聖寺附近の戦鬪に於て生ずべき傷病患者収容の目的を以て片山津附近の家屋を偵察し成し得れば片山津を占領し尙ホ左の件を偵察すへし

イ 各營病院開設に方り仮廠舎建築設計並に其位置及其衛生材料の有無

ロ 患者保養に要する物資並に集積すべき位置と輸送方法

ハ 柴山村に通ずる架橋點の選定と架橋材料並に其設計演習に關する指令

- 一、北軍の帽に日覆を附す
 - 二、空包は各自三十發とし第一日十五發第二日十五發とす
 - 三、赤旗一本歩兵一中隊とす
 - 四、彼我五十米突以内にて近接し射撃するを得ず
- 中隊任務
松本中隊は粟津方面に前進して同停車場を掩護し衛工物補修の事

中隊長命令

於串村

本中隊は小松附近敵狀視察を終へて串、佐美、新保を經前進片山津を占領せむとす第一小隊は後衛尖兵とし他を本隊とす兩者間の距離は地形に依りて選ぶべし

戦鬪開始

第一小隊長は中隊命令と同時に、第三分隊より斥候四名を放つて前進。田間の小徑殺氣の間を縫ふて長蛇の様に進み、松崎村の森林に、更に三名の斥候を放つて敵情を偵察せしめた。唯見る連山黄雲、嚴肅な秋色は、寂寥の氣を漲らして織々たる流に沿ひつゝ、本隊は消ぬゆく。バラ

バラと二三黑影が左側の疎林に入ると見るや忽然として銃聲が四邊の寂寞を打ち破つた。彼我斥候の衝突である。時に十一時四十分。大活劇の幕は落ちたのである。

之より前本隊は佐美を通じて前進、佐美山に陣した。山は佐美、新保の間に在つて、天造の嶮である。前は百仞の懸崖で右は鬱茂の叢林を貯へ、道を距て、左方に夢の様な林が蛇行して居る。晝食を喫する程に、猿猴の啼聲か。泉流の響か。あらず、霹靂一過尖兵衝突の銃聲を耳にしたのであつた。脾肉漸く動く。中隊長は尖兵長の報を得て散開を命じた。第三小隊を中央に、第二小隊をして左側の森林を扼せしめ、尖兵二個分隊は左翼に陣を布いた。

本軍の計畫は左方森林中に一分隊を伏在せしめ、敵の近づくや之を射撃誘致して以て本隊より一齊の射撃を行ひ之を殲滅せしむるにあつた。

單容整々、今や一針の隙もない。天も黒う地も黒う、戰雲は漲つて來た。地雷も布設せられ、狼狽も成る。佐美山の劇戰は茲に開かれたのである。佐美山の接戰

彼我の距離九百米、忽ち突出機を待つて居た左林の我分隊と敵の尖兵の間に亂射は交換せられた。分隊長は蠻聲をあげて各員に令する。敵は約二個分隊詭計を弄して肉迫して來たのである。苦戰數分。戰つて敵を退くるは易いが、素之れ帷幄の中から出た方寸である。早やまる可からずと豫定の退却を敢てした。

第二小隊は佐美山左方の林間に敵を待つ間に、敵は主力をこゝに注いで猛烈な砲撃を開始した。我第三小隊及第一小隊第二分隊も亦防守甚だ勉めたのである。山は名にし負ふ天下の嶮、此の天利を得た我軍の防戦も亦極めて劇烈なものであつた。爆聲は山に鳴り谷に應へる。砂礫

は高く天に沖する。幾多の生靈は天に飛ぶ。阿鼻叫喚の修羅となる。若し神に悪戯ありとしたなら。戦争其ものを云ふのではあるまいか。

この時に當り左側森林に我分隊を追ふて来た敵の二個分隊は我第三小隊の背面より突然射撃を開始した。一發。亦一發。第三小隊及一小隊の二個分隊は、算を亂して倒る。敵は此の機に乗じて猛烈な突撃を開始した。午前十二時二十分、

觀光

之れ最も紀念す可き最劇の時であつたのである。我軍が第二高地に退却する迄實に五分時。第一高地を得た敵は、之に力を得て其攻撃を續行した。銃口火燄迸つて、黒煙濛々として四邊に起る。敵は決死の士を選んで、我壘見かけて、

た。軍間を埋めて、軍勢漸く非となつた。散るならば、櫻花の深く散り度いものだ、執着の生は武士の本懐で無いと、突撃の命は下つたのである。喊聲は地を震はす。劍光は亂る。兩軍の死傷愈々多く、勝負未だ決せない中に、地上の塵を舞はしむる鬨朝たる吠聲は起つた。兩軍茲に兵を收めた。之時十二時五十分。

隊伍再び整いて一行は正々と片山津に向つた。崎嶇たる山地を辿り、一道の坂を昇り、降る處、名にし負ふ柴山の湖畔、無限の感慨を漂はせて一行を迎へた。片山津の夕烟は薄く棚引く。故意綿々として深く、實盛の悲劇の跡に松籟の聲を聞いて、藁葎深き首洗の池の邊りに、講評を聞いた時の健兒の心は如何であつたらう。

講評

負ふ天嶮である。我中隊長は三尺の秋水を振ひて陣頭に立ちながら、軍を督したが、死屍は山

重大なる報告を齎す可き斥候が陰を捨て、陽を取り道を取

るに公道を以てしたるが如き其事勇に似て而も智を欠く。隱見出沒は斥兵の要義なり。又展開は些か輕忽に過ぎ、實戦に遠かる事甚しく、左林に出でし分隊の射撃も疎慢の嫌なきにあらず但し其他の動作に於ては毫も間然する所なし。

午後四時、一軍は片山津に入つたのである。片山津の秋や枯葉の落つる事頻りに更け行く夜の孤舎の燈火はゆれた。

第二日

明ければ十五日、秋の日は晴に澄み渡つた。午前七時片山津出發、同七時四十分動橋で中隊命令は下つた。

中隊命令

當中隊は前衛となりて粟津方面に前進鐵道線路保護の目的を以て粟津停車場を掩護せる北軍(敵)を攻撃す可し
第三小隊尖兵他は本隊、本隊と前尖との距離四百米

茲に於て尖兵より三名の斥候を派出して、敵情を偵察せしめた。八時十五分斥候の報告來る。敵は歩兵約百名月津方面に前進し我軍を要せむとするが如し

戦は再び始まらんとして居る。齋す所、血か、肉か、全軍蕭として前進、月津村郊外、遙か彼方に敵の黑影が見ゆると見る間に散開の命は下つたのである。この處四望開濶、平野の尽くる所嶮山あり。敵はこの天嶮を利用して死守せんとし、我は地物の利を欠いて居る。隻眼を俯下して其行動を明視し得る敵に比して、我軍の苦心は著しかつたが、勝算己に帷幕の内に決す。ここに猛烈なる砲撃を開始したのである。

戦闘開始

鐵條網や鹿柴や準備怠りなかつた敵の抵抗は有力且つ猖獗なものであつた。我軍は第三小隊をして右方の道路を扼せしめ本隊は伍間増加をして猛烈な一齊射撃と共に馬蹄地を撼かし鯨波天を轟かして攻撃した。敵はこの險に倚つて抵抗功を奏し、我軍の死傷屢々なるを見て喜色溢れたが、左翼の一小隊は我三小隊の爲めに手痛く

破られて形勢漸く動いた。已にして我左翼も亦敵の右方に肉薄して、事漸く火急となつた。時は今なりと突撃して進めば流石難攻不落と呼べられた要害も遂に我軍の占領する所となつた。渺渺として孤烟上る。此の戦に於て我軍は勇士を失ふ事三分の二敵も亦死傷尠くなかつた。叭聲は鳴る。休戦の命は下る。兩軍こゝに合して本隊になつた。時に九時半、最激の交戦より三十分、猛烈なる第二回突撃より十三分、柴山の湖畔風蕭殺として、流血滾々、立田の錦は織れたのである。

する。叭聲を先にして校苑に入ると最後の講評は下つたのである。時に三時二十分。

講評 (統監)

宿衛状態は良く其秩序を失はず其一般動作は頗る可也、但し幹部の熱誠にかゝらば往々其命に反し射撃に於ても稍疎雑に流れし感あるは遺憾とする所なり。

講評 (指揮官)

昨夜の宿衛状態は極めて嚴肅にして殊に或部隊が哨を設けて時を嚴守せしが如き賞す可し唯第二日に於て第二高地占領の際の如き勇に過ぎて猪勇に走りたるの觀ありしが如し氣満ちて而も体自由ならざるの風も明なりき、要するに今回の演習は大体に於て其成功を認むるを得たり

(宗彦生)

歸途

十二時十五分、小松に入る。一時三十五分。小松發。

第四高等學校第十七回
陸上運動會記事

秋風浙々雲暝々、金城の天地は再び二百の勇士に見えた。凱歌を奏する犀川の流、こゝに金聲谷に振ひ鳴聲天に聳すかへた戦場の悲劇を髣髴

例年十一月三日天長の佳辰を卜して開會せられし我校の秋季運動會は、本年より期日を改めて十月廿六日開校紀念の當日を以て行はるゝこ

とゝなり、北陸の天高き時、開會の號砲は強く尾山の眠を驚かして、九時校庭に開かれぬ。

模様となり、第八回一人一脚にして遂に細雨風と共に至り、第十回二人三脚を終りて中止の宣告を下すの余儀なきに至らしめぬ。時恰も正午

にも雲深く、日の漏るゝ影とてもなければ、はやりにはやる健氣心に、勇しき第一發は第一回二丁競争の開始を報じて、走り行く三十の健男子、その勇氣その活氣如何に吾人をして手に汗せしむるかを見よ。悠々先頭に立つて走るはその人ありと知られたる三本氏、名譽ある第一回第一着の月桂冠は正に氏の頭上に置かれぬ。

近ければ、午後二時までに雨晴れたらば續行の筈なりしも、天我れに惠なく、明後廿八日第十一回より舉行することと定む。盛裝せる市民の雨にぬれて歸りを急ぐは氣の毒にして、人まばらなる廣き校庭の内、旗は恨めしげに風に吹かれて飛び。一部の法文亭前、ひそり得意然として立つふくろふは眼燦然として四方を見る。

漸く集ひ來る群集は此時百又二百、第四回の障礙提灯競走は本年より新に加へられたものにして、我も人も等しく好奇の心を以て待ち迎へたる所、先着の名譽は難なく高田氏に歸して障礙物競走の撰手として許されたる氏はこゝに又、新しき功名をえたり。

一日置きて十月廿八日、此日は前の日にも似ざる好天氣にして天に一点の浮雲なく、一昨日の續きを以て九時開會す。第十二回福引競走には戸板一枚を引擔いで重たげに行くもの、番號札見當らずしてまごつく者等皆笑の種を蒔きて興を添ゆること多し。第十七回は巾飛にして一等佐藤平亮氏二等岩佐剛

一氏なり。

第二十回四丁競走には一等鈴木文吉氏の快走

第二着關山清第三着八賀益造第四着相川俊孝の諸氏。

いと目覺しく、第二十二回一分間競走には八賀氏目出度く先頭に立ちぬ。

金澤名物の第一として市民の樂しむ四高運動會がしかも此好天にして開催せられたることな

第二十三回孝行競争は、馬鹿げて大なる草履を片足に、無暗に高き足駄を他の片足にうがち

れば、我れがちにと集ひ來る老若男女、校門のほとりは人の雜沓只ならず、運動のコートを圍みて十重二十重、手を拍つては「赤よ白よ」と叫ぶ小學生、色傘斜めに打ち興する若き婦人、曲りたる腰を延して頭を振る老いたる人、廣き校庭も至る所人を以て埋められ、制止の警官此間に往來して帶劔の光日に映す。三部館は例によつて例の如く、靜勝館を以て之にあて、張りつめたる幕の内、紀念スタンプの押捺に忙しき手振り、さては陳列せる標本をめぐりたる群集、特に火事警報器は感心して見たるが多し。

第二十七回は竿飛び、一等雨宮良直氏二等關口秀一氏。

第一部の法文亭は昨年と同位置にて、場の西南にあり。壯大なる一建築、我れこゝにありと

第二十八回障礙物には二等のハンデキャップを附せられたる郷原氏又一等を得て見物人を驚かす。第三十二回六丁競走には鈴木文吉氏再び第一着となりて君の快走力は一般人の認むる所となりぬ。

鶴かめの目出度など特に我が目を引きぬ。此間に法文タイムス及超然時報が時々配付せられて好個の紀念物となり、かくて運動はすゝみて第三十四回來賓競走より第三十六回職員競走となり、外人講師が眞面目くさつて走るは面白し。

と云はぬばかりの大ふくろふが超然として先づ人膽を寒からしむる所飽迄も一部のなり、こゝ又三部と同じく賣り出せる紀念はがきにスタンプを捺し、且茶菓を出して見物人の休息に便す。第二部は例年最も力を二部館に致したるものなるが、本年はいかなる故にや美麗なる二部館の建築なく、只運動會場の北東隅に淋しく幕を打ち張りたるのみにてスタンプ押捺を受けんする二三人の佇むを見るのみ。昨年如き有益なる假裝行列をも全然廢止したるは何故にや。

第三十八回は公立各學校撰手競走也。學校は金澤一中及二中師範校工業校商業校の五校にして六丁競走なりしが一中常に優勢の地位にあり。一中の平栗及加藤の兩氏が第一着及第二着を占め、工業校の大崎氏第三着となる。

時習寮にては大々の奮發を以て、寮の各室皆力を極めて奇抜なる飾物をなし、學生及觀覽券を有する男子をして自由に參觀せしめたるが、一覽する處その出來榮の見事なること到底一昨

第三十九回の醫專校撰手競走(六丁)には中村喜太郎氏辻金二氏吉川僧奉氏各第一第二第三着となる。

年の比にあらず。或は大なる腕がぬつと出で、其持ちたるペン先より点々たるインキが大臣總督となるものや擊劔柔道具を以て造り上げた

第四十回はいよゝゝ各部撰手競走なり。互に

應援旗を打ちふりて次第に活氣付ける各部應援隊は要所々に位置を占めて、示威的運動中々盛

なり。然れども最後の勝利は當然一部にあるが如く、その策戦着々功を奏して常に優勢の地位を保ち、一等田島太郎氏二等野村紀一氏（以上一部）三等増澤肇氏（三部）の順序となりてこゝに此競走は終りを告ぐ。只二部の一選手が一部の某野次に突きあたられて打ち倒れたため競走を中止するの止むなきに至りしは、惜しみて尙余りありと云ふべし。

第四十一回は一哩競走にして、此頃日没近くして風稍寒く、群集漸く散じ行きて場内少し淋しきを覺ゆ。一等守山茂松二等野村紀一三等相川俊孝四等田島榮吉五等橋口寅七の諸氏。堂々コートを七週して決勝点に入る所、その勇しさ云はん方なし。

此外時習寮對醫學專門學校の綱引ありしが二回とも時習寮の勝利たりしはあまりにあつてなかりき。

第十七回秋季運動會もこゝに全くその終りを告げて健兒三々伍々夕暮の中を歸途に就く時正に午後五時。（みつを）

運動會と時習寮

開校記念日！未だ四高に開校記念日あるを聞かざりき、記念日には一日の休暇無く祝賀無くして過ぎぬ、吾人は記念日なるもの、果して過去の光彩に觸れしめ將來の發憤に價するものなるや否やを確知せざりしとは云へ而も記念日なるもの、神聖にして一校々風の刷新に與りて力あるものなるを窃に思はざるにはあざざりき。突如として運動會は十一月三日より十月二十六日に繰上げられ、いとも目出度き記念日に於て、紅紫錦繡の秋の野に吾人の血を湧かす可き盛大なる運動會は開かれんとせり、而も天何ぞ人事

に戯を弄して吾人を支障するの甚しき。惜しむ可き當日は雨天の爲め延引され次て二十七日は休日となり二十八日の曇天を以て遂に運動會は開かれぬ。萬都の士女、觀客の群集塔の如く環を作れるあたり、城下の四軒、時習寮の三字は天地の精氣の凝れる北辰の如く清空高く觀客の頭上に彫出されぬ。常ならば無聲堂裡劍撃の音絶えず、寮内辯士の呼號痛論あるへく、熱球天に冲するもある可きに、今日は至誠の珠玉の飛龍に乗じて天空の彩雲を縫ひ、飛散快絶を極むるあたり城頭高く畫き出されし超然の二字は深くも人心の胸裡に彫まれぬ。

寮内二十四の各室、互に思慮を練り勞苦屹々、連日の準備怠り無く奇抜にして剛健なる作物を世の觀覽に供しぬ。その婦女子を入寮せしめざりしは一に混雜を慮りしものにして心ある者の合点する所なる可く強ち尻の穴の少さきがための

みにはあざざりき。二十六日には雨天の爲め觀客は屈竟なる雨宿りを得て一時寮内多くの觀客あり運動會主客顛倒の珍現象を呈して滑稽なりき。學生はあくまで學生らしからざる可からず、主義はあくまでも神聖ならざる可からず、超然主義とは何ぞこれ世人の往々解釋に苦む所其意義の漠然たる丈懷疑の聲は四方に起れり、而も超然主義とは結局「學生が學生らしく規律ある剛健の風を持ち社會に超然たる簡易生活を遂る」てふ事に歸するものなり。二百の寮生團結一致事に臨みて亂れず、黙る時には黙り、立つ時には猛然として立ち一方社會の惡風潮に染まざる事を期すると同時に他方社會の渦中に突進してこれを啓發するの勇氣と修養とを怠らざるものこれ積極的なる超然魂なり。超然主義とは寮生終身の主張にして今や四高校風の根軸となすものなり。寮生意氣の如何は當日發行の「超

北三、三等賞當選細菌研究所、ハイカラ、怠惰、悲觀、野次、放屁、樂觀、大食、惰眠、癩癩の九菌、

阿部眞見君を悼む

九博士によりて發見さる、室員八人、餘の一博士は雇なりと聞けり。▲北四、白山より浦港に跨がる超人の健脚「吞宙」の意氣、着想、飛行器の廻轉進行手際最も見る可きものあり▲北五、天保時代のハイカラ、元老連の渡歐にしてもろこし、てんじくの地圖はあてになる▲北六、北六園は室の番號より來れるもの布園の屋根、柿と芋、剛健質實とは、げにやかゝる民屋の眞生活より生れ來るものならん▲北七、果子を置き棚を結びて「難攻不落」と題す。晝過ぎ、小供に落されたりとは不落も奇拔也▲北八、奇拔なるの劍にて根元を絶たる、餘の一本を大々的に活躍せしめば更に妙なりしならん歎(MK)

四高俳壇の將星、秋雨、阿部眞見君、九月八日、東都に客死せらる。飛報一度傳はるや、吾等は駭然として驚き、茫然として哭けり。薙上の露徒に啼易くして黃公の酒瀟永く愁を添ふるの世とは云ひ乍ら、あまりに君が命の脆かりしかな。去るものは日々に疎しと聞く、されどわれ等が胸に映りし君がやさしの面影は、日と共に年と共に新になりまさりて、その悲しき終焉を偲ぶ毎に、憶ふ毎に、われ等は堪へかたき胸の痛みを覺ゆるなり。

亡友よ、君が此世に刻みにし短き生涯は決して幸あるものに非りき、君が人生の春を托したるなりき。されど君は常に眼を天の一方に注ぎて荒れ果てたる原に一叢の花を培はんとした

り。宿志未だ成らざるに早くも珠は碎けぬ。天何ぞ才を妬むの甚しきや。

越えて十一月に入り同學の友、憂懼措く能はず、剛健の士を糾合し以て搜索隊を組織し、一

亡友よ、流星の如く去來せし君が一生に關しては、われ等今深く云ふ處あらざるべし。われらは唯云はむ、君が遺骨を横へし南國の濱、烟波永しへに哀絶の歌を調ふるの邊、君が炎々たる詩的情念は必ずや世を動かすべき一詩人を化育すべき使命あるを。われらかく云ひて自ら慰めて已まむ。

茲に謹んで、死して尙生くるが如き君の靈を涙と共に悼む。(としや)

は倉谷方面より一は桂方面より部署を定めてその後を慕ふ。

されど深山の秋徒に閑け易くして風雪交々至り、温度は常に零度以下を示して行動意の如くならず。決然恨を残して七日遂に歸れり

嗚呼兩君夫れ何くに行きし、聞く卿等、好んで深山幽谷を跋涉し毎に地質を探究して、製圖をなすを以て、無上の樂みなせりと、しかも遂に斯學の犠牲となる。

嗚呼兩君、夫れ何くに行きし。吾人はその無殘なる最後に想到しては、慄然としてその薄運を哭せざるを得ず「深山には霰ふるらし」此頃を兄等が幽魂嗚呼那邊にか迷へる。一言以て追想の辭となす。(としや)

肥佐多、茂木兩君を憶ふ

人生何ぞ痛恨の事のみ、しかく多き。

十月二十五日、輕裝、飛越の山深く分け入りし二部三年肥佐多甲、茂木霜松兩君、遂に歸らず

肥佐多兩君搜索の概況

桂方面

犀川を金澤より遡る事約十里、靈山あり、ひと名づけて奈良岳といふ、日本アルプスの北門なる白山連峯の一にして地を抜く事實に六千尺、山は高からずと雖も谷深し、有史以來幾千歳、畫聖も未だ其雄偉を畫く能はず、歌仙も未だ其崇高を歌ひしを聞かず、峯頗る峻秀、斷崖あり、絶壁あり、溪ありて流れ、瀑ありて懸る、未だ凡下の足跡を印せず、時に神仙の藥草を尋ぬるを見るときや、谷は甚だ幽邃、曾て溷濁の水を流さず、潭淵に藍靛をたゝえ、奔湍に珠玉を綴る、高嶺に佳木異草あり、麓に珍禽奇獸を見る、されど雲霧長へに封じて靈氣常に磅礴し容易に登踏するを許さず、山岳に趣味を有するの士は宜しく一たびは足跡を印すべき所なるに、古來

人跡不到、山魘木魅の巢窟と稱せられ、登山家を以て自ら任ずるの士も未だ曾て此の山に杖を曳きし者あるを聞かず、士人と雖も山靈を恐れて敢て登山を試むる者なく、時に途を迷ひて此山中に入れば再び歸り來る者一名もなしとかや、茂木霜松君は幼より山岳を好み、常に山岳を以て無上の朋となせり、期を得れば乃ち紫微の山巔を極め天の餘りに低きを歎きたり、君は我が邦人が海國民として海を知らざると同然、山國民として山を餘りに知らざるを慨し自ら山岳の鍵たるを自覺し、越後、越中、加賀、飛驒、信州、甲斐に連亘する所謂日本アルプスの高山峻嶺を攀ちて一もあます處なし、他日君の専門とする地質學上の見地より本邦山岳の現狀を世の人に紹介せんとする宿望を有し、が今や君は學友肥佐多甲君と共に奈良岳の山懷に抱かれ、數千尺の雲上に永く眠りて歸らぬ客とはなりぬ、あ

兩君は逝けり、犀川はとこしへに水を流して盡きざれども人歸らず、同情に厚き校友諸君の援助により、大搜索隊は發せられたり、然れども山は深くして道路全く絶え、寒氣は骨に徹して屢身体の自由を失ひ、奔湍に歸路を斷たれ、一夜を洞中にあかして、あやうく一命をつなぎし者あり、一行の内將さに死地に陥らんとしたる者幾人なるかを知らず、此の上搜索をつゞくるは人力の能く爲し得ざるを悟り、涙を呑んで搜索を廢止するの止むなきに到れり、亡友兩君の爲めに多大なる同情を寄せられ、搜索隊に援助を與へられし學友諸君に、搜索の模様、奈良岳地方の情況を記し、一は以て學友諸兄の好意にむくひ、一は以て亡友の靈を吊らはんかな、

を訪づれたり、余も君も共に旅行狂の事なれば自然話題に上るは旅行の範圍の外に出でず「奥池の方が若しくは犀川の奥より奈良岳を踰え越中桂村へ出られるに相違ない、いつか期があつたら一所に行つては見ないか」とは平素空晴れたる日、四高運動場の北隅のやはらかき草上に坐し、學校の屋根越しに大門かけて千丈平を眺めつゝ常に口にしたる處なれば廿六日に運動會の催しあるを幸ひ、此の機を逸せず鐵脚を六千尺の天上に飛ばさん事を約しぬ、豫定は廿五日午後金澤を發し、倉谷に一泊の上、そこより案内者を一名備ひ、翌廿六日倉谷より犀川の上流西谷川に沿ひ、溪流を溯り、堂々として天地を震はす犀瀧を賞し、之れより途なき山に分入り、奈良岳の三角臺を通過し、明治の武陵桃源とも稱せらる可き越中桂村に下り、廿七日に大門山、山毛櫛尾峠より下小屋村を経て、湯涌に出で、

十月なかばの事なりき、秋風の名残り悲しう吹き誘ひたる夕暮、余は柿木島なる茂木君の下宿

淺野川の流れに沿ふて歸校する事とせり、同行者にて、肥佐多君始め四五名の友を語らひ、登山の日の来るを待つ、

廿五日は金澤に於て稀に見る好天氣なりき、秋山蕭颯として紅粧染めて未乾かず、秋色慘憺としてけむり飛び雲歛まる、山水を愛し、風月を愛づる者、誰れか此の秋に一遊の情湧かざるも

のぞ、茂木君の喜ぶ事限りなく、手は舞ひ脚の踏む所を知らず、たとへ物買ふ錢はなくとも暇さへ得れば草鞋を友とする余は如何なるまがつ

神に魅せられしにや、此の葉ばかりは、旅行に憎悪の念を生じ、今出發せんとする其時になり

て「今度丈けは何だか氣がむかないから失敬する、悪くは思はないで呉れ給へ」と云へば、茂木君の失望する事言語に絶し、返す言時もなく

りけり、之ぞ科學者も尙未だ覗ひ知る能はざる俚俗の所謂「蟲の知らせ」にはあらざりしか、理

外に理あり、今の眞理とする處のものも必ずしも未來の眞理にあらず、われは蟲に知らせられて世に長らへ、友は山靈にさそはれて紅葉の下

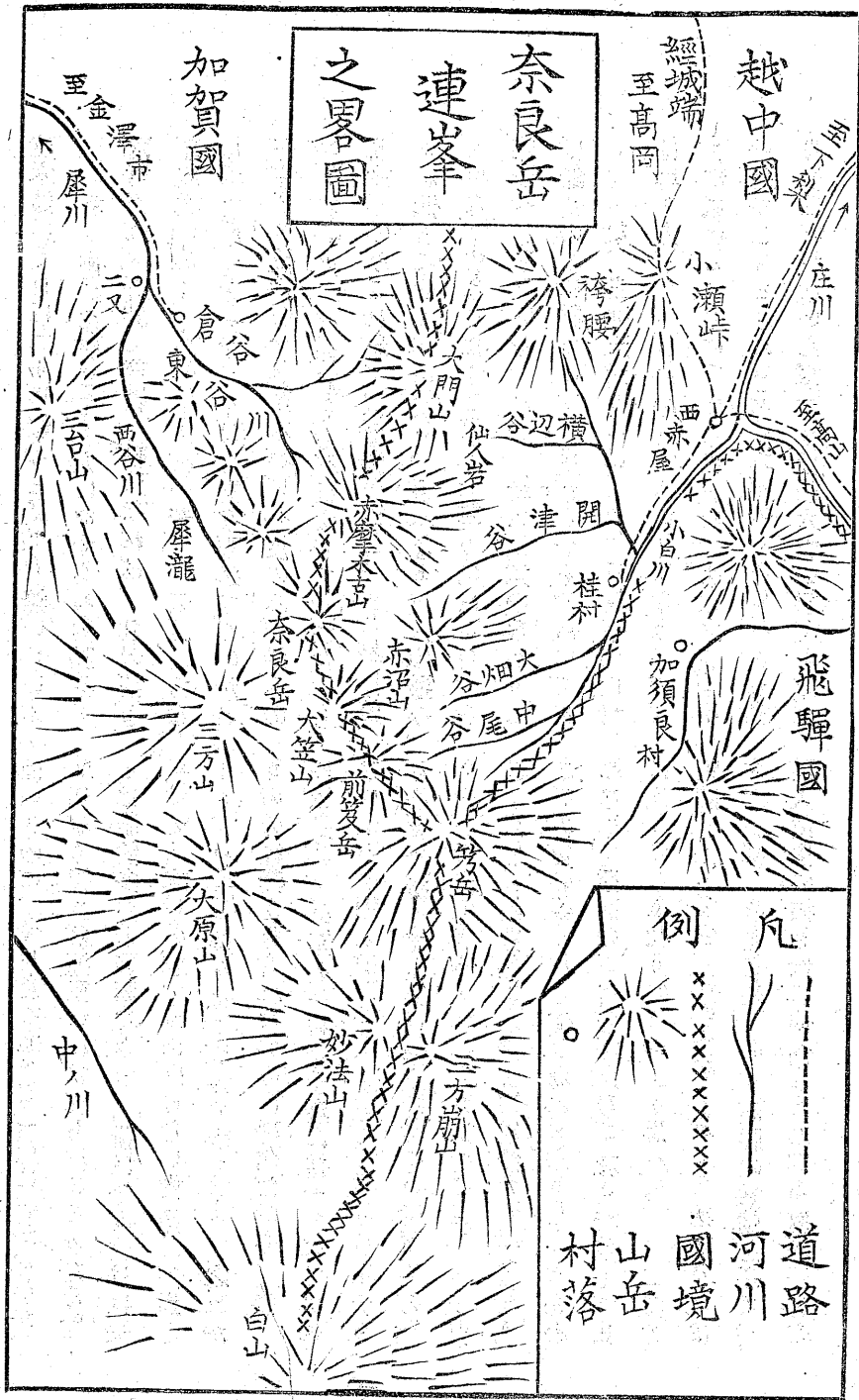
に永く眠りに行く、われに神通の力無く、彼れに神仙の明を缺く、此の間の消息を知る者は之

れ天と地か、行く筈なりし三四の者も何れも都合ありて思ひ止まり、茂木、肥佐多兩君のみ出發する事とす、

われは兩君の行を盛んにする爲め辰巳村迄見送る可しとて三名連れ立ちて金澤を離れたるは午

後二時頃にやありけん、茂木君は霜ふりの上着に白のズボン、肥佐多君は上下共黒の夏服、兩君

とも近視眼を憂ひ居れば近眼鏡を懸け、カバンを肩にし、先週後谷へ遠足せし時に持ち歸りし一問ばかりある山櫻の杖を手にし、此の様子なら三日間位は大丈夫だろふ」とて外套は勿論、



茂木君は一日に二十里位なら屁でも無いといふ豪の者 肥佐多君とても人にゆすらぬ健脚家、兩君何れも脚絆に草鞋の輕裝なれば、其の速き事脱兎の如く、後を追ふ余の苦しさ云はん方なし、常なればナゼこんな餘計な事迄するのかと怪まるゝ位用心深き茂木君は今度のみ着換へのシヤツは勿論、外套をも纏はずして、ひたすら前途をのみこれ急ぐ、奈良岳は兩君より見れば、よし低きにせよ、山深し、古へより、人の通ひし例なき山なれば十二分の用意も尙ほ不自由を感じすべき所なるを、外套一枚の用意のなかりしは無情の風に誘はれて黄泉路をいそぐ故にてありしよな、韋駄天走りにはしり行けば下辰巳村は早や過ぎて上辰巳の發電所近くになりぬ、どこ迄見送るともはてしなれば、余は之より引き返すこゝとしぬ「此の天氣のいゝのに、なせ貴様は行かないんだ」とは茂木君の言葉「來ればいへのに、今日倉谷迄でも一所に行かないか、明朝早く歸れば運動會には充分間にあうだろ」とは肥佐多君の言葉なりき、「僕は今度だけは失敬する、來年の春、雪の融けない内是非同道しよふ、だから道をよく覚えて来てくれ、之れから山の紅葉を見られないのは残念だから、歸りには是非、紅葉の一枝を土産に持つて來て呉れないか」と頼めば「ヨシ、ワカッタ、ウント大きな奴を手折つてかついで歸るから待つてろ」、ちや之で失敬するよ、「さらば」とニコリ笑ひ、ふたりと袖を分ちてわれは獨り家路へ急ぐ、之ぞ再會の望みなき生き別れとなりしこそあわれなれ、浮世の不幸の極点なる死まで賭して山に入りにしふたりの身の上を思へば、何となく物悲しくなりて涕涙の自ら逆るを禁ずる能はず、一身の心血を竭くし、滿腔の熱情を以て、巨人山岳の相を世に傳へんとしたる風流雅懷なる兩君の末路は、斯くも悲惨なりしか、奈良岳の木や石や水や、もし靈あらばこの恩人等の爲めに何ぞ泣かざる、石何ぞ其の頑として黙々たる、水むなしく流れて何をかなす、天若し情あらば、何ぞ今暫し兩君が命をのべて彼等の爲めに其宿望を達せしめざる、無情なる昊天よ、無慈悲なる昊天よ、むなしく季札の恨をいだけども、劍をかけんよしもなし、秋くれなひの山に入り、紫の岩に登りしが、其の紫の岩と思ひしは紫の雲にして、忽ち五体は雲と化し、紫の氣は更に深く雲を染め、雲は風を呼んで高く天上に飛びにしか、明春よりこゝに年々、雪を割りて紫の花や咲くらん

廿七日に歸る可き約束の者、廿八日になりて歸らず、廿九日となり尙ほ未だ杳として其の消息を得ず、廿六七兩日は金澤は大雨なりしかば或

は天候の都合により一兩日の遅延を見るも、さしたる心痛する要も無き様なれども、奈良岳地方は之れ古來人跡不到の峻山幽谷なれば、相當の用意なくして一日を此の山中に迷へば、落つるに千仞の谷あり、溺るゝに底なき潭あり、加ふるに寒氣を飢えとは遠慮なく襲ひ來るを以て、如何に頑健の士と雖も此の強敵には對し難かる可く、よし巖窟中に一時を凌ぐとするも尙ほ命を賭する覺悟なかる可からず、兎も角も事の次第を學校迄届け置くは事の順序なれば、肥佐多君の監督教官は幸ひ中野先生なるを以て、余は廿九日午前十一時學友平山季七氏と共に先生の宅を訪づれ、奈良岳の如何に深山にして又如何に危険なるかを説明し、善後の策を講じぬ、

十月の末、北陸の地に於て平地に雨降れば山は必ず雪となるは誰人も熟知する處、冬服に外套を纏ふも尙ほ寒冷を覺ゆるを、兩君は共に夏服に

して着換へのシャツ一枚携帯せざりしより見れば、必ずや雨雪に侵され、少くとも疾を得て倉谷邊に療養を事とし苦悶して日を送る身となりしなる可し、一應其方面調査の必要ありと爲し、中野先生には直ちに倉谷鑛山事務所及び金澤警察へ其旨通知し、然る可き處置を執られん事を依頼せり、倉谷への郵便の往復は二日或は三日を費し急の間にはあはず、手紙の返辭を待てば、待つ人の消息は得られず、意を決して平山君は三十日正午、結束して倉谷へ向ふ、兩君の有無を確かめ、其後の消息を聞かんとするにあり、金澤より倉谷迄は往復十二里、上り下る坂又坂の街道なるに、前日來の雨の爲め往來はいたく道を損じ、泥濘膝を没して進行意に任かせざるを、飛鳥の如く走り行き、夜の十二時を過ぎざれば歸らぬ事と思ひしに日没して七時を過ぎる三十分、同氏は悲しむ可き報を齎らして歸り來

りぬ、曰く、茂木、肥佐多兩名は廿五日に區長山岸太平洋方に一泊し犀瀧を見物して豫定の如く奈良岳を踰え、越中五箇の莊へ出づべしとの行程を語り、握り飯各四個宛、外に草鞋四足を身にし、廿六日早朝、威勢よく同家を出發したるは事實相違なきも、其後の踪跡全く不明なりとの事なりき、奈良岳地方の地勢は土人以上精密に知れる茂木君も案内者丈けは備ひ入るゝ心算なりし處、案内を知れる者折り悪しく當時炭を焼く爲め一里程の山奥へ入りて未だ歸村せざりし爲め自己の力を憑みて案内者を連れざりしは重ね／＼不幸の原因を重ねたるものかな、奈良岳一圓の地形を見るに、先づ白山に其の源を發し東南に走りて加賀、飛驒、越中の國境となり、妙法山(五千五百尺)美濃原山、笈嶽(六千尺、千丈平(六千尺)奈良岳となり、千丈平よりは一脈西方に分岐して、尾添川と瀬波川との間に

大谷山、高倉山等を生じ、奈良岳の西方にも奥三方山(五千尺)大原山、尾凹谷峯、笈立峰等東西に連列し、之れより山脈西に向ひ、直海谷川と手取川との間に笠山、太白山等を起し、奥三方山より西北に分岐せる支脈中には、三方山(四千尺)を生せり、奈良岳以北連嶂間は北に走り、赤摩不古(五千尺)大門山(五千尺)等最も高く、之より稍々低夷して大倉山、順尾山となる、故

も屏嶂を築けるが如く、山勢甚だ高峻雄拔を極め、嶺峰盪々劍戟の如く、突兀として蒼穹を摩し、其の山頂は概ね怪巖峭壁犬牙削立して、一年の大部分は白雲を戴き、盛夏尙ほ溪間には殘雪を留むること少なからず、此のあたりは實にこれ我が國に於て最も高大峻峻なる山脈の一にして、日本アルプス北門の稱ある亦宜べなりといふべし、

に奈良岳を中心として前後左右 五千尺を踰ゆる峻峰屹々として雲表に聳ゆ、畧圖にも示すが如く奈良岳の前後には唯加賀に倉谷村あり、越中に桂村あるのみにして、此の他に人の棲む村落等絶えてあるなし、犀川は即ち奈良岳及び大門山に發する、西谷川及び東谷川の二流が、二又附近に於て相合して成れるものにして火山岩の山岳地方を北方に流れ、第三紀層の丘陵地を経て後、第四紀層の平野に出づ、奈良岳連峰恰

故に人は奈良岳に入れば、倉谷又は桂の兩村の内何れかを通過せざれば他へ出づる能はず、而して今や倉谷を出發せし事明かにして、未だ其方面に歸來せすとならば、此の上は桂村の方面を調ぶるは之れ刻下の急務にして一刻も猶豫すべきにあらず、乃ち同窓生なる本多慶太郎、渡邊一布、寺崎良策三君に桂に急行して貰ふ事とし同君等は十一月一日金澤を發し脱兎の勢を以て五箇村へ向ふ

一方父兄にも飛電して來校を乞ひ、金澤警察署及び富山警察署へ宛極力搜索方を依頼す、いくら警察でも人も通はぬ山中には手の届き様もなければ斯かる場合には同情に厚き學友の力を借るの外なく、又生徒間に於ても友誼上黙し難く、桂へ向ひし三名の歸校を待つ事なく、一大搜索隊を組織し、倉谷方面のは田中教授之れを引率し、桂のは駒井生徒監之れを率ひて、各自の部署を定め、倉谷、桂兩方面より同時に大々的搜索を行ふ事に決す。

○桂村方面搜索の概況

搜索と口には言へど實際其局に當れば、其の辛苦艱難、到底筆紙の及ぶ所にあらず、白山立山位なら高さこそ高けれ、平素人の行く場所丈け、それ丈は容易なれども、太古より以來俗塵の未だ曾て其山巔を汚がせし事なき峻嶮を攀ぢ斷崖

を下らんとするには、之れに對する準備も整へざるべからず、一行が大行李として携帶せしものを擧ぐれば

提灯、蠟燭、マッチ、細繩、呼子笛、足袋、手拭、紙類、鉛筆、砂糖、氷砂糖、茶、ミルク、牛肉罐詰、福神漬、海苔罐詰、干鰯、懷爐、藥品、パロメーター、パスメーター、クワノメーター、セキスタント、ピストル、日本刀、双眼鏡、計算定木、ウキスキー等なりき。

十一月三日、午前五時夜の明けはなれざるに一同金澤停車場に集合し發車の時間の來るを待つ。

城端町に下車し一同直ちに同所の警察分署に出頭し來意をつけ、人夫二名傭ひ入れ、主な荷物丈けを先づ西赤尾迄運搬せしむ、城端を出づれば西赤尾へ到るも桂へ行くも煙草一つ求めんとして能はざる深山へ入る事なれば、金澤にて買ひ忘れたる品物なぞ用意す、新聞によりて知り

しなる可し、何れの商店に入るも「御氣の毒なヨッチャニイ、山は寒いサカイ、アンタ方氣をつけて行つて來マッシ、之れは一割丈け引いて置きます」とて吾々に同情を寄せて呉れるもうれし、干鰯を買はんとて或る魚屋に立入りしに「新聞紙を一枚つけてあげます」と云はれしには一同少々驚かざるを得ざりき、山間僻地に何事も不便を忍ばざる可からざる人々には此の古新聞一枚も如何に尊く又如何に利用さるゝかを思ひ、都人士の餘りに贅澤なるを余は憎みぬ、富山縣警察よりは吾等一行に巡查一名附隨せしむる爲め下梨の巡查五十嵐權之助といふ者を此處まで出張せしめたるは吾等の同縣に對して深く感謝する所なり、先きに出發せしめし人夫を除き一行十二名、小瀬峠の嶮路へ急ぐ、城端を出て一時間、時は正午に近く一同食思頻りに催して止まず、依て腰をおろし用意の辨當をひらく、

時は之れ秋のなかば、見渡す曠野は秋の氣を入れて物淋しけれども、山には楓樹爛然として紅を吐き、其美、その艶陽春の花に勝れり、前面には綺錯錯たる景あり、脚下には涓々たる細流あり、此の景の内に空腹を抱へて握飯を食ふ、粗飯惡菜も尚ほ人をして盡き易きを惜しまれたり、一行の内、鮎の佃煮を携へ來りし者あり、一同に分つに衆咸なよろこぶ、特に仙波臺五君には長さ一寸餘りのものを得しとて喜ぶ事極りなし、口中に入れるに及んで、ウンといふ一語を殘して何れへか走り去りぬ、歸り來る其の顔色を見るに閻魔大王が喉に魚の骨でもさした時の如くそれ然り、前に大きな鮎と思ひしは鮎にはあらで大きな唐辛と知られたり、休憩する事三十分、草鞋の紐しめ直して小瀬峠へどかゝる、峠とさへ云へば人は直ちに箱根峠、碓氷峠を聯想すべし、箱根峠は天下の險、碓氷

峠は蜀の棧道も雷ならずとかや、險とは雖も一せられ雲表に聳立す、高さ八千尺、實に坤輿のつは天下の大道なり、蜀の棧道も雷ならず的確中樞、萬邦の重鎮にして、崇高雄偉天下に冠た水峠は汽車わが夢を載せて走るにあらずや、小瀬峠は人未だ其の名をも知らざる者多かるべきも、地を抜く事實に幾千尺、急坂惡絶實に天下無比、衆憚々として登る能はず、一步は一步より高く苦しく、中には困憊して一步も進む能はず、喟然として嘆聲を發するものもありき、中にエローブカ、ダークグリーンを調和して織腹に至れば眼界稍開け、醫王山、順尾山等眼下に俯して瞰るべし、谿谷を伏して見れば奔湍激流、巖に激し山をめぐり、神戦き、目眩み、疎然とし肌を寒むきを覺ゆ、頂上に達すれば曠々として横に障害なく、越中平野手に取るが如く、射水川は大蛇の如く、遠く有磯灣に注ぐを見る、双眼鏡を取れば帆船点々として風に從つて走るを見る、河北瀉俱利加羅峠等指呼の内にあり、颯て南方を望めば、白山は皚々たる雪を以て冠

せられ雲表に聳立す、高さ八千尺、實に坤輿の中樞、萬邦の重鎮にして、崇高雄偉天下に冠た水峠は汽車わが夢を載せて走るにあらずや、小瀬峠は人未だ其の名をも知らざる者多かるべきも、地を抜く事實に幾千尺、急坂惡絶實に天下無比、衆憚々として登る能はず、一步は一步より高く苦しく、中には困憊して一步も進む能はず、喟然として嘆聲を發するものもありき、中にエローブカ、ダークグリーンを調和して織腹に至れば眼界稍開け、醫王山、順尾山等眼下に俯して瞰るべし、谿谷を伏して見れば奔湍激流、巖に激し山をめぐり、神戦き、目眩み、疎然とし肌を寒むきを覺ゆ、頂上に達すれば曠々として横に障害なく、越中平野手に取るが如く、射水川は大蛇の如く、遠く有磯灣に注ぐを見る、双眼鏡を取れば帆船点々として風に從つて走るを見る、河北瀉俱利加羅峠等指呼の内にあり、颯て南方を望めば、白山は皚々たる雪を以て冠

づる事他よりも遅く、日の暮るゝ事亦他よりも早し、夜の帳りは既に下りて最早や咫尺を辨せず、一探一步尙ほ進む事里餘にして漸く西赤尾に着く事を得たり、村長岩瀬重二郎方へ一同泊する事とす、草鞋の紐を解き足を溪流に洗ひて座に上る。夕餉を濟ませ明日よりの搜索の相談を始めし處、一村人あり 去月三十日蚯蚓谷附近に於て山葡萄を採取し居る内午後二時頃と覺しき頃、谷一つ隔てたる、赤摩不古山の山腹に當り、二三人連れと思はるゝ人の話し聲を聞きたりと云ふものあり、赤摩不古山は奈良岳に比すれば峯低けれども、今頃人間の聲のする筈なく、若し事實人の聲のせしとならば、兩君が或は途を迷ひて、此の方面へ出で、山葡萄の類を食して僅かに飢えを凌ぎ、聲を限りに呼ぶ聲を、低音を以て會話する様に聞き取りしには非すやとて、兎も角も其の聲を聞きたりといふ男

く散る、吾れは此の景の爲めに一掬の涙なき能はず、
山を下れば庄川の流れば、千古盡きざる白山の積雪を流して未だ尽きず、川の兩岸は屏風の如く峭立し、流れば鏘然として聲あり、對岸に一寒村あり、名を知らず、紅葉につままれたる一軒より細き煙の登るは人の棲めるを知らしむ、橋ありて架せらる、橋とは名のみにして、木を割り藤蔓もて固くしはばり、漸く兩岸を通ずるが如くせるものなり、余等墜落するを恐れて一人も渡らんとするものなし、さながら通天の架棧の如く、鵲の羽を交したるかど疑はる、惜むらくは我に牽牛の風事あるも、西岸に織女の情を牽く者なきを、試に足を以て踏めば、搖颺して危き事云はん方なし、西赤尾へ出づるには此の橋を渡る必要なき故、衆見すて、顧みず、ひたすら前途をのみ之れ急ぐ、山間の事故目の出

を、岩瀬村長より呼び寄せ詳しく當時の状況を尋ぬる事とす、聞く所に依れば、人の聲には事實相違なかりしも、こちらよりオーイオーイと叫びしに其れへの返辭は絶えて無かりしとの事なりき、午後四時頃歸村せんとする時又もや、人の聲を聞き取り「何だか不思議ナコッチャ」と思ひつゝ、歸路に就きしも、今度の慘事に關しては當時何等の知る事無かりしかば、其儘今日に及びたりと聞き、返答の無かりしは或は返答する積りにて發したる言葉も聞えぬ事あり、もし又、ジャングルの中を右へ左へ押しわけ生路を求むる最中、遠方より叫びたればとて、ガサ／＼とする音にさへざられて聞えぬ事もあるべく、又然らずとするも、風の方面に依り谷の状況に従ひ音響學の原則により、こちらよりの聲が先方に届かぬ事もあるべく、若し又其れが人の聲に非らずとするも、同方面は早晚搜索の必

要ある地なるが故、明日早速、特に同方面を探索する事とし、各々部署を定め各自の責任を明かにし、聲を聞きしといふ村民、他に五十嵐巡査、岩瀬村長始め學生十名、外に人夫十名、合計二十三名、四日の早朝西赤尾を發し、蚯蚓谷へ向ふ、此の日朝より微雨あり、何となく空模様あやかりしも、さりとて一日の悠豫を待つ可きにあらねば、一同意を決して山へ行く、蚯蚓谷までは西赤尾より約二里、其間道路と名の付くものはあれども無きが如く、秋の末の事とて木の葉は落ちて地上に積り、其上に雨の降りかかるを以てツル／＼と迂りて尻餅つくもの幾人なるかを知らず、右も谷、左も谷となり、さながら劍の刃渡りとも覺ゆる邊りへ出でしに、其の危険なる事名狀すべからず、一步足を誤れば身は千仞の底に鬼と消ゆるなるべく、衆威な戦々競々として顔色更に無し、山は之れすべて紅葉

なれども、身の危険を虞り、友の所在を求むるに急にして、景色を樂しむが如き呑氣な眞似は夢にも見られず、山に登る事高ければ高さ丈け、雨は益々強く、寒氣骨に泌みわたり、雨は外套を透し、洋服を溼し、シャツに及び、ノートブックを始め携帶せる總べてのものは水中に在るも同様、氣もちの悪き事極り無く、午前十時頃に及び一同体冷えて動く事能はず、尙ほ一時間を續ければ必ずや病人生じ、搜索はをろか、思はぬ死体までかついで戻らねばならぬ事を知りし故、少し平地でも有れば火を焚き、暖を取り、中食を爲さんとて、ふと前方を見れば、此の山中に思ひきや、木を折り、屋根の如きものを作りし小屋様のものを認む、寒さと苦しみと危険との爲めに元氣衰へんとしたる、一同にはかに勇氣百倍し、飛ぶか如くに走り行く、餘りに急ぎし爲め松原君と及能君枯葉に足迂りて六十度に近

き峻坂をツル／＼とすべり始めぬ、アレと云ふ間もなく兩名とも五六間下方にころがり行く、アレヨアレヨと云ふのみにて手を下さん由もなし、幸にして木の根に支へられ兩君とも危うかりし命を取られざりしは實に天祐といふべし、尙ほ二三間下迄落ち行けば山は直ちに斷崖となるを以て身は粉の如く碎かれしならんを僅か一本の木の根によりて命をつなぎ留めし兩君の心中如何にうれしかりけん、兩名のこゝ迄登り來るまで三名の者を殘し置き、他はすべて小屋へと急ぐ、ドキドキする胸を無理に押へて中を覗けば、人ありと思ひしは誤りにて無人の境、側を見るに木を削り柱をつくりそれに明かに左の文字を讀む事を得たり、

中伏木小林區署、明治四十二年十月植付、面積二十町歩、樺四萬本云々

之れを以て、此の方面に於ける總べての疑問は

氷解す、唯多人數の夫夫の此の山中に働くを西索の手遅れとなる恐れあり、晝は搜索に身を粉赤尾邊の者の全く知らざりしは、大門山、山毛樺尾峠を踰へて、此處に到りし故村民の全く人の居るを氣付かざりしは無理ならぬ事と思はれたり、

然らば茂木肥佐多君等は此の方面へは來らざりし事明かになりたれど尙ほ念の爲め横邊谷、仙人巖方面を隈なく探索して、雨に濡れ、体は綿の如くなりて午後六時頃一同西赤尾へ引き揚ぐ、岩瀬方へ戻るや否や何れも外套をぬぎ、洋服をぬぎ、シャツをぬぎすてたれど着換への洋服なく、シャツ一枚では此の寒氣に、いくら何でも堪へ兼ね、止むなく、夜着て寝る夜具を頭より引きかむり、僅かに寒さを凌ぎたり、火鉢に火を起して洋服を乾かさんとすれど、終日雨に濡れて歸りしもの故容易に乾かず、乾かさずに置けば明日の仕事に差支へを出し、従つて捜

索の手遅れとなる恐れあり、晝は搜索に身を粉にし夜は衣を乾かして安き心もなし、僅かミルタの一罐二罐を開くも身体の營養の端にもならぬなるべし、寒しと雖もそを凌ぐに足る防寒衣のあるなく、飢ゆると雖も腹を満たすに足る白米のあるなし、室内に盛んに火を焚き、二人或は三人抱き合ふて凍へるが如き夜を忍びて天明を待つ哀れさ、其の場所に臨みし人ならねば知る人ぞなき。

五日一同は桂へ向つて出發す、桂は西赤尾村より三里の山路なり、此のあたりの三里は平地の三倍以上の苦しみあり、西赤尾より少し進めば、道は右と左とに岐る、左すれば即ち小白川村を経て飛驒の高山に通ずるもの、右すれば即ち明治の武陵桃源桂、加須良村に到る細道なり、乃ち左して、上り下る坂又坂の山路を辿る、幾度に繰り返しても紅葉の美は實に天下一品、繪に書

くとも筆の及ぶ所にあらず、益々進めば益々路は險惡、險路といはんよりは、むしろ天梯といふ可く、一行十數人、魚貫しつゝ、風に御して空にのぼる、庄川の支流小白川に沿ふて行く事二里、青瀧臺あり、之ぞ五箇莊中の絶景にして林先生の所謂「天下の絶景なり」、高さ幾百丈の烏帽子形の巖を攀ちて下瞰すれば、白晝尙ほ、怪雲湧き、流水青くして、恰も青龍の雲に駕して天上に登らんとするが如し、見るごと暫時にして、身に凄愴の氣を覚え、目は舞ひ、脚震へて、しばらくも止まる可からず、寫眞機あれば實に逸品を得るならんも、此の場合、かゝる業を爲すべきにあらねば、飛ぶが如く此處を見すごしぬ、

一、奈良岳直進組、奈良岳山巔に達し三角点附近に兩君通過の形跡有無を取調ぶるもの
生徒 西村真一郎、仙波臺五
人夫 二名
巡查 五十嵐權之助

二、開津谷組
生徒 元尾大巖、松原成一、富田繁秋、大森四郎
人夫 三名
三、大畑組

桂に着して明日搜索すべき部署を新たに定む、倉谷方面の登りし道は一本なるを以て、搜索も幾分爲し易き所もあらんも、桂方面に至り

四、各自の携帶品、握飯六個、細繩、提灯、水筒、

草鞋二足、氷砂糖

五、各組の携帶品、ミルク一罐、罐切、藥品

六、注意、兩名所在發見の場合は直ちに急使を發する事

五十嵐巡查の檢視を乞ふ事

臨機の處置を執る事

午後三時を期し一同集合の上飯路に就く事
六日、床を離れ戸を押せば世は皚々たる銀世界、昨夜降雪したるが爲めなり、寒暖計を見るに室内に於て華氏の三十度、經一尺長さ一間半もある山毛櫨の大木を爐中に盛んに焚きて暖を取らんとするも、四隣の寒氣の爲め熱は放散し去りて体温まらず、戶外に出づれば、孟冬の寒氣到り、北風慘慄たり、面を撲つ風、針を含み、しばらくも留まる可からず、止むなく日の出づるを待ちて出發す、三組各々其向ふ所を異にすれども、其の目的とする處は皆一つ、亡友兩君の

所在を求めんとするに在り、桂、西赤尾間は假令名丈けなりとも人の通ふ道路あり、されども之れより一行の進む谷々は熊、猿の類ひならは往き來の必要なき場所なれば勿論、人の通ふ路のある可き筈なく、何れも溪流に沿ひ、巖角を攀ち漸く一步に一步、歩を移して前進する事なれば路は少しもはかざらず、時に岩の滑らかなる爲め迂りて眞倒に水中に倒れ、全身濡れ鼠の如くなり青息吐息の姿で「ア、シマッタ」とて流れより這ひ登り來る其の哀れさ、開津谷、大畑谷、何れも谷深くして、歩行意の如くならず、溪流は雪を融かして流れ來る故、水頗る清冽、冷氣骨に沁み、躰は己れのものとも覺はず、谷の兩岸は之れ屏風の如き大障壁、絶崖高さ幾百尺、危岩我れ等が頭上を壓し、其上には幾十年も経たらんと思はる、針葉樹を点綴し、青苔滑らかにして、龍鬚髯髯容易に人の近づくを

許さず、奔湍或は岩に激して波白雪の流るゝが如く、石は潤ふて玉にも似たり、深水急瀨渡るべからずして止むを得ずもと來し谿を四五十間も戻り、漸く流れの幅廣く水淺きところを見出し、石より石に轉石を傳へて漸く對岸に達する事幾百回なるかを知らず、傳ふべき石のなき時は、ザブ／＼と水中を徒渉す、水腰に達し、衣袂悉く潤ふ、大畑谷へ向ひし者は先づ赤沼山に登りそれより大畑谷を下りて搜索しつゝ桂へ歸る筈なりしも赤沼山に登る丈けでも一通りの業にあらず、僅か十五町を行くに二時間を費やせしより見て道の如何に困難なりしかは想像するに足る可し、此の組の赤沼山々頂に達したるは午後三時、如何に急ぐとも、之れより桂へ歸る丈けでも日は没す可きを、況んや前進するが如きは夢想だも及ばず、一同涙を呑んで下山して桂へ引き返す事とせり、此の邊りの一面には地

上石楠シヤクナグと岩蘇イワカサミとのみ生ひ茂り、春の開花の候の如何に美しきやを想はしむ、赤沼山低しと雖も地を抜く五千尺、神風帽簷に吼え、衣袂を捲くもの之れ太古の風、我れ等より上は天の蒼々ど日の赫々どあるのみ、脚下には颯々たる長鬚、蓬蓬たる白雲のあるのみ、初めて身の人圍を遠くはなれて天界の人となりしを悟る、此の組何の得る處なくして殘念なれども人の力の能く及ばざるを嘆き午後六時宿舎に歸る、

奈良岳は吾人の最も望を屬したる所、直進邁往、如何にもして其絶巔を極め、兩君の通過の有無を明かにせんものをと一行五名、結束して出でたれども、行くに道なく登るに翼なし、鏘々たる奔湍を辿りて、右へ左へ／＼として縫ふて進む、石に迂りて水中に轉倒する事何百回なるかを知らず、五十嵐巡查の如きも最初の程は意氣大いにあがり人意を強ふせしも、行く事二里、

奔湍は瀑流となり、數百丈の大瀑布 數百の段は最早や咫尺の間にあり、されど容易に俗塵のにぎざまれて落下し、其の兩側の岩を傳ふて登近づくを許さず、奈良岳の絶頂は手に取るが如く頃となるや、一同と共に困憊して進む能はず、衆疲勞甚だしかりしも前途尙ほ遠ければ勇を鼓して登り行く、雜木多き右方の溪谷は迂迴すべからず、左方の絶壁も上る能はず、此兩溪の間に介在せる瀑流に沿ふてのぼり行く其の苦しき、顧みれば之まで登り來りし谿谷は皆鞋底にあり、胸宇宏快、氣意高邁、恍惚として人事を忘る、愈々登れば愈々絶壁となる、堅硬花崗岩にも劣らざる石英班岩の大塊、天地混沌の昔より頑として自然力の浸蝕に抗すも幾百萬年の昔より刹那の間も不斷の勢力を以て作用する風化の方は、驚くべし、此の聖岩に縦横無盡の裂罅、漫りに岩角を踏まんか、岩と共に墜落すべし、漫りに岩角を握れば手に從つて崩落す、其の危険名狀すべからず、然れども突兀たる峯頭の出來得べきや、人は熊に非らず、猿にあらず、

殘念極りなく無念の涙はふり落つれども今更せんなし、山毛櫛の木の合抱なるを削りて、一行此處まで到達したるを示し飛ぶが如く山を下る、前に攀ぢたる瀑流を下り盡くせば、即ち溪流となる、溪流迄一行の下りし時は日は情けなくも全く暮れはて、如法闇夜に前後を辨すべからず、山は深く流れは急なり、辿る可き路のあ計なものを手にしては、足もそこを明るけれ、手と足を以て漸く進むを得る嶮惡極まる谿谷の事なれば、肩にせるカバンでさへ抛げ出し度くなる程なるに、提灯の如き思ひも寄らず、一度通りし所なれば歩み安かるべしと思ひしは闇に經驗せざりし空想なりけり、闇夜の内には熟路も生路なり、況んや路なき此の山中の溪間をや、眼はあれども無きが如し、われらは一時盲人となりしなり、辛くも巖角を手にて探り、足にて

は最早や咫尺の間にあり、されど容易に俗塵の近づくを許さず、奈良岳の絶頂は手に取るが如く頃となるや、一同と共に困憊して進む能はず、衆疲勞甚だしかりしも前途尙ほ遠ければ勇を鼓して登り行く、雜木多き右方の溪谷は迂迴すべからず、左方の絶壁も上る能はず、此兩溪の間に介在せる瀑流に沿ふてのぼり行く其の苦しき、顧みれば之まで登り來りし谿谷は皆鞋底にあり、胸宇宏快、氣意高邁、恍惚として人事を忘る、愈々登れば愈々絶壁となる、堅硬花崗岩にも劣らざる石英班岩の大塊、天地混沌の昔より頑として自然力の浸蝕に抗すも幾百萬年の昔より刹那の間も不斷の勢力を以て作用する風化の方は、驚くべし、此の聖岩に縦横無盡の裂罅、漫りに岩角を踏まんか、岩と共に墜落すべし、漫りに岩角を握れば手に從つて崩落す、其の危険名狀すべからず、然れども突兀たる峯頭の出來得べきや、人は熊に非らず、猿にあらず、

探りつゝ歩を移さんとすれど誤つて脚を失して轉びしこといくたびぞ、木立なき所に出づれば、峯よりはげしくおろし來る山風、小笹に激して惡魔の叫ぶが如く、闇になやむ吾等を天外に捲き去らんとするが如し、上り下る谷又谷のはてはなく、一探一步路は少しも抄取らず、今宵はこゝにて天明を待たんかとも思ひ岩に腰を下ろしては見たれども心落ちつかず、遂に坐り果すこと能はずして、また歩む、苦しさの餘り、こやせんかくやせんと考へ込みて心いつしか足の運びに疎になれば、忽ち石につまづきて尻もちつく其の痛さ、兩手のさきのぬらくするは水に濡れしのみとも思はず、創にわき出づる鮮血なるべし、一行五名、命だけはひらひて人心地もなく桂村へ歸りしは夜も更けたる頃なりき、此の日三方面へ向ひしもの相集まりて駒井先生に報告す、命を賭し人夫の難を避けて進まんと

もせざる、嶮に入り危を侵して尙は何等の得る處なく、此の上は人間の能く爲し能はざるを知り一同相談の結果、一先づ此の方面の搜索は中止する事とし、一同は明七日金澤指して歸路に就く事とせり、尙ほ中尾谷といふ谷あれども、此處は其嶮惡なる事前の開津谷、大畑谷の遠く及ばざる所にして、村民も同行を欲せざる程なれども萬一をはかりて、西村眞一郎、仙波臺五、元尾大巖の三名を一日後れて歸らしめる事とし、其方面を専ら探索せしむ、七日午前七時三名を除きて一同歸心矢の如く、脱兎の勢を以て桂を去り韋駄天走りに走りて城端へと急ぐ、之れより先き、今日の三名の爲す搜索の若し無効に終りし場合を想ひ、駒井先生と相談の上、桂方面搜索隊の獨斷を以て懸賞を此の村に残すべしとて左の證文を作り區長山田與四郎方へ殘し置きぬ、

誓約書

第四高等學校生徒茂木霜松、肥佐多甲兩名奈良岳方面に於て行方不明となりしに就ては右兩名の處在を發見し城端警察署まで届出の節は本年以内なれば金五拾圓、明治四十三年以後なれば金參拾圓謝禮として差し上げ申べく候右依而如件

第四高等學校生徒監 駒井徳太郎

第四高等學校生徒 西村眞一郎

同 仙波臺五

同 元尾大巖

明治四十二年十一月七日

富山縣東礪波郡上平村大字桂村

總代 山田與四郎殿

豫定の如く七日、三名は人夫と共に搜索をなししかど、之又何の得る處もなかりき、同日午後五時、倉谷の田中先生より來書あり、同方面も

豫定の如く七日、三名は人夫と共に搜索をなししかど、之又何の得る處もなかりき、同日午後五時、倉谷の田中先生より來書あり、同方面も

道嶮しく、天候の都合上搜索を中止せりとの事なりければ、三名も此の上は自然の力に任せんものと諦め、思ひ出で多き桂を引き揚げる事とす、

はあはれむ可き哉

奈良岳を中心とする山岳の峻嶮なるは實に想像の全く外なりき、或は猛鷲の悠々として巉岩の上に憩へるが如きあり、或は隼鷹の小禽を搏たんとするに譬ふ可きものあり、巉崑峭壁天に聳え、跌宕拔霸王の威あるあり、其の俗塵を近づけざるむべなりといふべし、巨人山岳は何ぞ終世英雄の資ある帝王の姿に髣髴たる、人は

吾れ等一行の最も困難を感じたるは山の險なるに非ず、道の遠きにあらずして、土民の人夫として備はるゝを欲せざる事なりき、土民の山を恐るゝは常人の想像の及ぶ處にあらず、土人の山岳を尊崇する事神の如く、恐るゝ事惡魔の如し、若し人の山に入り神威の冒瀆するものあれば、乃ち山靈大に怒り、却風地を捲き、強雨堤を破り、五穀爲めに稔らず、人咸な飢えに泣かざる可からずと爲し、同行せんとするもの絶えて無かりしも、警察の力を以て漸く不便を感じぬ丈けの人数を整へる事を得しは、富山縣警察署及び直接其の局に當りし巡查五十嵐氏に深く謝する處なり、さりて斯かる迷信を懐く村民

バベルの塔をも完成する能はず、自然の大は偉なるかな、茂木君の最も愛したる高山植物は岩藪なりき、縹緲たる山靈の寵兒として此の奈良岳一圓の山中に蔓延し、或ひは紅に或ひは白に韻雅なる寸々の花を抽くものは岩藪の獨り春色を弄するなり、其の怒貌の如く、渴驥の如き巖石も一度此の花の蝸附に會へば忽ちにして温容の親しむべきを見る、あゝ茂木君の此の花を愛したる亦故なきに非らざるなり、

全校八百の校友及び職員の厚き同情の下に大々的搜索を遂行するを得たるも、何等得る處なかりしは、吾等搜索隊員の學友諸君及び敎職員を

と云へば早や恐ろしい運命が眼前に彷彿されりしは、吾等搜索隊員の學友諸君及び敎職員を

始め亡友兩君の父兄に對し深く耻づる處なれども、天を翔けんとすれば翼なく、深潭を探らんとするに魚の方無きを如何せん、あゝ兩君は奈良岳の山懷に抱かれて霜と共に紅葉の下に永く眠れるか、奈良岳の名は唯一種の恨と化して深く深くわが胸にきざまれぬ

出發点は倉谷である、登攀するは奈良岳で、到着地は桂と聞たから搜索隊は先づ倉谷と桂を根拠地にして奈良岳を挾むで歩を進めねば成らぬ、

良岳の山懷に抱かれて霜と共に紅葉の下に永く眠れるか、奈良岳の名は唯一種の恨と化して深く深くわが胸にきざまれぬ

十一月一日、平山、高田倉谷に向ふ、道は之れ犀川の右岸に沿ひ美しい峽谷を俯視して行く、將に紅葉飄りて秋草繁き折である。加るに脚下の流は幾度か迂曲しつゝ、暗碧を湛へ白布を敷く。之れか若し五箇の莊の神境に秋を探る道す

(以上、二部三年西村真一郎記す)

倉谷方面

茂木肥佐多兩君が五箇莊の山深く分入つた儘早や一週に近いが杳として音沙汰が無い、十一月に入れば金澤ですら時に霰を飛ばす、まして犀川の溪流と細り遂には岩間に枯葉を打つ水滴となる、山深く且つ峻しき處であるからには恐らく雪も幾度か見舞つたであらう、二君共に夏服

からなれば幾度か空を仰いて透徹せる高天に唱ひ、幾度か潺湲たる百丈の下より響く水聲に心の犬を叫むたであらう。嗚呼今は恐らくは亡き人と思ふ友二人の跡尋ぬる憂き身である。行く手の左に大門の英姿かそゝり立つ、右に連るか奈良岳であらう。あの山に、あの嶺に友二人の

亡骸か横はるかど不圖思はれる、遙かに聒く水音は若しや二人の運命を我等に語るのでは無いかと思へば氣も漫ろに六里の山道を行き尽くして倉谷に着く。丁度五時頃である、前も後も屹立つ山で圍まれて居るから四邊は早やお暗い、遠近の山嶺のみが紅黄の色に映へて明るい錦を連ねて居る、肌寒い夕闇に淡い烟が二筋三筋と迷へる如く立ち昇るも哀れである。村を突き抜けると鑛山の製鍊場がある。時々地獄の釜の蓋を開けた様に山究まつた奥に煩烟を揚る。空が血の様に赤くなる。見るから物凄、景色である。

平山は今回の凶變で先に此の村を訪ねた折の知人に出會ふた、兎も角も導かれて區長代理の東氏を訪ふ。恰も好し今回の不幸に大に同情を寄せ老体をも厭はず桂迄で行かれた倉谷駐在所詰の伊藤巡查在り、就て桂方面の模様を聞く。伊藤巡查は三十一日に人夫二人を従へて桂に到

り取調べしも「左様な方は未だ見えん」との事で空しく歸來したと云ふ。嗚呼二君は遂に桂へは出なかつたか、桂へ出ないとするに在る所は何處か、有効な手懸りが得られたと同時に更に悲しき運命が一層確められたのである。

此處で今獲た報知を土台にして大に善後の策を立てたか結局此新報を直に金澤へ通ずる方、桂方面の調査が金澤へ着くよりも早いと云ふ事に歸着し、そうすれば搜索の手順にも大に便宜を與る爲めと平山は即刻金澤へ此報告を齎らして歸る事に決す。夜も早や九時頃である羊腸たる山路を僅に雲間に冷き星影を仰ぎつゝ、六里を夜風に包まれて出發する。後に一人残つた高田は、爐に弱る火を掻き起しつゝ、伊藤巡查を唯一の相手に今後の事を相談したが、兎も角明日は

嬉か悲みか、云ひ知らぬ思を抱いて二人は此の夜の宿所區長山岸太平方へと行く。

此處で今獲た報知を土台にして大に善後の策を立てたか結局此新報を直に金澤へ通ずる方、桂方面の調査が金澤へ着くよりも早いと云ふ事に歸着し、そうすれば搜索の手順にも大に便宜を與る爲めと平山は即刻金澤へ此報告を齎らして歸る事に決す。夜も早や九時頃である羊腸たる山路を僅に雲間に冷き星影を仰ぎつゝ、六里を夜風に包まれて出發する。後に一人残つた高田は、爐に弱る火を掻き起しつゝ、伊藤巡查を唯一の相手に今後の事を相談したが、兎も角明日は

嬉か悲みか、云ひ知らぬ思を抱いて二人は此の夜の宿所區長山岸太平方へと行く。

此處で今獲た報知を土台にして大に善後の策を立てたか結局此新報を直に金澤へ通ずる方、桂方面の調査が金澤へ着くよりも早いと云ふ事に歸着し、そうすれば搜索の手順にも大に便宜を與る爲めと平山は即刻金澤へ此報告を齎らして歸る事に決す。夜も早や九時頃である羊腸たる山路を僅に雲間に冷き星影を仰ぎつゝ、六里を夜風に包まれて出發する。後に一人残つた高田は、爐に弱る火を掻き起しつゝ、伊藤巡查を唯一の相手に今後の事を相談したが、兎も角明日は

嬉か悲みか、云ひ知らぬ思を抱いて二人は此の夜の宿所區長山岸太平方へと行く。

此處で今獲た報知を土台にして大に善後の策を立てたか結局此新報を直に金澤へ通ずる方、桂方面の調査が金澤へ着くよりも早いと云ふ事に歸着し、そうすれば搜索の手順にも大に便宜を與る爲めと平山は即刻金澤へ此報告を齎らして歸る事に決す。夜も早や九時頃である羊腸たる山路を僅に雲間に冷き星影を仰ぎつゝ、六里を夜風に包まれて出發する。後に一人残つた高田は、爐に弱る火を掻き起しつゝ、伊藤巡查を唯一の相手に今後の事を相談したが、兎も角明日は

嬉か悲みか、云ひ知らぬ思を抱いて二人は此の夜の宿所區長山岸太平方へと行く。

朝早く出發して犀瀧附近まで探ろうと取り決
め、人夫二人を同行させる事にして、薄き夜具
の中に冷き夢を結ぶ。
等の生涯、今其の跡を初冬の山に吊ひつゝ、亡
き友の跡辿る心地は譬へ様無きものである。
暫くすると途は朝露に濡れた薄の中を登る。

二日黎明二又から昨夜頼んだ人夫が来る、倉
谷からは東氏が行かれる事に成り伊藤巡查も同
行を求め、茲に同勢四人結束して未だ明けやら
ぬ山路に向ふ。倉谷の村を行き過ぎると鑛山の
構内に入る、灰色の建物に赤褐色の山の崩れ、
あらゆる自然を破壊して、新たな物を建設し
つゝ、一瞬も熄まぬ人間の力は、こんな山奥まで
手を延して居るかと思ふと物恐ろしく成る。構
内を抜けると途は右へ右へと段々溪流は脚下に
細く見へて来る、やがて採掘場を通る、灰色の
累積の間に鑛夫の家が連る。此の鑛山も廢坑に
成るのか近いとかで、この小屋にも人影が無い、
浮世と絶つた闇黒の鑛夫の生活が到る處に裸出
されて居る、荒廢せる人類の他面、敗殘せる彼
へては只一向に魚貫して上へ上へと巖根を攀る

衣袂を透して髓に沁む冷さを感じる、殊に伊藤
巡查は老体ではあり、腰の劍が一方ならぬ邪魔
をする、頗る難儀な様子に見受けられる。
途は愈烏帽子峠にかゝる、途と云つても雜木
を分け枯れ草を踏み、ともすると濡れた岩角に
足を滑らす、之は之れ先の谷から鑛山へ炭を搬
ふ爲め出来たものとか、海拔三千五百尺、倉谷
よりすら二千五百尺の登りである、秋の峠と云
へば、紅葉に飽かぬ山影に時の移るを忘れ乍
ら辿り着いた處には眺の好い茶屋があり、澁茶
に力餅でも味ふ趣か想像されるが、そんな風流
な峠では無い。木の葉の滴は遠慮なく頸元に落
る、初めこん氣にして登つたが峻更に一層を加
へては只一向に魚貫して上へ上へと巖根を攀る

許りである。頂上が鼻の先に成つて来ると、十
歩に足を休め五歩に息を吐く、熱い汗と冷い点
滴は全身を浸す、遂には無意識に進みつ憩ひつ
頂上に着た。
何事をか訴ふる、よし白雪の封すとも、我が突
く杖の有る限り跡求めずは熄まじと思ふ。

頂上には五年前迄使用したと云ふ運行機が冷
骸と成つて残つて居る、此の峠を越す者は死の
國へ行くと、何處かに刻まれてある様に思はれ
る、淋しい峠である。
小枝を掴み途無き途を奈落へと行く様である、
暫くすると溪流岩を噛むで白布と翻るのが遙か
脚下に望まれる、千仞か二千仞か只遠雷を聞く
あたりへ眞一文字に突き下る。山裾犀の淵に斷

前方には高三郎、奥、中、前の三方の連脈、
赤摩不古等の峯々か双眸に迫る、三方の肩を右
に離れて奈良ヶ岳は早や雪を戴いて屹つ、あの
峯かと思ふと何とは知らず胸が填がる、何時か
涙が眸底に湧く。恐らく亡き友二人は、あの峯
奥で倒れたのであろう、山靈何故黙せるか、
嗚呼、北飛驒と南加賀、相打つ波は彼處に一連の
脈となり退かじ寄せじと屹つよ。我が友二人空
しく穢と成されたか、嶺に荒む風の叫び、そも
思も寄らなかつた。

此處で先づ一と休して愈々犀瀧へ分け入る事
にする、丁度九時半である、犀瀧は前の溪流を

傳ふて二里程の上りだと云ふ、二里と口で云ふもの、奈良岳の奥から激奔して来る、肌切る様な冷たい水は、淵となり淵となり亂立せる岩が根を躍りつ潜みつ狂つて来る、其の奔流を右に避け左に避け殆ど絶間なく膝は愚か股まで浸して徒涉しつゝ上るのである。雨雪に刻まれた岩角には手を傷け、苔背ふた碧巖には足を踏み外す、峽際極まつては僅か木の根に五尺の軀を委ねて、漸く越す。初めは冷水骨を透す程であつたが、何時か四肢も無感覺に成つて只前人の踵より外眼に入らぬ、金澤の下宿では、思も寄らぬ峻さである。

午後零時半、初めて瀧を見る、華巖を以て直下七十丈と號せば之は確に五十丈の値はある、満溪の紅葉將に闌なるの間白沫を飛して瀑聲深壑に響く様、氣甚だ豪なる者である。暫く茫然として眺めて居たが五六間先へ行つた人夫が巨

岩の蔭に焚火の跡があると叫んだ。素破やと横はる岩を躍り越へつゝ馳け付けると瀧に背を向けた巨岩の下に凹みがある、凡そ二坪もあらう、自然と雨露を防ぐ様に出来て居る。焚火の跡は其の二坪程の真中にある、小枝が三ツ四ツ散らばつて見るから新しい跡である。否や跡許りか傍の腰でも掛け様と云ふ位の圓い石に、消炭を保持つて、第四高等學校肥佐多、茂木と誌るされである。一箇許りでは無い、其の奥の石にも、まざ／＼と二人の名が列ねてある。

恐らく友二人が死の國に入る之が最後の誌ではあるまいか、萬丈の峽谷を辿り辿りて、奈良岳の關門、犀瀧の堂々として轟く處に、何と無しに寸前に迫る運命を誌し様に思はれる。熱い涙が飛沫に冷き頬に流れる。

聞けば其の日は九時頃から雨であつたと云ふ、烏帽子を越せば雨は吹雪と變つたであらう。

嗚呼此焚火は、北飛驒と南加賀、果て知らぬ國境を凝れど封じた吹雪の中に只一筋の燭と燃わしたか、此處に生命の在る事を雄々しくも其の燭は物語つたであらう。今は冷灰と成つて跡追うた遺友の眼に千萬無量の感を抱かせる。

暫くは黙した儘で、慄然たる其の運命を心の底に畫くのみである。手蹟は確に茂木である。僅な火に凍へた手先を温めつゝ、草鞋を代へ晝飯を喫して、さらばと奈良の絶頂へ目差して行つたに相違ない。瀧を廻つて更に探れば、何か獲るとは思はれるが歸途の時間の有る事とて、やがて殘惜しき跡見返りつゝ、元來た溪流を下る。小谷平も通つた烏帽子も越へた、行くも歸るも危険は同じ程度であるが胸の一端に密んで居た哀愁は、今は袂に包み兼ねる程溢れる。何處を、どう通つたかも知らずに倉谷へ着いた。

此搜索は初めてあつたから、木の根、岩の

角にも、若しや、それでは無いかと胸を打つ、何がなし手掛にでも成る物はと、石に轉びつ水に浸りつ始終心を配つたが、犀瀧の紀念より外獲る處は無かつた。

倉谷には尾崎、池田、寺尾の三人が来て居つて結果如何と鶴首して居た、問ひつ語りつ話の中々盡き無い。思ひ出て多き二人の署名、さては溪流の苦しい事、烏帽子の難義な登り、犀瀧の雄壯な姿、あらゆる感慨は一時に胸を突く。兎もあれ今日の結果を金澤に報知する事にして寺尾が直に出發する事に成つた、要は此の方面に有力な影跡があるから搜索隊の主力は當方面へ向けて呉れとの事である。

其の夜は高田、尾崎、池田の三人、枕を並べて更に今日の搜索を繰り返したり、明日から取る行動に就て夜更くる迄相談したが、結局本陣を明日は外谷小屋に移す事にする、犀瀧以上を

探るには、とても倉谷から毎日出掛て居たのである。早速に四人は手分をして崖を攀る。七十度は、徒らに往復に時間を費し、搜索の目的は中もあろうと云ふ斷崖を樹木の枝に、ぶら下り乍ら辛じて瀧の上に出る。瀧の上は暫らくの間は小廣い平地であつて、溪流も左程廣くはない、草の根も餘すなど各自力を尽して搜すと、瀧の丁度上の處に平たい大石がある。其の上に草鞋の跡か、かすかに認められる。扱ては確に二人の足跡である、之に力を得て尙ほ歩を進めると流の右手に大きな山葡萄の樹があつて、其の下には蔓の折れたのやら、喰ひ残した跡か歴然として居る。確に人か喰つた跡で、野猿などは決して蔓を折つて喰ふ事はせぬと人夫は云ふ。二人とも此處迄來た事は判然した、愈々此の上へ行つたに相違なしと益々流を上へと探ると、人の足跡らしいのや、草鞋の滑つた跡などが盛に發見される。不圖見ると人にしては非常に大きな然かも新しい足跡がある、人夫に問ふと熊の

明れは三日、山の頂は淡く朝日に彩られて居る、先づは今日も上天氣である。搜索に取つては此の上も無い仕合わせである。

今日は人夫八人に諸道具を運搬させる、これから當分露營も同様であるから相應に準備せねばならぬ。高田、池田は別に人夫二人を連れて小屋から倉谷までの歸程を崖瀧以上に費さうと全速力で出發する、途は不相變であるが脚の續く限りと飛ぶ様に行く、小屋から先は例の如くに股まで濡らして行く、でも瀧へ着いたは十二時頃であつた、出發か昨日よりは約一時間準備の爲め遅延したからである。瀧で晝飯を濟ませ

通つた跡だと云ふ、二人は思はず駭然とした、枯れ木を踏むて、丈ある巨熊か今にも猛然として飛出し想に思はれる、中々物凄いものである。やがて溪流は蛇枕岩を左の上から落ちて來る、傾斜は益々急を加へ水は絶間なく狂つて岩に散る、流れると云ふよりは堰を一時に切つて落した様である、靜寂な空氣を貫いて崇嚴な旋律を嶺高く響かす、形容し難い境を四人の活聲が丁度他の國から洩れて來る様に聞へる、時々は野猿の啼き聲が交る、無二無三に足は飛ぶ。暫くすると河は二分する、池田は人夫一人を連れて右の方へ、高田は他の者と左の方へ、分れ

して續行する事にして最後の地に印して又溪流を下る。小屋に着いたは午後四時半頃、深い山中の事であるから早や人の面も判然せぬ程暮れて居た。

此日午後田中先生は東(區長代理)を道案内として小屋に來らる一同驚愕と共に心丈夫に感じ搜索に一層勇氣を増せり依て明日は愈々頂上を究めんとし小屋に宿らしめし人夫三名と共に準備を調へ焚火を續けて天明を待ちしに生憎四日未明より雨天となり次第に寒氣を増し山上は靄襲來り雪氣を催せり誠に遺憾限りなかりしも此日は中止して小屋に塾居し前日來の勞を慰し明日は晴雨に關せず頂上搜索を決行することに約し一方食料品を補給し人夫を増徴し最後の壯舉を謀れり此日學生數名應援として金澤より來ら

右の方へ進んだ池田も何等得る處なく今日の搜索は此の地點まで、以上は更に小屋を出發点と

十一月五日、

谷一ぱいに立ちこんだ蒸氣の中に誰か、米を磨いで居る。寝られぬ夜も明方近くとなつた。又雪でも降るのか昨日に増して寒さが身にしむ。小家の中では出發の用意に忙はし、今日は最後の目的を果すのだ、絶頂を極めるつもりだ、而も今日を越えては今日この頃の空模様、身は絶頂にゆく事が出来なくなるかとの心配もあるので、漸く人面を識別しうる頃成川、池田、平山に八夫五名で小屋を出發する。

大分岩渡りや川飛びに馴れたつもりであるが夫れでも瀧を着いたのは八時に五分前、例の岩陰に外套等重くるしい物を残して輕装して上る。一昨日來たとは知りながら岩から飛びおりた間に仲間の残した足跡を見付けても大した發見をした様にしばしは打ち見る、嵐一しきり、その嵐につれて今朝程から來そうであつた雪がどうもやつて來る、一昨日見付けた痕跡を後にし

てから斜面は益々急になるそれに今朝からの寒さ、岩の根本の枝は水晶の様な有様、蹠跟く途端に思ひきり滑り倒れ、倒れんとするを支ふる調子に力入れた杖が滑つて二度目の窮境、唯歩く事に全身の能を集める折しも死屍だと叫ぶ池田の聲、吾を忘れて乗り出す奴を、熊だ、靜かに、と制する獵師の聲に五臟六腑は轉倒せんばかりに縮みあがつて指さす方を岩陰に身をよせて見る、行手に横はる黒きもの一匹、一同硬

くなつたまゝ止つた、熊は何時迄たつても動かない、なんだか變な様子もある、折から雪の小体にすかして見れば何の事はない木の切株、一同そのポンチに失笑したもの、心の中は言はれない程亂脈をしている、雪は又強く降つて來る、傾斜は愈々角度強く川は遂に岩間に入つて前は屏風の様な山の懷、櫓はいやが上にも茂り合つて手を入れん隙間もない、と言つて他に上り口

らしい處も見當らぬ仕方なしにその櫓をわけて攀ぢる、手を離しても櫓にからんで落さない位、時々がつかりしてハンモックに乗つた様になつてほつと吐息をつく、何のその富士白山は無論の事乗鞍槍白馬を踏破した勇士、一つの奈良何かあらんと叱咤して見るが實際槍も白馬もこんなじやなかつた、やゝともすると人に後れるので馬力を出してやつとの事で灌木帯を切抜ける、難は一倍、七十度近くの斜面に木は疎、取りつかん様もなし、加ふるに高根嵐蓬々として無限の虚空より白雪を卷いて來る、四顧只徒らに暗憺、仰げども空を見ず俯せども地を見ず、身はこれ白乾坤中の一微塵、雪は目に吹き入り咽に塞り、衣袂悉く氷りて甲冑を着けたるが様、寒暖計は經驗せざりし度を示す、これではとても續くまいと思ふ矢先某君の動作が變だと思つて近よれば果然全身烈しき胴震ひ、足はだ

んぐ、疎んで行く、一同の驚き、塲處は塲處時は時、いろ／＼と搜し廻つて傾斜ゆるき處を見つけてやつとの事で火を焚く、火を焚いたが中中うまく行かぬ水筒を暖めてカンフル散を出した手が震えて飲めない、一同一生懸命となつた心の通じてかやがて震えも止んだので稍安堵してこゝで午食を始める。

始めて吾に歸えつて見たが一望唯濛々たる虚無界、聞く物は轟々たる天風ばかり、五尺の小軀堪ゆる事も出來ない、岩陰に踞して虚空を見入る、來し方は何處ぞ行手は何處ぞ、二十六日ともこんな有様で有つたらう、彼等二人は斯の如き渾沌に出會つて恐らく此邊で最後の呼吸を引きとつたのであるまいか、もしやすぐ此横に、と思ふとすまない事だが頭の先まで冷りとす

折から雪に傳はつて來た午砲の響、殆ど微であ

つたが一同の沈黙を破るに充分であつた、時はつた、迎ひであつた、一同狂喜して瀧を降る、移る動かすばなるまい、然し危険なる頂上に行けるだらうか、未だ一時間程は確かにある、而もこの吹雪又しても一同兩人と同じ運命に陥るのでは有るまいか、残念ながら歸るに如かず、其處で人夫三名を頂上に向はしめ他は踵を歸す、然し降る事も容易でない、疎なる木その一つから次へと飛びうつる瞬間、確かに心の中に生命なる叫がある、全身の能力、その一部さへ他人に貸す事を許さない、吐息つく隙さへなくつゞいて瀧の轟が聞えて來たときの嬉しさ、嬉しさは同じ池田飛び上つて笛を鳴らす、その笛持つ手をぐつと引いた成川、低音に熊だぐ、見よ瀧壺の岩かげに二匹の熊が何かして居る、一同たじたじと退る、されど恐は一瞬、人であつた、迎ひであつた、一同狂喜して瀧を降る、盛なる火が焚いてある、暖かい心が待つて居た、此處で頂上へ行つた人夫を待つ。

一時間の後三名はあさましい姿で歸へつて來た、聞けば彼れから先は愈々恐ろしい有様、歸へつて來たのが不思議な位、積雪尺餘、無論痕跡は見る事も出來ない唯一「倉谷方面搜索隊此處に達す」と記した白布を木に付けて歸えつた、それにあの人達の足では確かに頂上迄來た事は間違なく、頂上附近か若しくは稍桂方面に下がつて死んだらうと斷案を下した、此日行つた道筋の他は到底登る事は不可能なのである、かくて一同日の暮るゝを恐れて飛鳥の如く谷を降る、笛を鳴らして歸來を告げると小屋の中からT君居るかど問ふ、否君等と一處だ、何だつてと青い顔が飛び出して來る大騒ぎ、原因はこ

うである、平山、成川、T君人夫二名瀧から先發したのであつたが十間程行くとT君僕等が喰べてた山葡萄に心が残つて取りに歸えつた、先きの者は後の者と一處に來る事とどしどし降る後の者は先きへ追ひ付いたものごそんな事には氣も付かず降つた、T君は其中間で淵に落ちたが神隱に出會つたか行衛不明となつたのである、大事件！一同の顔の色はない、すると人夫小屋から僕等の着く十分程前に笛を聞いたと言ふ、すれば彼奴は近眼の上に日暮れついで小屋を通り越したのであるまいか、彼は川を降ると二俣へ出る事を知つて居る、然し降つたとすれば危険だ、途中には多くの淵がある、絶望！火の用意！搜索隊の搜索！僕と池田人夫三名で夢中で川下さして降る、砂の上を調べて見ても足跡らしい物もない、三十分降つた、彼奴の足ではこの時間には此處迄來れない、或は今頃は小家に着いて居るのであるまいかと思はれて又引き歸

す、小屋の前には憂に沈めるグループが火をかこんで居る、居たか？居ない、小屋へも來ないのだ。星一つない暗黒、搜索そのものすら大なる危険である、兎も角も腹をこしらへて大にやろう、と言つても喰べる奴もない、今夜を越えては絶望だ、淵に落ちて死んだんじやあるまいか、世俗と云ふか知れないが二人有ると三人になると云ふ事がある、あゝ僕等は明日求めなかつた死屍を擁して歸るのか、悲觀説多出、おれの責任だ、否おれの責任だ、各責任の取合をする、目標にと火はごんごん焚いて居るがこの深山、一部分も照らす事が出來ない、すぐ前の川の音さえだんご遠くなつて行き、唯悲愴なる考が夫れから夫れと走る、此時誰の名案かピストルと叫ぶ、好しと答えて空に向つて一發、一同狂喜した、氣のせいでも有るまい、微かにオーイと

したのであつたが十間程行くとT君僕等が喰べてた山葡萄に心が残つて取りに歸えつた、先きの者は後の者と一處に來る事とどしどし降る後の者は先きへ追ひ付いたものごそんな事には氣も付かず降つた、T君は其中間で淵に落ちたが神隱に出會つたか行衛不明となつたのである、大事件！一同の顔の色はない、すると人夫小屋から僕等の着く十分程前に笛を聞いたと言ふ、すれば彼奴は近眼の上に日暮れついで小屋を通り越したのであるまいか、彼は川を降ると二俣へ出る事を知つて居る、然し降つたとすれば危険だ、途中には多くの淵がある、絶望！火の用意！搜索隊の搜索！僕と池田人夫三名で夢中で川下さして降る、砂の上を調べて見ても足跡らしい物もない、三十分降つた、彼奴の足ではこの時間には此處迄來れない、或は今頃は小家に着いて居るのであるまいかと思はれて又引き歸

呼ぶ聲、一發又一發聲は確かに聞こゆる、聲を
 噎らして叫ぶ、笛を吹く、動くな！動くな！今
 行くと松火を掲げて走る。

事は前に歸えつてT君、山葡萄を二房ばかりボ
 ケットに入れて驅出したが名にしおふ足長連中
 少しの間に見えなくなつた、一本の川筋心配は
 あるまいと降つてゆく中に唯でさへ滑る處を草
 鞋を切らしたからたまらない幾度も足を滑らし
 て川に陥り全身濡鼠の有様、かて、加えて日は
 西に暮れて行く、さア分らない、見馴れぬ四面
 の有様、通り過じたのではあるまいかと又上へ
 のぼり始めたが暗さは暗らし、水音聞いては恐
 ろしくて動けない、仕方がない火を焚いて目標
 を仕ようと小枝を集めたが一つのマッチは浸れ
 てだめ、残る一つで苦勞して付けたと思ふとす
 ぐ吹き消してしまつた、絶望！もうだめだ、如
 何しよう、歩こうか、否猶危険だ、すれば迎ひ

に来るまで待つか若し來なかつたなら………
 あ、どうにかして生きたい、明日まで半死にな
 つても生きて居たなら見付けて呉れるだらう、
 衣服の濡りが肌に通る、三本の灰燼これが命と
 紙片に「Tこの奥に助を待つ」と記し、少しく山
 に登り萱を分け外套につままりて俯す、こうな
 つて來るといふ／＼の思が胸を衝いて出て來
 る、死んだ者の身上、否自分だつて數時間の中
 に同様なる境に陥るのでは有るまいか、死、死、
 想像もせざりし死よ、故郷、金澤、小家の者は
 心配して居るだらう、捜し出して呉れるだらう
 か、あ、然し今日見付けられなければあ、茂
 木肥佐多思に沈む、その折聞へた娑婆の響、
 かばと跳ね起き岩棘の分ちもなく夢中に山へか
 け登つた續いて聞ゆる二發三發、樹間にほの見
 ゆる篝の光、實に僕は踊つたと自白して居た。
 小家の處へ連れて來たがすまない／＼と泣いて



小家の中へ入らない、無理に引き入れて衣服を
 ぬがせ、一同此恐ろしき出來事の短時間ですん
 だのを喜ぶ、勿論外で一夜を明したなら如何に
 唐辛子で暖めて居たとしてもこの雪の中確かに
 硬くなつたに違あるまい、そんな事はどうでも
 い、大に祝ふ可しとミルクを暖めて笑ひこけ
 た、此間中々ボンチも交つて居る。

こゝに倉谷方面の搜索も終りをつげた、これ以
 上には到底望まれない、桂方面に降る事もこの
 天候では不可能である、始めは犀瀧迄テントを
 進めて先きへ進む豫定も有つたが身一つさへ辛
 じて行く處へ生活の道具等は思ひもよらぬ、死
 屍を見出さなければ決して歸るまいと來たので
 あるが残念ながら歸る事とした。

夜は静かに更けて行く、如何に火を焚いても寒
 い、そのはづ火の傍でさへ華氏の三十四度、頭
 に馴れたせいか川の音も聞えない時々隣り小屋

から頓狂な聲で何時だと尋ねる、實に凄愴たる
 幽谷、雪雲漸霽れて星斗青く輝く。

十一月六日

歸る日である、早朝最後の飯を食し十時小屋の
 内總べて片付く、きたなくとも一週間の住家、
 其前に一同整列、奈良ヶ岳方面に向つて三發の
 吊砲を發して別れを告ぐ、實にやるせない心地
 がする、見殺にする様な氣持がする、來年の夏
 までと心に約して進まぬ足を急遽に向ける、鳥
 帽子の絶頂からふりかえると奈良の山頂には今
 日も雪雲がかゝつて居る、薄命なる二人は吾等
 の下山を恨んで居るだらう、新なる涙が頬をつ
 たふ。

倉谷に小憩、高田一名を田中先生の處に残し桂
 隊に報告并に跡仕末を托して他は金澤に向ふ、
 辰巳近く來た頃にT君が命の親に驕る事と命の
 親共がきめたのでとしく、歩巾が延る、下辰巳

に來りし頃學友の多數が提灯を以て迎ひに來てくれた、其の人達につれられて七時近く金澤に入る、この夜同窓諸君の好意によるメツタ汗及び寮生諸君より供せられたる茶菓一同共に感謝す、終りに全校諸君の同情に對し又直接に方を添えられし成川、京極、瀧澤の三君に感謝す。

倉谷搜索隊某記す

搜索費用計算書

收入之部

肥佐多、茂木兩家出金	四三、〇〇〇
各部各年級有志義捐金	八九、二〇〇
一部二年甲組	四、二五〇
同 乙組	四、七〇〇
同 丙組	三、一五〇
同 丁組	一、五〇〇
二部三年甲組	六、六〇〇
同 乙組	四、七五〇
三部三年	四、四〇〇

同 乙組	二、七五〇
同 丙組	四、三〇〇
同 丁組	二、五〇〇
一部二年甲組	六、一五〇
三部二年	五、五五〇
同 乙組	三、二〇〇
同 丙組	六、二〇〇
同 丁組	四、五〇〇
同 乙組	六、一五〇
同 丙組	三、五〇〇
同 丁組	二、五〇〇
二部一年甲組	七、〇五〇
同 乙組	六、三〇〇
同 丙組	四、九〇〇
三部一年	四、九〇〇
職員義捐金	二〇、〇五五
學校支辨金	二六、一一五
使人夫料	一六、七五〇
郵便及電信料	二、〇六〇
藥品及苧繩等	七、三〇五

一部二年甲組	二、七五〇
同 乙組	四、三〇〇
同 丙組	一、八五〇
同 丁組	四、五〇〇
二部二年甲組	六、二〇〇
同 乙組	三、二〇〇
同 丙組	六、二〇〇
同 丁組	四、五〇〇
三部二年	五、五五〇
一部二年甲組	四、二五〇
同 乙組	六、一五〇
同 丙組	三、五〇〇
同 丁組	二、五〇〇
二部一年甲組	七、〇五〇
同 乙組	六、三〇〇
同 丙組	四、九〇〇
三部一年	四、九〇〇
職員義捐金	二〇、〇五五
學校支辨金	二六、一一五
使人夫料	一六、七五〇
郵便及電信料	二、〇六〇
藥品及苧繩等	七、三〇五

合計

支出之部

倉谷方面諸拂

使人夫料	九、四〇〇
搜索人夫料	二五、〇〇〇
宿泊料及食料品	二〇、九七六
郵便料	三六〇
雜品代	一一、一六五

桂方面諸拂

瀧車賃	一七、六〇〇
使人夫料	四、〇五〇
搜索人夫料	一四、〇〇〇
宿泊料及食料品	二七、七〇
郵便及電信料	一、三〇〇
雜品代	一五、五〇〇

寺崎良策外二名桂方面取調出張費

瀧車賃	四、八〇〇
宿泊料并食料品	二、九三〇
電信料	四〇〇
雜品代	一、一四〇

一六、三七〇

六七、九〇二

八〇、一六〇

九、二七〇

藥品代

金澤ニテ諸拂

使人夫料	三、〇二〇
食料品	一八、〇一九
雜品代	三、三〇〇

合計

一六、三七〇

右之通決算相濟ミ義捐諸君ノ厚意ヲ感謝ス

北辰會各部委員長及委員

明治四十二年六月

講話部

- 一ノニ乙 神田 外茂夫
- 二ノニ乙 及能 錠三
- 三ノニ 田宮 猛雄

演說討論部

- 一ノニ甲 高野 松太郎
- 一ノニ甲 中村 泰治
- 一ノニ丁 山口 作之助
- 一ノニ丁 畑山 四男美
- 語學部

一ノ二乙 神田 外茂夫 一ノ二丙 山田 敏一

一ノ二丙 宮森 學英 一ノ二丁 文室 重敏

二ノ二乙 及能 錠三 一ノ一甲 土井 滋治

一ノ二乙 赤間 信義 一ノ二甲 藏 重久

二ノ二甲 早上 陽清 三ノ二 森尻 麟之助

三ノ一 宗玄 順吉 一ノ二丁 帶金 悅之助

音樂部

一ノ一丙 松田 義郎 二ノ一乙 中山 安衛

三ノ二 岩倉 信珍

雜誌部

一ノ二丙 三浦 光雄 一ノ二丁 鈴木 敏也

一ノ二丁 熊谷 誠 一ノ一甲 土井 滋治

一ノ二丁 廣瀬 正男 三ノ一 宗玄 順吉

弓術部

一ノ二甲 横光 吉規 二ノ二甲 中山 千秋

二ノ一甲 關口 秀一 三ノ二 酒井 源吉

劍道部

一ノ二乙 泊 武治 一ノ二丁 文室 重敏

三ノ一 時枝 薫 三ノ三 田島 榮吉

柔道部

一ノ二乙 河田 重 一ノ二丁 高橋 岩五郎

三ノ二 古橋 仁太郎 二ノ三乙 仙波 臺五

ベースボール部

一ノ二乙 三本 英 一ノ二丁 成川 武男

一ノ一丙 齋田 十二 一ノ二丁 齋藤 陽一

ロンテニス部

一ノ二甲 神野 悦郎 一ノ二丁 加藤 仙之助

二ノ二甲 早上 陽清

フットボール部

一ノ一甲 青木 順一 一ノ一乙 松島 亮二

一ノ二乙 渡邊 滋

遠足部

一ノ二乙 守山 茂松 一ノ二丁 山口 作之助

二ノ三甲 西村 真一郎 三ノ二 日比 半彌

漕艇部

一ノ二甲 保阪 成治 一ノ一丙 木村 秀夫

二ノ二乙 高田 實 二ノ一甲 田江 武雄

三ノ二 富永 孟 三ノ一 赤谷 幸藏

右委員ヲ委囑ス

九月

副會長 今井 省三

理事 駒井 德太郎

委員 吉村 政行 藤井 鏡 山瀬 時吉

山岸 勘太郎 清水 清之

講話部委員長 河合 義文

同委員 西 英 盛岡 本 勇 岩井 武雄

演說討論部委員長 三竹 欽五郎

同委員 枝光 寅太郎

語學部委員長 高橋 郁治

同委員 宮川 熊三郎 林 並 木 八波 則吉

高橋 周而 ウォルフアート

スタインエル

アームストロング

音樂部委員長

同委員 西川 巖

雜誌部委員長

同委員 赤井 直好 大谷 正信

同委員 亦井 直好 森田 三郎

弓術部委員長

同委員 上村 茂次郎 松本 藹

劍道部委員長

同委員 山本 鬼一 宮川 義令

柔道部委員長

同委員 横山 良盛 藤森 千春

ベースボール部委員長

同委員 關 操 横川 勝善

ロンテニス部委員長

同委員 松本 慶昭 手下 宗次郎

スベイト

水芦 幾次郎

石倉 小三郎

浦井 鑑一郎

岩城 準太郎

中野 嘉作

上原 菊之助

雪山 俊夫

塩釜 正吉

市村 塘

フットボール部委員長

小林平藏

篠原一慶

同委員大野平作 小谷仁十郎

演說討論部委員ヲ解囑ス

遠足部委員長

林並木 十月十三日

同委員星野信之 山田喜久良

岩井武雄

漕艇部委員長

田中鉄吉

理事ヲ委囑ス

同委員小田切良太郎 重光 蔭

山瀬時吉

明治四十二年度代議員左ノ如シ

安田安

右委囑ス

九月二十七日

一ノ三甲 古田正武

一ノ三乙 赤間信義

大谷正信

一ノ三丙 三浦光雄

森田三郎

一ノ三甲 早上陽清

篠原一慶

一ノ三乙 山田國廣

清水清之

一ノ二甲 土井滋治

楠正路

一ノ二丁 文室重敏

中川諭

一ノ二乙 倉知行禮

嘉一

一ノ二甲 松原直次郎

伊東 茂

一ノ二乙 清水武雄

野崎 朋近

一ノ二丙 河瀬 嘉一

吉田 常次郎

一ノ二甲 新木 榮吉

高島 要次郎

一ノ二乙 伊東 茂

明治四十一年度北辰會費決定計算書

△印ハ朱

科 目 區 分	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘 額
第一款 經常收入	一、七六〇〇〇	一、八二六〇〇	〇	〇	△三六〇〇
第一項 特別會員寄付	二八〇〇〇	二八〇〇〇	〇	〇	〇
第二項 通常會員會費	一、四四八〇〇	一、四四八〇〇	〇	〇	〇
第三項 預金 利子	四〇〇〇	六五二〇	〇	〇	△二六二〇
第四項 春季運動會乘艇申込料	二〇〇〇	一〇三〇	〇	〇	△一七〇〇
第五項 雜 收 入	〇	一〇〇〇〇	〇	〇	△一〇〇〇〇
收入 合計	一、七六〇〇〇	一、八二六〇〇	〇	〇	△三六〇〇
第一款 經常支出	一、五七〇〇〇	一、五四二一〇	五七八七〇	△二六四一〇	△六〇三五〇
第一項 講話部費	二五〇〇	一〇〇〇	〇	〇	〇五〇〇
第二項 演說討論部費	七二〇〇	七〇六五	〇	〇	〇〇三五
第三項 語學部費	一八五五〇	六八八〇	〇	〇	一二六七〇
第四項 音樂部費	三七八〇〇	三四三四〇	〇	△二九〇〇	〇五八〇
第五項 雜誌部費	四八四〇〇	三九五九〇	〇	〇	一三四一〇
第六項 弓術部費	三六五〇〇	四五五五	七〇七〇	〇	〇〇〇五
第七項 劍道部費	九二四六〇	九三九二〇	二五三〇	〇	二〇七〇
第八項 柔道部費	九〇〇〇〇	八九七八五	二五三〇	〇	二七四五

雜報

百五十三

第九項	ベイズボール部費	一七三〇〇〇	一七三四六〇	〇四六〇	〇
第十項	ロンテニス部費	一四九三九〇	一四七七五五	〇	〇四六〇
第十項	フットボール部費	八五〇〇	八〇八〇	〇	〇〇九五
第十一項	遠足部費	三七一〇〇	三九九四五	〇	〇四二〇
第十二項	漕艇部費	一四九八〇〇	一九〇四五〇	四一四〇〇	〇〇五五
第十三項	春季運動會費	一一〇〇〇〇	一一〇九八〇	〇九八〇	〇七五〇
第十四項	秋季運動會費	一九〇〇〇〇	一七三〇〇〇	〇	〇一〇〇〇
第十五項	秋季運動會費	三九〇〇〇	二八九五	〇	一八〇三五
第十六項	豫備費	九〇〇〇〇	〇	〇	五八五四〇
第十七項	端艇新造基金	一一〇〇〇〇	一一〇〇〇〇	〇	〇
支 出	合計	一、七八〇〇〇〇	一、六六三二〇〇	五七六七〇	一、七八七〇
				△ 五七六七〇	一、八八九〇

寄贈書籍

三宅雄次郎 宇宙
 日野 強 伊豫紀行
 加藤 咄 堂 修養論
 マクフェルソン エ センチュリイ ヲフ ポ
 リチカル デペローアメント イグゼン 建築師
 チェペリン デル フルネ オステン 同 蘇生ノ日
 オ ケ ー パリ エンドイツツ スト
 リイ
 ベリタス ゼルマン エンバイア ヲフ
 ツデー
 以上故平田教授紀念書トシテ有志者ヨリ寄贈

トルストイ 戦争ト平和第一卷

奥田 竹 松 佛蘭西革命史

國木田 獨歩 欺カザルノ記

右故獨法科卒業生宮崎四方治紀念ノタメ有志者

ヨリ寄贈(代表者尾佐竹堅)

和田垣 謙三 青年諸君

水野 鍊太郎 他山ノ石

戸水 寛人 德育ト智力

大町 桂月 源氏ト平氏

右新入生歡迎會剩餘金ヲ以テ寄贈(代表者赤間

信義)

寄贈雜誌

同窓會雜誌 二四號

球 陽 一八號

無 盡 燈 每號

校友會雜誌 每號

愛知醫專同窓會

沖繩中學學友會

無 盡 燈 社 七

第一高等校同會

校友會雜誌 三〇號

校友會雜誌 三七號

校友會雜誌 七號

校友會雜誌 一九號

同窓會雜誌 六號

校友會雜誌 一九號

校友會雜誌 七號

校友會雜誌 三〇號

嶽水會雜誌 每號

龍南會雜誌 每號

校友會雜誌 每號

學友會雜誌 每號

養 德 每號

保惠會雜誌 每號

六合雜誌 每號

六條學報 每號

同文會報告 每號

同窓會雜誌 六號

校友會雜誌 一九號

校友會雜誌 七號

校友會雜誌 三七號

校友會雜誌 三〇號

校友會雜誌 九七號

生 一六號

第三高等校同會

第五高等校同會

第六高等校同會

第七高等校同會

養 德 社

松山中學保惠會

弘 道 會

佛教大學壬寅會

東亞同文會

錦城中學同窓會

東京高師校友會

金澤商業校友會

三重一中校友會

千葉中學校友會

中學明善校同會

杵築中學校友會

第二高等校同會

六 稜 三三號 北野中學校友會

和同會雜誌 四五號 長岡中學校同會

十全會雜誌 五四號 金澤醫專校同會

水曜會誌 每號 京都理工科大學

桐陰會雜誌 四三號 東京高師附中校

校友會雜誌 五〇號 開成中學校友會

輔仁會雜誌 七八號 學習院輔仁會

華陽雜誌 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會

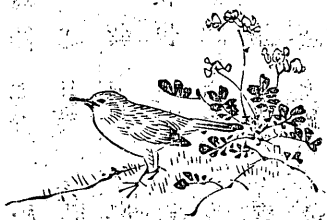
又 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會

又 陽旭七號 岐草中學華陽會



附 錄

阿部秋雨追悼錄

の葉書が達した。いづれも同情の涙で濕つて居た。如何に同窓間に望を囁かれて居られたか、わかる。返すくも残念な事であつた。

阿部眞見君を悼む

赤井直好

回顧すれば、一昨年の秋なりき、余が任に當地に来るや、一日君一友と、余が廬を叩きて、閑談數刻、やがて余に乞ふに、校課の餘、古文を講せむことを以てせられぬ、余因て其請を容れ、爾後毎週一回、或は南華を講し、或は葩經を説きしに、君同好の士と、共に來りて講筵に列し、傾聽潛念、齊しく古意を味ひ、講果て、後は、苦茗一椀、雅談に時を移し、談益々深うして、興益々高さを常とせしが、今茲七月一夕、君親しく余を訪ひて、從來の情誼を謝し、且つ別を叙し、因て其心事を攄ふると詳かなりき、當時余は君が心事を諒としたれども、容易く君に許さるものありしは、蓋し憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず、抑へて而して抑ふる能はざるに至りて、後發せしめむと欲せしによれり、而して何ぞ時月を経ずして、忽ち幽明境を異にするを思はむや、今にして之を懷へば、恍として夢の如く、君が音容髣髴として、猶余が机邊にあるを覺ゆ、君既に逝きて數日、君が遺稿を驗せしに、中に論語中庸大學等の抄本あり、舉世滔々、軟文字に心酔し、また聖經を誦するものなきの時に當りて、向には余に就て親しく講説を聽き、家にありては自ら古經を謄寫す、君が心事のゆかしかりし以て見るべし、君俳句を善くし、之を好むと甚だし

かりき、蓋し生涯のはかりごと、なし、ものならむ、而して別に古文を研鑽する此の如くなし、所以のものは、顧ふに蕉翁が所謂心法の根柢を養はむと欲せしものならむか、あはれ萬斛の詩材を抱きて、未だ之を世に展ふるに至らず、轆轤零丁、屢々蹶きて自ら慰むる所を知らず、而して一朝此不慮の災に逢へり、何物の恨事かこれに過ぎんや、一夜北風凄々として、寒月窓に入る、獨机に凭りて、往事を追懐すれば、無限の愁思、胸裡に滿つるものあり、嗚呼余が君を惜む所以のものは、豈啻に師友の情に於てのみならむや、抑また我が國文學の爲に之を惜む所以なり、悲いかな、

あきさめの記

尾張師崎の客舎にて 與 住 愛 三

阿部の假葬式を一高の横の西教寺で行つた時に、仲の兄上の教子であり阿部の同窓である上州の太田の中學出身の人々も多勢來られて、何かと世話をして下さつた、式が終ると兄上も會葬の人々も散り／＼に返つてしまつて後に残つた吾々の仲間と太田中學出の方々が此の後の相談等をしたときに、故人の追懷談が出た、其時吾々の仲間が逸話を一二語る、太田出の人々は大笑に驚て居られた、阿部は太田中學時代は非常に温なしくて殆んど存在を認められぬ位であ

つたそ、これは一つは兄上と同じ學校に教職を奉じて居られたが爲であるのには相違ないが、阿部があつた天眞な性狀を遺憾なく發現したのはたしかに高等學校時代だ、だから其の方面に最も詳しかるべき吾々、阿部に最も親しかつたものは其の方面の事を書くのが最も適切であるのは知つて居る、然し自分にはそれが出來ん事情がある。阿部があつた様にして死んだ後に色部兄が、大變に之れを悲しんで同じ下宿に居て救へなかつたのは、全く自分が殺したやうなものだ、燒香の折毎に正体もなく泣き／＼すれられたのを見て最も苦しかつたのは僕だ、全く阿部を殺したのは僕だ、僕さへ病氣にならず僕さへ呼ばなかつたら阿部は東京へ死

に來るのでは無かつたと思ふさ、毎日一日として阿部にすまんと思ふ心の起らん折は無い。なくなつた折にも吾々の仲間は、常であれば奥住貴様が殺したのだと責めてくれたのに違ひないのに、僕が病氣である爲めにそれも云はず却つて僕の爲めに云ひ譯を作つてくれるのを聞く度に、僕は實に一層悲しく悔しくなつた、今となつては、せめてもこの詫に僕が阿部を呼んだ以來東京で非業に殺した迄の顛末を書きのこして、第一は遺族の方々又朋友一同殊に吾々の仲間と此所で懺悔をし、詫をする事にする。文中、皆僕の私事に關係してゐるのは以上の通りの譯であるから、恕としてよんでくれ玉へ

僕が東京へ來てから筆不性な仲間の連中からはめつたに手紙を寄こさん、野球の消息を成川からよこしてくれるのと芳野から文通があるだけで、其他には阿部から時々手紙をよこしてくれただ、然し度数は少ないが、例の通り趣味の深い感じの快い手紙で受取る度に、返事は忘れぬ様に申し／＼して居た、今年の五月頃から僕は例の試験で忙しくなる、仲間の連中からは阿部が代表して激勵の手紙をよこしてくれて、約束の太

學だぞと終りが結んであつた、そのときは勿論自分とても決して不眞面目では無かつたつもりで今から思へば廻り／＼い努力をして居た、試験がすめば阿部へも返事も出来るし面白い通信も種がウンとあるからと思つてやつて居た。六月の試験は僕の爲めには決してよくは無かつた、中途でやめたとき自分は心からなまけになつて、阿部と京極に宛て其の旨を云ひ送つて其の時もそちらの様子は聞いてやつた。その返事もまだ來ん廿二日に僕は突然重患に陥つてしまつた、醫者の禁を破つて僕は其の旨を金澤の仲間へ知らせた、其の返事は阿部が代筆ですぐによこしてくれた、文面は長い／＼ものであつた、切りに静養を勧め、京極も自分も此度の試験に通過は絶望、岡田も駄目と云ふて來たが餘裕のあつた男だから決して泣言では無かつたが、いつになく眞面目一方の手紙であつた、

僕は此の手紙を讀んだとき今年も又吾々の仲間命の神にいらまれて居たのだ。僕はこの顛末が駄目かと思つて思はずためいきをした、然し京極と阿部は屹度そんな事もあるまいとまづ安心して居つた、其の中に芳野が金澤から返つて来る色々様子を聞くとどうも怪しいと云ふ、自分は大に心配になつて、四日と五日に阿部へをつづり、手紙を出した、するとひさちがひに駄目であつたと云ふ報知が或處から有る、七日には京極と芳野が来て事は明らかになつたが自分の落膽と心痛とは却つてひどくなつてしまつた、阿部と京極には愈々今年は九月逢へると思つて居たのでそればかりたのしみにして自分の病もいくらか國へは軽く知らせて八月中は東京に居て、卒業した二人に逢つて、國へ返るつもりだつたのだ。京極は僕の病を氣にしてか大に樂觀した様な顔をして例の通り愉快に談じて居たが、僕は此の時から最早阿部を殺すやうな運

命の神にいらまれて居たのだ。僕はこの顛末が分かると同時に心配と氣の毒との内にも何とかして阿部の苦痛を負擔する方法も無いかと苦心して見た、何しろ寐て居て何事も出来ずとも、如何うにか出来ぬものかと思つて、翌日早速手紙を出してどうする考かと聞き合せ、國へ歸る前に上州の兄上に相談して居たのだから、何事も推しても、東上しろ、何事も其上の方が味く片付くと思ふと云ふようにすゝめてやつた、今になつて思へば此の手紙さへやらなければ阿部もあんな死に方も仕なくてもよかつたのだ、又僕も今日の悔はあるまいと思ふと、つらつら情なくなる。然し其頃には是非とも阿部を東上させたかつたのは、決して僕自身に逢ひたかつた爲ばかりでなかつたのは、地下の友も知つて居てくれるだろう、殊に吾々の仲間では阿部位色

色の事を他人に話さん男は無いからどうも様子が分らん、あの時分の様な差し迫つた場合にも、如何したものか僕自身には分らなかつたから、是非東の方へ來さして相談した方が得策と思はれた、四國の故郷へ歸すのはあの場合阿部の前途を絶望にするのだと固く信じたのが僕の誤りであつた、阿部も決して早計な事をする男では無かつた、又事の明らかになつてから數日の間には阿部もよく考へた事であつた事と思ふから、あの時に僕が東京へ呼んだのは今から靜に思つて見れば全く僕自身に逢ひたかつた爲だと云はれても今更云譯は無い、しかし最も氣になつたのは、中途に學業を廢する様な破目になりはしないかと云ふ心配であつた、それが萬事を支配した。僕の考と云ふ奴も阿部の考も遂には阿部の運命も皆これに支配されたのだ。そして今日に僕の苦痛をのこしたのだ。

此の意味で阿部は學業の爲めに倒れたのだと云へると思ふ。

七月の十七日は好天氣であつた、午前芳野が見舞に來てくれて正午頃まで阿部の事等も繰り返し、噂して居ると、丁度十一時半過頃、下から阿部さんと云ふ方がお出になりましたと云て來た。二人はしたたか驚かされた、來るにしても前に手紙位はよこしそうなものだと思つて居たからであつた、例の通り右手にハンカチーフを持つて、汗をふきつゝ上つて來た。阿部は別に平日と異らなかつた、小さい荷物をもつて居た、僕との挨拶は別としても芳野との挨拶は別れてから半月位であるのに妙に四角ばつて居た様に覺て居る、話は去年以來の彼我の消息やら學校の様子やら又急に飛んで新橋から人力車に乗つた處が、電車にばかり沿つて來て馬鹿げて居たことや、此度の上洛第二件の話やら、

つちや返して語り合つたが、最近の事件に關し、ときに僕が阿部に今晚は此處で宿れと云ふた
ては餘り語るのを欲しない様子で、これは阿部 十二時過ても歸つて來んから色部君にひき留め
の平生からの流義で最も親しい芳野の前！で話 られたなど思つて居ると一時頃それでも正直に
せん理由は無いが、只相手が二人である云ふ 歸つて來た、蚊帳を釣る頃で餘儀なく僕と同じ
ことがはなし悪くい理由らしかつた、心中に色 部屋に寐た。此度の弱り話も出たが晝の間より
色と此度の困つた事についての感慨の往來する は一層元氣も出て、切りに金澤の嘶をした、繞
のを抑へて語つて居る様子はありありと分つた 石先生の噂からヘルン先生の話やら、狂言の事
けれども、強て愉快らしく装ふと云ふほどにし やらそれからそれとはなしふけて、遂に三時
よげ返つても居なかつた。暫して芳野と二人で 過になつて看護婦に注意せられたので寐た始末
錢湯へ行つた、歸つてから東京の錢湯の氣持の だつた。翌日が十八日で、朝早く二人で大學の
好いのを切りに寝て居たが、自分には阿部がこ 構内へ散歩に行つた其の折も、御殿の邊の景色が
んな場合にもあらゆる方面に興味性の發展して 好いと云ふて、長い間池の周圍を廻りつゝ、色々
居る例として、今にも記憶して居る。其の手眞 な話をしたが阿部は例の通り文藝上の觀察とで
似をしたが、金澤の湯を罵る様子は、今でも眼 も云ふ様な嘶でもちきつて何事にも屹度好きと
に浮ぶ様だ、其の晩色部君が見舞に來てくれた 嫌とを作つて居た、故人の性格の明らかに分か
折、偶然阿部と逢つたものだから是非君の下宿 る側であるけれども、差支もあるから内容は止
へ來てくれと云ふので引つぱつて行かれた、出 めにする。しかしこれが阿部の尊敬すべき特徴

でもあり又文學者に生れた男だと云ふ感もこれ と云ふ意見だつた。十時頃に阿部と成川は出か
が大に助けて居ると思ふ、唯餘り口外はしなな けた、阿部は舊師である教育界の主筆會根氏を
つた、あの通り温順な男だから他人の前で其人 訪問して上州へ行く都合だつた、上州から二度
の説に眞正面に反對する様な事はせぬ様だつた 手紙が來た。

から、一般の人は知るまいが、自分一個として 七月の廿八日に僕は太森へ轉宅した廿九日に阿
内面の主義とか好尚とか趣味とか云ふ事は、實 部は東京へ來たと云ふ手紙をよこした、その折
にはつきりとして居た男だと思ふ、宿へ歸つて に色部君も居るし本郷でもあるしと云ふてあの
見ると成川が來て居て、僕と二人で文科へ轉る 千歲館へ宿をとつたのであつた、そして其處が
様に勧めた、これは吾々の仲間一般の意向で 自分の死所とならうとは夢にも思はなかつたら
あつたと思ふ、阿部も僕等二人乃至一同の意見 ふ、其後僕が東京へ出て訪問したときにも少し
も諒としたらしく、上州の兄上に面晤の上、是 狭いが都合はいゝよと、云ふて居たが全く死に
非其の様にすると云つた、最も困つたは高等學 校へ這入つたとはどうして思はれよう。

方が無いとすれば權道を通るもよからう、こと 七月の卅日に東京から手紙が着いた、千歲館が
に専門が専門の事であるから屈して法科に向ふ 拜啓 追々快方と聞いて安心して居るが變り
爲めに、高等學校を卒業する苦みをのまして、 はないか、小生廿八日入京、僅か一日のこと
あの様な男の心を、傷けるのは最も執らぬ處だ だ 拜啓を得ざりしは遺憾、實は出京の途中に

小林(愛次郎君、埼玉縣の奈良村と云ふ處)の所を訪ふて久し振りの快談に二泊もして居たものだから、斯の始末となつたのである、焼け跡の住むばかり哀れなものはない、現在小林が起居して居る家は天井もない四疊敷と納屋、荒壁に窓といふも形ばかりの竹うち添へし格子窓、芝居で見る堀川の傳兵衛が住家といふをそのまゝに、しかもそれは尙ほ人の住むにつくりし家、これは昔の麥搗小舎である。昼は蟻、夜は蚤を蚊を襲ひきてといふ丸つきり「文覺荒行の事」のくだりそのまゝ、だが「宮も藁屋も、はてしなればどむかしのおやぢの言科ぢやないが、世の中はどてもかくてもありぬべしと超然と悟り込んで居るやうに、健氣にいふてはゐるものゝ、晝は馴れない田草取、疲れ切つた体をやすめるのが此處かと思ふと氣の毒とも可愛想とも云ひや

うがない、二晩枕を並べて茲に寐た。一晚はどうく話して夜を明かしてしまつた。これまでは吾々同人の中でも小林は最も不仕合な随一であるも吾もいつてゐたが、今は決してそうでない、恐らく二番幸福な平安なくらしをしてゐるものは小林であらうと思はれる、自分自身にもさう云つてゐる、僕は小林のこの覺悟を多とし善良な品格のあるお百姓様一人を得たのを以て中心の喜びとするのである、小林の家では洋燈をつかはない、古色蒼然たる行燈にしだり尾のながながし尾の燈心は、容易に見られぬ、クラシク趣味である、灯かきたてくうち腹這ふてオンゼイヤ「文學評論」をひもどいてゐる所は、振事劇「初夢」以上の奇觀である珍趣向である。大森の新居は風が涼しくて快心の住居ださうだね、そのうち是非一度訪ねて語り度いと思

つてゐる、僕は一先づ茲に落付くつもり去年の九月に小室が初めて這入つたといふ三階の一室に陣をかまへた。大學の願書は色部君を煩して出して置いた、受附けた以上は多分許可するだろうと思ふ、若しその方がだめとなるにしても此地は去らない積り、何にしても従來のやり方をすつかり一新して根限り勉強してみやうと思ふ、悟るや遅しと雖もなほ止むにまされるならんと思ふ、昨今の模様では東京も僕等にとりては思つた程凌ぎ難い暑さでも無い、宛として法樂村の椋十君、電車にのればまごつくし、皆目方角がわからないのでこれに閉口するこゝ一方ならずである

.....略

七月三十日午後の暑い盛り

マ ス ミ

新しい途に上つて新しい努力をする積りであつ

たことは其後の様子に照しても明らかで、これ位東京の生活をたのしんで居たかも文中に明らかである、千歳館の室のことを書き小林の火事に逢つた様子を書いて遂に其の同じ運命に陥つて、其の哀れんだ小林の爲めに骨を拾つてもらふ様になるのを知らなかつたんだ、地下では何と思つて居るやら僕はこの手紙を見る度に涙の下らぬ折は無い。此の後十三日に手紙をよこし、其の前後にも「行きたいけれども」と何度も手紙をくれた、十三日のは

さても其後さるほどに頓と御無沙汰して申譯が無い、十二日付細書唯今拜見した、病氣の方は必らずや追而快方と思ふてゐる、いや必らずさうあるべきを祈つてゐる、病氣は決して悔るべきものでないと同時に決して恐るべきものではない、妙な論法ではあるけれども、眞は此不即不離の葛藤の裡に存在してゐると

思ふ、無論君が病の爲めに壓服されやうとは君が平生の性情を知悉してゐる僕には信じられない、こんなことをいふのは愚だと笑ふかもしれない、笑ふべくんば共に大に哄笑し、泣く可くんば共に大に泣かう、君は心細さを感じるかと云ふた、白晝の寂寥を感じると云ふた、僕は非常に此語にうたれた、君が今日の中心の聲はこれであつたのだと思ふと、何ともいはれぬ感じがする、嘗ては同じ宣告を受けたことのある僕には、別して君の這般の心中が察せらるゝ殊に況んや、

自分は此地に生れたのぢやない
何といふ淋しい詞だらう、僕は殆んど涙なしに此數行を看過するを得なかつた、然し今は斷じて泣くべき時ぢやない、郷土の地をはなれ、混弟相隔て、病んで起つ能はず、此時しづかに當來の茫莫たるを想ふて、云ひ知れぬ

感に打たれるのはそりやむりも無い。けれど未だ嘗つて君の口からかういふことを聞かうとは豫想してゐなかつた、病には誰しも威壓を感じて弱くなるのが常ではあるけれども、此所だ、須らく「我に負廓の田、二頃あらしめば……」の概を以つて打勝つて行つて貰ひたい、僕の見る所、聞いた所によるも君の健康が今年を出でずして恢復すべきは殆んど疑を容るべき餘地もないと確信してゐる、多々益々自愛自重して病に對して健闘して貰ひたい。

都をはなれての田舎住居、語るに友も乏しく永日の無聊をなぐさめかねることもあるだらうと思ふ、僕も今はしばらく定つた仕事があると云ふでもなし、出來得るならば毎日でも行つて、聊なりとも無聊を慰めたいと思はぬぢやいけれども………(略)

一時は絶望してしまつた、僕の身の振方もあらまし落着いたやうだ、大体のことは成川から聞いたとあれば茲には更めていふまい何れ詳しく話す折もあろう兎も角も少し眞面目にやつて見る彼是と餘計なことに心配をかけてすまなかつたが、もう安心してくれ。

上總の方へ行つて居た内田が先達で歸國の途中に訪ねて來てね、その時のとさ若竹をピジットしたのは、併し甚だ以つて振はない性質の者ばかりであつた、出る奴も出る奴も代り合つて代りばえのしない山家育ちの鹿には縁の遠い馬面ばかり、稍振つてたのは松井源水の獨樂の一曲、それも源水差支とあつて拙者は大元帥でござる、果然その一擧手一投足のすばらしく勇敢なる古への孟賁も三舎の者である、孟賁で思ひ出した此間の國民に出て居た破凡君と例の仙臺の勇敢なるオツさんの會

見は、とんだロマンチックな一幕だつたね。此間の常盤木クラブの研究會へ行くことが出來なくて残念した、今月中はもうないそうだが、當分は聞けないね、落語以外のものは聞きたくない。

悪いことは出來ないものだね、淺草の種までスッカリアがあつてゐるんだね
どうも通信機關が発達しすぎてゐて困る、全く面喰ふね此間も内田から散々油をしばらくた、ほら例の君の所から成川と二人で出掛けたその時に、電車の乗り方を聞いたといふ一件だね、併し安心してくれ今ぢやもう大丈夫、但し夜間は此限にあらすかもしれない。兩國の川開きを見た随分他愛もないものだね、此家で船を一艘出すから行かないかといふので、色部さんも出掛けた、何の事は無い兩國の上流と下流とに船の市街が出來たわけだね、

花火よりは近所の船で陽氣に馬鹿騒ぎをやつてゐるのを見ての方がよつほどおもしろかつた、歌ふものは、弾くものは、叩くものは、踊る者は、女は殆んど交つて居ない、就中田紳のノンキ連と標榜して五六人交代でカッポレか何かやつて居たのなどは大に異彩を放つてた、舷々相摩する所のさわぎでなく、神田川の口を封鎖すること約二時間、此間に近くの船と船とで喧嘩が持上りかゝつた、けれども目に物見ないうちに濟んでしまつた、つまりなかつた、歸つたら一時。西瓜の食ひかけのやうな月が一高の時計臺の上にかゝつて居る。をこゝひ茶目が来て谷中の塔を夕方見に行つた、あの塔は氣に入つた、高橋お傳の墓を見た、動物園のアフエ君をビジットしたのものだと思つてゐる。

茶目公は毎日本山の所へ獨逸を勉強しに行つ

てるさうだ、早稻田の方はまだ分らないといふことだ。

内田は目下歸國中、來月初旬に出てくるだらう理科の地質科へ來ることになつて居る。これ位で攔筆することにしやう、秋立つてよゝりしばらく氣候不順の時だ自愛自重せられんことを望む。

八月十三日夜

眞 見

人は餘り知らないが、阿部は僕と同じ様な病に罹つた事があるそうで、最も同情して居てくれた、この手紙をよむ頃は自分は病の爲めに非常な精神上的の打撃を受けて居たときで、今更随分意氣地のなかつた事が恥しいが阿部がこう云ふ同情に満ちた手紙をくれたときは、實にうれしかつた、且このため大に氣をひきたてたのも事實だ、後段に到つて僕のすきそうないたら書をしてよこしたのもうれしかつた、衷心から僕

の病を心配して居てくれたのは仲間のもの皆であるけれども、こんな忠告をしてくれた阿部一人だけは僕より先になつて僕が今いくらかよくなつても手紙を書き得るに至つても文通も出来る國へ行つて了つた、そしてそれが自分の爲であると思ふと心からすまんと思はれて寐れぬ折もある、文中に泣く可くんば共に大いに泣かうとあるのは決して修飾の文字では無い、阿部にも苦痛は随分あつた泣きたくても泣けん様な境涯だつたことは僕には、はつきり分つて居たつもりだ、兩國の花火のことは阿部の最後の句作の日として記憶すべきだと思ふ、句は

繪空事と見しが名所の花火哉

といふのだ

* * * * *

初めて大森へ來たのが八月の十五日に芳野と成川と三人で午後から來たときだ、丁度大花火の

あるときで僕も工合のいゝ日であつたし、人數でもあつたから四人で散々にはなした、家の庭から花火を見ては一々採點等をした様に覺て居る、其の翌日端書が來た非常に面白い文面であるけれども四方へ障るから止めにする。

その次に來たのは八月の廿五日の午前以來とさで、何となくもぢもぢして居たが遂に思ひ切つたらしく、氣に留めるなくと云ひつゝ、藤盛が發病したことを語つた、東京の友達一同でこれは僕に云はん方がいゝ、だろうといふ筈だつたそうだが、分かつてから怒るからといふので、阿部がいやな役目にあつたのだつた。午後になつて茅ヶ崎へ藤盛を送つて行つた、佐藤も來て其晩まで話し合ひ一まづ歸つたが翌朝二人連で改めて來た、佐藤は試験に追はれて歸つたが阿部は遂に月末まで僕の家へ居てくれて一所に東京へ歸つたのだ、此の六日間は發病以來最も

うれしかつた日だ、阿部と二人で何やらかや話し暮した佐藤の居るときに近所の小供が遊びに来て眼鏡を掛けた妙な顔を書いて僕の似面だと云ふたので、阿部が書いた句が、

蟬とんば蝶にかもにて面白し

といふのだつた。

漸はどりとめも無くて覺えても居ないが、實に多方面なものだつた、僕の云ふまゝに、つまりん方面までの代筆の手紙を一日かゝりて書てくれたこともあつた、阿部は一体綿密な男で、讀んだもの等は實に詳しく記憶して居たから、とんでも無い事まで覺えて居てはなす男だつた、又朗讀も甘かつた、おてんば娘日記を讀んできかしてくれたり、近所の貸本屋で講談等を借りて來ては讀んで聞かしてくれりと、半日でも一日でもぶつ續けで（自分にもこんなことをするのが好きであつたには相違ないが）實際よく僕

の寂しいのを察して笑はしたりまぎらしたりさせる爲めに、盡してくれただので思ひ出しては感謝もし、又こんな友のなくなつたのが惜しくてならん、或日は松山すしをつけて食はせるといふので一日かゝつて僕の雇婆を困らして、出來たのをもつて來るのに、狂言がゝりでもう常にふざけて居た、そして其日の晩から婆さんが病氣になつたので阿部は大變に心配して醫者を呼んだり、藥を買つたりした、翌日は益々悪くなつて家へ電報を打つやら何から何まで阿部一人でやつてくれた、それが八月の三十一日である、急に僕は東京へ返ることになつて又阿部が後始末をしてくれて東京へ一所に歸つてくれた、それから八日後に遂にあんな事になつたので、其間僕は佐藤の家に厄介になつて居たが阿部の下宿とは一町位で、阿部も下宿に居るのは寐る間ばかり、毎日朝から詰めきつて、僕の相

手になつて不相變話もし本も讀んでくれた今から思つて見ればよくあんなにしてくれたと思ふ位で、殺してしまつて禮も云へないが誠にやるせない思がしてならぬ。時々はすきな落語の寄席へ位行つたので丁度六日の晩下谷の鈴木席へ行つて翌日來たときに妙に沈んで居るから皆してどうしたのかと聞くと別段のことも無いと云ひ、話はどうだつたと聞くことまらなかつたと云ひつゝ、「あくびの稽古」と云ふ話を真似して、それでも元氣を回復して歸つた。其夕方に僕は暫で散歩に出られたから欣んで歸りかけると本郷の通りで阿部がいつもの通りに、うつむき加減にやつて來るのに遇つた、そこへ行くと云ふと散歩だと云ふそして笑つて居るから僕は昨夜面白くなかつたからうめ合はせに行くなど云ふと、全くだと云ふ、それで僕と一所に行つた、佐藤をひつぱつて行つたがこれが遇ひ仕舞だつ

た、それから六七時間目にはもう此世には居なかつたのだ。其夜僕は佐藤の歸つたのを知らずに、寐て居たが火事だと云て呼び起された、出て見ると方角は阿部の宿だ、色部君も居るし取敢ず行つてくれと云ふので、佐藤がかけつけたが、非常線が張つてあつてだめと云ふて返つて來る、しかしたしかに千歳館だと云ふ暫くして又行つた、少し待つて居ると色部君と佐藤と二人でかけ込んで來て、阿部は來んかと云ふ、來んといふ瞬間に僕等三人はしまつたと思つた、外へ行く處も無し無事に避難すれば其頃までに是非來なければならなかつたのだ。それでも消防夫の語をあてにして、又待つて居る、二人は又出て行く九時頃だつたと思ふ、佐藤は返つて來るなりどつさり上り口に倒れてしまつた。これからはもう僕は書くことが出來ん、佐藤と二人で上州の兄上や、小林に打電もし、芳野や岡

田も呼びよせたが皆夢中だった。只不思議に金 なるは何と云つても仕方ないが、地下の友に澤以來ここに仲のよかつた連中が期せずして皆 は勿論御老母御兄弟初め友達一同に深く僕の罪あつまつて、あの葬儀に列する様になつたのは、を謝するしにこれを書いて遺すこととする。誠に不思議で朋友一同の爲めには、せめてもの

(十一月二十四日)

んなにのこりをしかつたであろう、せめて遺体

神田外茂夫

なりとも見せたかつた、これを思ふに付けても

蠟涙や凍て流麗の遺句に似る

僕の罪の深いのを思ふ、僕はこんなにして、手を

六朝の書や見る句稿冬の部に

下さすに朋友、ことに最も親しかつた三年來最

校正に歸郷記悲し雁啼く夜

も世話にもなつた友達を殺してしまつた。今と

逝く秋や劇評神に入る日記

阿部 さん

成 川 武 男

風や故人かやうの夢寒し

亂れた雲が空に飛ぶ。物淋しい雨脚が灰白い潦を門に作る。かくて金澤は明け金澤は暮れる。

阿部さんが歿くなつて早や二月になる、ありし日の友も今は散りぢりになる、かくて明けかくて暮るゝ金澤に僕は徒らに追懐の思をやる。

阿部さんは伊豫の松山の生れであつた、松山と云へば蒸氣で瀬戸内海を四國へ渡つて金比羅詣りに行く方であらう。眼を閉ぢると日當りの好い太平な村や町が彷彿される、どうしても阿部さんの様な人の生れる處ではない、阿部さんの生れる處は六十余州の憂さと笑を只一春につき潰したお江戸でなくてはならぬ、お江戸も檜物町あたりの椽に釣り葱の揺らぐ御坐敷で秋雨の徒然に音締めを音を物うくも聞き乍ら生れる人であつた。僕は神田で生れて加ふるに漁河岸へ里つ子にやられた、僕の單純な頭には、之れを以て僕の誇るべき歴史の一頁として居る。従つて阿部さんの様な人は大好だつた、高等學校は思つたよりも意氣地がないものであつた、不平滿々たる僕には千里の外、異境に漂浪して母國の志士に逢つたよりも嬉しかつた。

江戸。子は損な性質を持つ、従つて江戸子に好かれた阿部さんも損な性質を持つて居た、阿部さんは學校で落第した、然しこれが益々阿部さんの本領を發揮したものである、阿部さんが學校に囚はれて仕舞はない意地を持つて居たのを大に證據だてゝ居る、阿部さんは獨乙語の讀本の代りに一茶の句を暗誦した、阿部さん見たいな人は御利巧揃の今の世に金の草鞋で搜したつて見付かるものでない、時代思潮に誘はれず自己の本領を發見したものは偉人である、阿部さんは優しい偉人であつた。

阿部さんはよく現代の趣味の凡俗なのを痛嘆した、阿部さんは文藝上に創作をやらうと思つて居た、だから高等學校の文科へ這入つた、大學では國文を專修するんだと云つて居た。

北陸の俳壇は紫影先生によつて開かれた、阿部さんは一躍して一方の雄將となつた、四高俳句

界は阿部さんによつて牛耳られて居た、併し俳句が阿部さんの終始ではない。阿部さんの犀利な眼光は纏綿たる人情の裏面に注がれた、漱石以外に虚子以外に絢爛たる筆は何物をか寫し出すに違ひなかつた。

阿部さんは金澤では苦しい生活を續けて居た、然し滅多に友達へは洩さなかつた。主觀の憂苦に漂泊はしない、どこ迄も客觀的な態度は修養されて居た、自己の半面を味ふ餘裕を保つて居た、學校の先生達からは無暗に苦しめられたが然し阿部さんは高等學校の生徒ではない文藝界の一芽生だ、目ざす處は學問の切實なんかする醜惡な俗界にはない、千古に渡つて清淨な花の開く藝術にあつた、阿部さんの意氣は一高等學校裡に蠢々する様なけちなものではなかつた。

阿部さんは親切な人であつた、同情のある人であつた、頼めば片肌をぬぐ人であつた、優しい俠骨のある人であつた。

思へばあの客觀的な態度に、同情に、犀利な眼光に、あの美しい筆を結んだら阿部さんの作物がどんなものかは容易く想像が出来るだらう、明治の文藝は過渡の文藝である、僅かに十年の過去を見ても眼まぐるしいほど、變遷に變遷を重ねて居る、近頃は刺戟に生きんとする文藝と云ふもの迄を製造して居る、然し日本の色彩は充分に發現はして居まい、日本の色彩はイブセンを學んだからとて、ダンヌンチオに學んだからとて製出せられるものではあるまい、日本には日本固有の色彩がなくばならぬ誰れか此の色彩を見つけ出すか、即それは文壇の芽生、文壇の未知數である、と思へばいやが上に阿部さんの死が惜まれる。

時代の色彩は天才の鍵を待つ計りだ、阿部さんの筆と態度と同情と觀察とはそれづくりに持つて居る人があらう、只之れを渾然として統一し結付けるものは未知數たる阿部さんの未來に求むるより外はなかつた、が嗚呼今は絶望である、雅味のない歟は此芽生を追ひ、無情な運命は此芽生を枯して了つた。

これより後、日本の文藝界に波瀾軸を卷いて來る度に、あゝ阿部さんが居たならばと思ふであらう。無情な運命は無理にもあきらめるとした所で、強てそれに投込んだ雅味のない二十世紀の文明に願使されて居る歟は永久に僕の頭腦を去る事は出来ぬ。

金澤の秋も早や暮れる、日どなく晝どなく暗い空からは細い雨が絶えず落ちる。かくて今年も逝くであらう。嗚呼優しい偉人阿部さんを咀ひ奪うた己酉の年もかくて暮れるであらう。

無名の偉人！優しい偉人！！雅味のない二十世紀の日本は顧みもせず忘れらるであらう、唯悲慘な經歷を友達となつて味つた僕の胸を如何とかする。

○

秋の夜に 何驚いて 鳥呼應
卒塔婆の墨の流れ悲し返り花

平 手 松 藏

秋雨君をおもふ

山 田 敏 一

秋雨君が今秋九月東都の一火災の爲めに焼死された事は、誠に奇禍中の奇禍であつて、痛恨の極みと云はねばならぬ。僕は秋雨君とは暫らくの間ではあつたが随分親しく、交際をして居たので、その親しい友の變死と聞いた時は、且つ疑ひ且つ驚き、幾度か其の虚報たるべきを信じようとしたのである。秋雨君の臨終を目撃もせず、遺骸にも接しない僕は、今も猶ほ秋雨君は何處か東京邊に句案でもやつて居る様な姿が目についてならぬ。

僕が初めて秋雨君を知つたのは、實に四高俳句會の席上に於てであつた。四十年の末の事である。雨峯や蛤城と共に梅月庵の句會に初めて膝を列ねた時、僕は紫影先生を知り紅芙蓉を知り、而して秋雨君を知つたのである。當時秋雨君は紅芙蓉と二人で色々會の世話をして居られたのであるが、四十一年も夏になつて紅芙蓉が大學へ入り、紫影先生は名古屋へ轉任されたので、皆は會の方も俄かに淋しくなるのを悲しんだのであつたが、やがて秋になつて繞石先生が來られ芙蓉先生も會へ出られる様になつたので復賑やかになつた。秋雨君は非常に喜んで、美島雄泉などと共に熱心に句に勵む様になつた。而して今年の夏まで、終始滄事なく、我四高俳壇の爲めに奮勵して呉れたのである。此間に亘つて僕等は、會毎には大抵席末に加はつて、僕の如きは句作の上に於て斷えず秋雨君の指導を仰いで居たので、僕は此の點に關しては永く秋雨君の恩誼を忘れる事が出來ないのである。

四十一年の秋から、僕は、市内堅町にある崇信學舎といふ佛教臭味の塾生活の中へ入る事となつて、計らずも秋雨君と殆ど一箇年間を同じ屋根の下に同じ釜の飯を食ふ事になつた。一箇年と云つてしまへば短い間の様ではあるが、之を日數に見積れば三百餘日になる。此の間には随分色色の事もあつた。飯がすんだ後などは何時も寄り合つて、議論をやつたり冗談を言つたり笑つたり怒つたりしたものである。唯しかし、僕等は随分怒つた事などもあるが、秋雨君は未だ嘗て怒つた顔を見せた事がなかつた。また互に各自の室へ往來して眞面目な研究をやつた事なども無論度々あつた。それらの事を、あれやこれやと思ひ起すにつけて、すべて故人を追憶する種ならぬはなす。

今は一々ありし事どもを書き立てる煩雜と冗漫さに堪へぬ。唯茲に秋雨君の雅號の由來に就いて、秋雨君自身から聞いた儘を記しつけて、聊か之を讀まむ人の爲めに故人を偲ぶ一端に供せばやと思ふのである。

雪の降つて居る或る日の夕暮であつた。秋雨君と僕と今一人誰かと三人で火鉢を取圍んで食後の談話を續けて居た。話柄が偶雅號の事に及んで、「紫影先生の號はよく姓に適合した號は滅多にない」などと、秋雨君が雅號に關して話した時に、今一人の者が、「それでは秋雨君、君の號は一體何處から出たのだい」と斯う聞くと、秋雨君は微笑しながら「僕の號ですか、別に深い理由も何もないのですが、ね、僕の中學時代には、丁度中村春雨の小説が大變流行した事があるので、其の時分僕は随分春雨に心酔して居たもんです。而して春雨から思ひ起して秋雨と云ふ事に

したのです」と斯う答へたのであつた。

秋雨君の性格などを色々と思ひ廻らして見ると、いかにも、秋の未頃物淋しく降る雨の氣持に似通つた所が多い様に思はれる。

秋雨君は、いつも僕等に「僕は紫影先生のお蔭でこれ程俳句の學問をしたが知れない」と申して居ましたが、僕等はまた幸にして其の秋雨君が紫影先生から教はつたのであると云つて居た俳句學問をば、秋雨君を通して何時も教はる事が出来たのである。之れ實に永く銘記すべき恩惠である。

今や秋雨君は地下に瞑し、而して美鳥雉泉雨君は大學へ入り、芙蓉仙先生は京都へ轉せられ、繞石先生はまた英國へ留學され、我が四高俳句會は甚だ寂寥の感なきにあらずである。僕等の微力は容易に此寥廓の空氣を振作するに足らない。幸に秋雨君よ、死して、俳句の神となつて我四高の俳壇の爲めに援護の力を添へて呉れたまへ。僕等元より謏劣と雖も、一日も君の志を繼ぐに怠らないのである。

秋雨君の事を思ひ出せば、色々書きたい事も澤山あるが、書けば限りのない事で、有限な紙面に於ては之を書き盡し難いから、之位にして止める。筆を擱ぐに臨んで、深く故人秋雨君の冥福を祈る。

追悼の句ならず線香冷かに

忌日頒布の像描く日や暮れ早き

わが腦裏に刻せられたる秋雨君

百橋遊芳

愛讀して居た書物を手ばなして、古本屋へ賣りとばす、得た金は蕎麥か餛飩に化けて仕舞ふと、後に頭蓋骨の内面に唸つてるものは書物の形、表装、記事ばかり、それが寄り集まつて「あの本が惜しいな」といふ思を作り出すのである、それも得た金を濫發して財布の中が虚になる事急なればなる程層一倍にその書物の印象が頭に深い、凡て世の中の物、眼の前にぶら下がつてる間はサ程其物を思つて居ない、イヤ少なくとも其物の存在を感じる度合いが薄められる事は事實である。

阿部君が生きて居た時分は、一つ學校で破けた洋服を着て毎日顔を會はして居る、人間一匹別に何んとも思つて居なかつた、唯だ二三日顔を見ぬ事があると親しく交はつて居た友達甲斐に氣にせんではなかつたが病氣なんか巫談にもしそもない男だから「呑氣な野良また下宿に寝をべつて天井の節穴でも數えて居やがる」と位しか思つて居なかつた、が然しモ一世の中から消え去つて、永久に會へないとなると、サア惜しくなつてくる、淋しくなつてたまらぬ、悲しくつてやり切れぬ。しかも急も急か昨夜晩くまで百年も生きる顔で笑つて居た強健な男が明る朝は黒焦の焼死、慘鼻な姿で世界を離れて行つたのだ、人間の命は解らぬものと百も承知でも、急なものと慘鼻なだけ特別、君の印象が強烈に僕の神經を刺撃してゐるのである。生前の起居動作話振りが先づ頭に浮んで来る、受けた恩が非常に難有なつて来る、こゝになると胸の底の淋しい悲しい思いが「あ

わ、少し生きて居たら」と残り惜しい感じに搖ぎ出されてあの喧しくワイ／＼言はれた賓頭盧尊者に似た君の顔を描き出す、顔がフ／＼と胸一杯に襲ひ來るので、つい妙な心持になる。何んとも言へぬ熱い涙がハラ／＼と眼から落つるのである。

僕が阿部君に接したのは一昨年九月四高俳句會が初お目見えで「ヤア失敬」と挨拶して阿部君が僕の顔を見た、僕が君の顔を見た視線と視線と出會した、時阿部君の眼鏡が「意氣投合」とでも光つたか僕には君が非常に面白い人だと思はれた——今考ひて見ると此の日の俳句會で最高點を占めた君の句の

普天の下卒土の民の月見かな

に大得意に笑つた顔が眼の前にうろついて何んだかたまらぬ様な氣がする——僕は君が氣に入つて仕様がないう我慢出來ないで二三日たつて突然君の宿を訪問した、話して見ると何うも僕の胸の中が他の人よりも、より能く解かる様に思はれた。實際氣が合つたかも知れぬ。僕は其の當時或る境遇の爲めに悲しい思をしたり、苦しい思をして居たのだからそれから此んな厭やな感じに襲はれると必ず阿部君の宿にかつぎ込んだ、君はいつも慰めてくれる、氣が晴々して歸へつた事が幾度あつたか知れぬ。此んな具合で僕は屢々君の宿を訪づれた、いつかはなしに遂に君とは親しく交はるに至つたのである。今思つて見ると阿部君は實に僕を可愛がつてくれたのだ、僕の苦しみの幾分の分けまいを自分でしてくれたに相違ない、僕は君の可憐な弟の様な氣がしてならないのである。それと同時に阿部君は僕の慰藉の恩人だ、同情厚い兄であつたと云ふ尊敬と親し

みの念が頭に起こる恐らく此の念は君が焼死の新聞記事を見た時に感じた悲愴の刺撃とは僕の一生記憶から去らぬであらう。

阿部君は天才肌の人であつた事は誰も知つてゐる所である、國文學に掛けたら確に四高學生中第一であつたと僕は信じてゐる。僕が宿を訪ねると能く文學の話が聞かされたものだ、少ないながらも僕が文學に興味を持つ様になつたのも全く君の御蔭である。此の點から言へば君は僕の先生であつたのだ。阿部君は文章も書けば和歌も作つた、或時は四高の和歌會に押し掛けて其重鎮を壓倒して最高點を占めた事もある。然し君は俳句には特別多大の興味を持つて居た従つて頗ぶる上手であつた。句會では常に牛耳を握つて大將軍に奉られて居たのである。句作は趣味と腕押の勢、随分熱心で盛んなものであつた。いつも下宿の机の中には句屑が轉がつて居たり句稿が開かれてあつた。而かも句作は頗ぶる速やかであつた、句會に出ても盛に句の話をしている。○等面白いから連れ込まれて話を聞いている、僕等が四五句作り掛けた時分はいつの間にか即題の二十句ばかりを作り終つて仕舞つてゐる。のみならず阿部君は非常に趣味に忠實であつた、學校から一日掛けに演習旅行をやつても遠足に出掛けても俳句の二三十句は必ず土産に持つて歸へつた人であつた。句集を讀んだ事は新句集も多く讀んだが比較的古人の句集を愛讀して居た。十七文字を並べて、おいそれ俳句といふ僕等連中、よく君に蕪村を引き合に出されたり、芭蕉や碧梧桐を振り廻はされてギアフンやり込められた事も度々であつた。阿部君はまた非常な讀書家であつた、文學に關する書物なら新舊選ばず手當り次第ドン／＼讀んだ而かも例の國文學に對する熱心な研究者であつ

たから、此の道には見聞の廣い事は恐れ入つたものである。加ふるに書に趣味を以て居た、自分では別に揮毫しなかつたが飄輕な俳畫に對しては頗ぶる面白がつて居た様である、近頃不折畫伯がかく畫の如きは餘程氣に入つて居たらしかつた。文字も亦た中々立派に書いた。こんな風に出來上がつて居た人だから文學上あらゆる方面から狩り集めて來た新思想新智識は自己獨特な天才の力で淘汰して盛に君が俳句を生み出したのである。だから阿部君の俳句は豊富なる新思想と夥多なる新語とに満たされて、我が俳句會同人の上に優に一頭角を抜いで居たのである。實に君は四高俳句の上に立ちて時代思潮に遅れざる様指導して居たかの如く思はる。此れ位に阿部君の俳句は四高俳人の間に聲價を有して居たものであるが此れ等俳句の色を見ると輕妙滑稽趣味の句は至つて僅少で多くは花やかな奇麗な句か、さもなくば地味な淋しみのある重みな句の様に思はる、然し此は阿部君が至つて圓滿な人で奇抜な點は殆んど見られなかつた性格を有して居たから自分自身の性格が然らしめたのであらう。阿部君は佛教が好きになつたと見えて自分の下宿を佛教信者の宿舎に轉じたのみならず俳句にも盛に宗教趣味の含めるものを作り出した。君はまた俳句に對しては随分自重して居たらしい所謂飛ばす鳴かずとも云はふか自分の句を他に發表してツイく騒ぐのを欲しなかつた様であつた然し死ぬ暫く前には俳句に對する自信がついたと見えて愈々中央俳壇に雄飛せんとしてか絶えず中央公論の俳壇に投句して居たのである。之れまで、阿部君が四高の俳句界で活動した幕は終るのである。君は笈を負うて東都に上つた。恐らく大なる抱負があつた事は疑はない。あの天才にしてあの腕があるのだ尙ほ四五年揣摩の功

を積みしめたら定めし其活動は目覺しいものだつたらうが……あゝ阿部君は死んで仕舞つたのだ。君の上京は死の門をくゞる爲めだつた。運命が呪の火に焼き殺されん爲めに上京したのである。下宿に残して行つた句稿のみでも數千ある。そして此れ等が阿部君の歴史の一頁を作りだすのである。俳句は或は阿部君の生命であつたかも知れぬ。

兎に角く才腕ある有爲の青年を失つた社會を憐むのであるが然し其れよりも恩人と師と兄とを一所に集めた阿部君を煙の中に取り去られた僕自身を憐むの感じが痛切である。

花 桐 の 門 忘 れ め や 素 讀 の 師

此句は阿部君が僕に記念として殘した句である

あゝ冬枯の世はしみくゞと我身にこたへる。

問へど不答難解の句の寒さかな

寒き夜を愚痴につき見る破れ鏡

親船の難破小舟の吹雪かな

終りに臨んで君の追悼會を營みし際、盞、雨、童、先生が靈前に捧げられし悼句を録して置く

句題更に傷心を覺ゆ秋の雨

雨 童

亡き人の御靈祭るや萩の花

上 田 兵 藏

嗚呼阿部眞見君

芳野 幹 一

白雲高く揚り、秋風渡らんとする九月八日、吾等が敬慕せる阿部眞見君、忽然流星の如く去り給ふ。吁、九月八日、これや、吾等の腦裏に永久忘るゝ能はざる悲痛の印象を鏤刻したる日なりけり、

想ふ、君が突然上京せしは八月中旬の事なりき、未だ席暖まる暇あらざるに悲喜忽ち掌を反して、遽然君の訃に接せんとは。天地茫茫、問ふべからず。人生の事、笑ふべき乎、泣くべき乎。哀哉。芳蘭夭折して幽明境を異にし、再び相見ゆるを得ず、高蹤を追ひ、既往を顧みれば、徒らに敬慕の情を加ふるあるのみ。吁、吾等、君の高風に接し、神采に觸るゝの間、幸に君の指導によりて、蒙りし教化は今に至りて大なるを感せずんばあらず。

然りと雖も、吾等徒らに婦女の泣を學んで君が知を空うするものならんや、今より後、吾等此心志を以て失ふなくんば、庶くは君の知遇に背かざるを得んか。噫。

坂井 三 吾

○ 俤を三度も夢や長さ夜に

秋蚊帳に君が最後を思ひ見て

俳星と云ふにありけむ星月夜

噫、秋雨

鈴木 敏 也

晩秋の夕づく日、野末に落ちて

梔子の彩なす雲の薄れゆけば

節曲、寒う、飴屋の笛も遠に消えて

川添の片側町は、狭霧に霑れつ

「静寂」の鈍色衣、嚮包みぬ。

……君偲び、頸だれて、われは獨り……

月の八日、夜半の夢裂く警鐘の音、

闇空を朱にぞ焦す、本郷臺、

あな、三層樓、——君が宿りは火の柱、

荒ぶ風、狂ふ炎に、崩れて落ちて、……夜は明けぬ。

とも知らで竹柏の香高き南の古城の杜の下路に

「閑古鳥のように明日から、寂しかる」と

君が句、そいろ口誦み居ぬ。

ありし日の追懐の一節や。——香林坊の春の宵、
 花草の縷れて纏る、樂の音に、灯も艶やかなの照葉の一座
 「松風」の舞の手に、「船辨慶」の小鼓に
 遐かなる夢の御郷を懐かしみ。——さてはまた、
 春の湊の行末や、「藤戸」のシテが面影人を聯想ひては
 御前に跪く、彼こそはあをさんがりよ、ひようすぽよと
 笑み戯ればみて興じ合ひ、木戸をくれば麗月、
 柳にかゝる街がしら。

また偲ぶ。青水無月の午さがり
 初夏の風を集めし君が室に
 近代の潮と揺たふ思想に、若き心を轟かし
 祖國の藝苑に咲き薫ゆる「寂びの泉」を語りては
 頼に昂れる君が眉目に湧出づる興止めあはず
 暮れがたの夏の夕の暮るゝも知らで
 薄明を、暇申して罷んでし、——あゝ三十日
 最後なりき、君と相見し。

行く秋の小練雨、空拂ふ風の音共に零れきぬ
 往きかふ人、駆けゆく俤、——朱に、藍にはた紫に色ぞ耀ふ大通、
 雑沓を右に避け、ひたぶるに堅町ゆけば
 工場歸りの若人か、聲高に語り合ひて過ぎざりぬ
 あなこゝも「生」に追はるゝせわしなさ……
 ふと立止り、見上ぐれば門札の墨の香りも、けぞやかに
 「崇信學舎」——ありにし君がかり宿。

闇黒を落し来る、雨の糸も
 町並の灯影に映えて、銀となるを
 蒼空を斜に飛びし、血紅星の
 など永遠に消え果て、光なきぞ
 「あれ聞けど時雨来る夜の鐘の聲」に
 ……胸ふたぎ、涙ぐみ、われはひとり……。

(亡友、七七日夜稿)

前、雑誌部員、阿部真見君の死に、堪へ難きまで心の痛みを覺えたるわれらは、せめて亡友を、ぶのよすがに
 附 録

もて、諸方へ追悼文を仰き候處、わが微意を諒せられ、三先生初め、諸君の寄稿を得たるはいたくわれらの感謝する所にて候、唯いろ／＼の事情のため、故人の心友たる紅芙蓉京木子等二三の辭を締切までに収め得ざりしはかへす／＼も遺憾にけふが、これ偏にわが罪にて、亡友に對し深く慚謝いたす次第に候。(さしや)

投稿者諸君へ御断り今回は雜報欄非常に幅濶したるにより止むを得ず本欄の投稿にして次號へ廻したる向あり惡しからず御了知を乞ふ。

又、擬國會記事は都合により次號に譲りたり。

投 書 心 得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治四十一年十二月二十日印刷
 明治四十二年十二月二十二日發行

編輯兼發行者 吉 村 政 行
石川縣金澤市早道町五十六番地
 印刷者 沼 倍 男
同縣同市穴水町二番丁廿九番地
 印刷所 明治印刷株式會社
同縣同市高岡町九十番地
 發行所 第四高等學校北辰會

